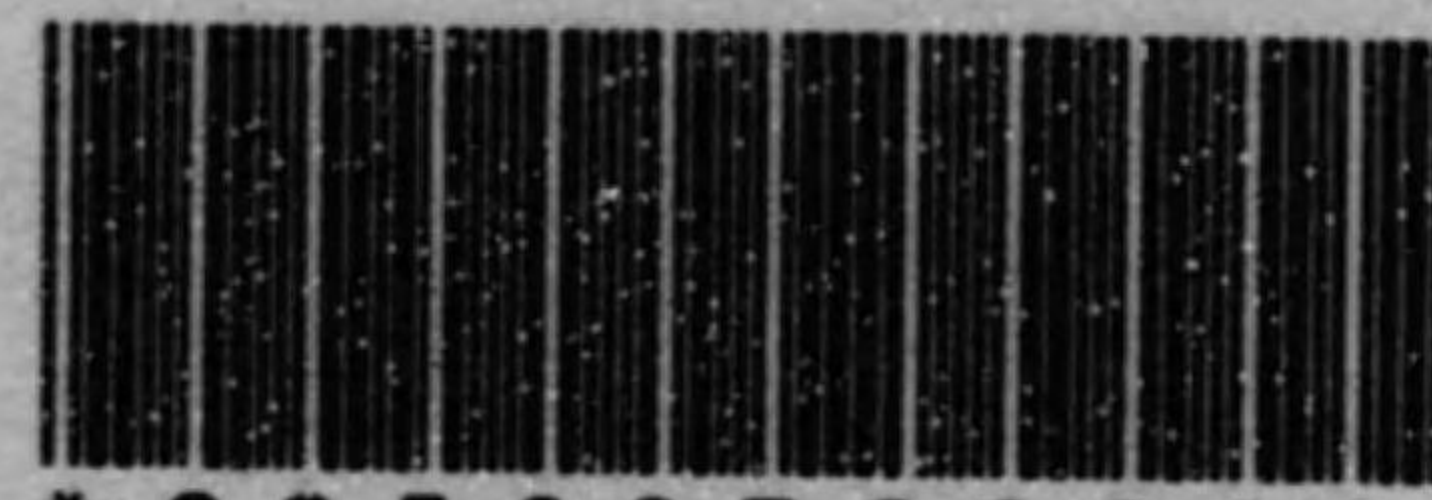


58/
97



0056973000

0056973-000

581-97

軍用犬ノ飼育ト訓練

陸軍歩兵学校研究部・著

陸軍歩兵学校将校集会所

昭和3

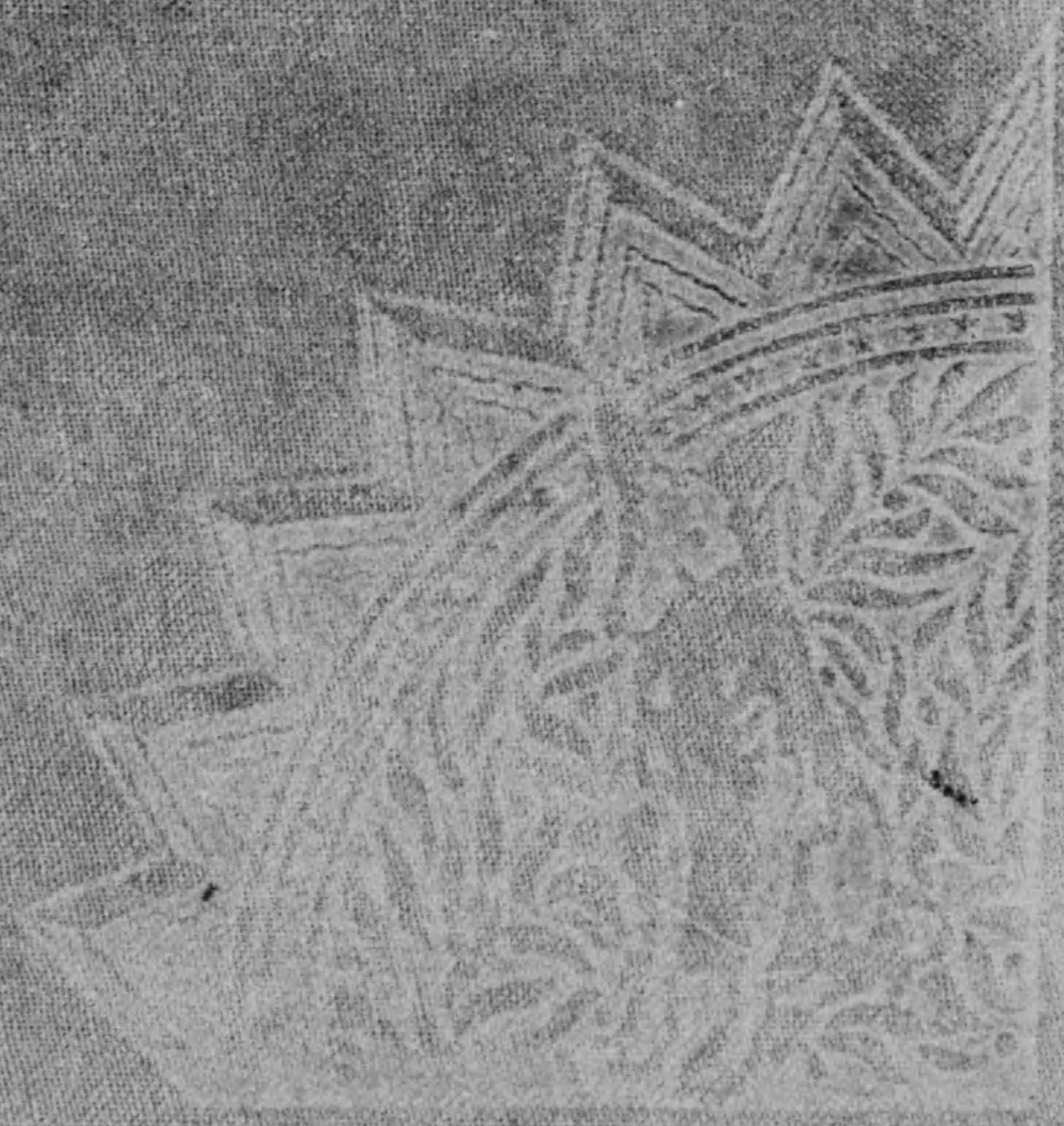
AJE

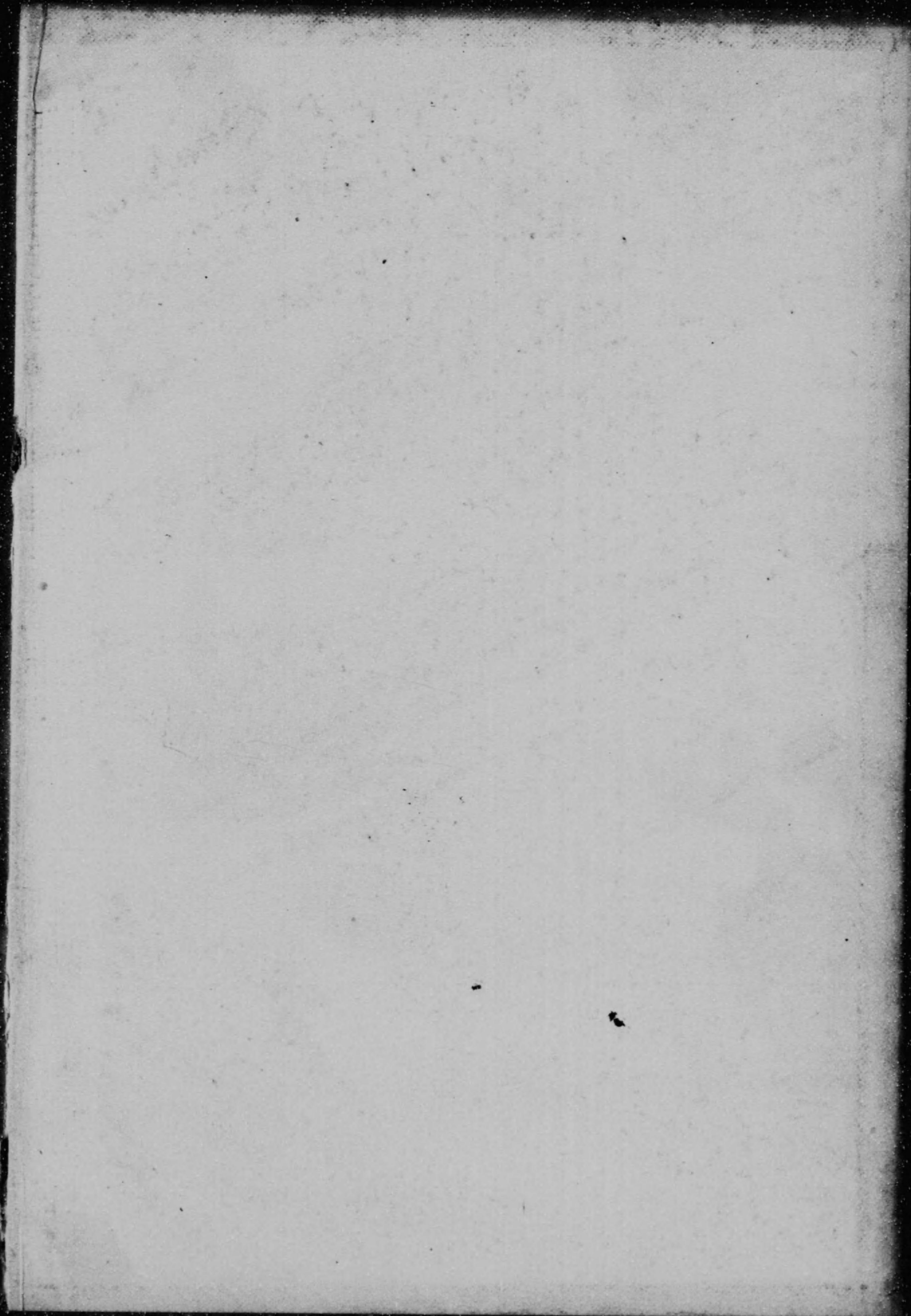
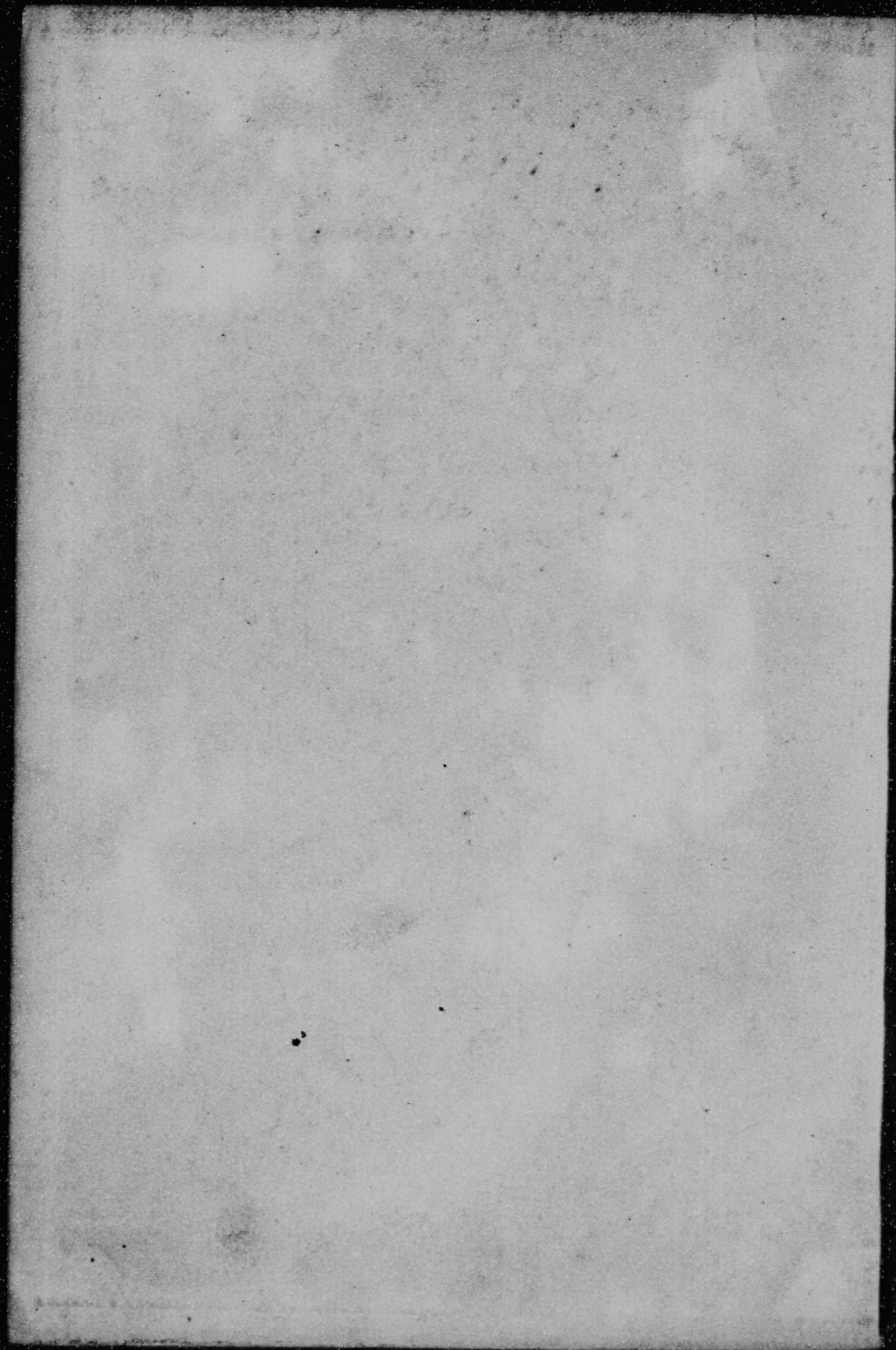
581

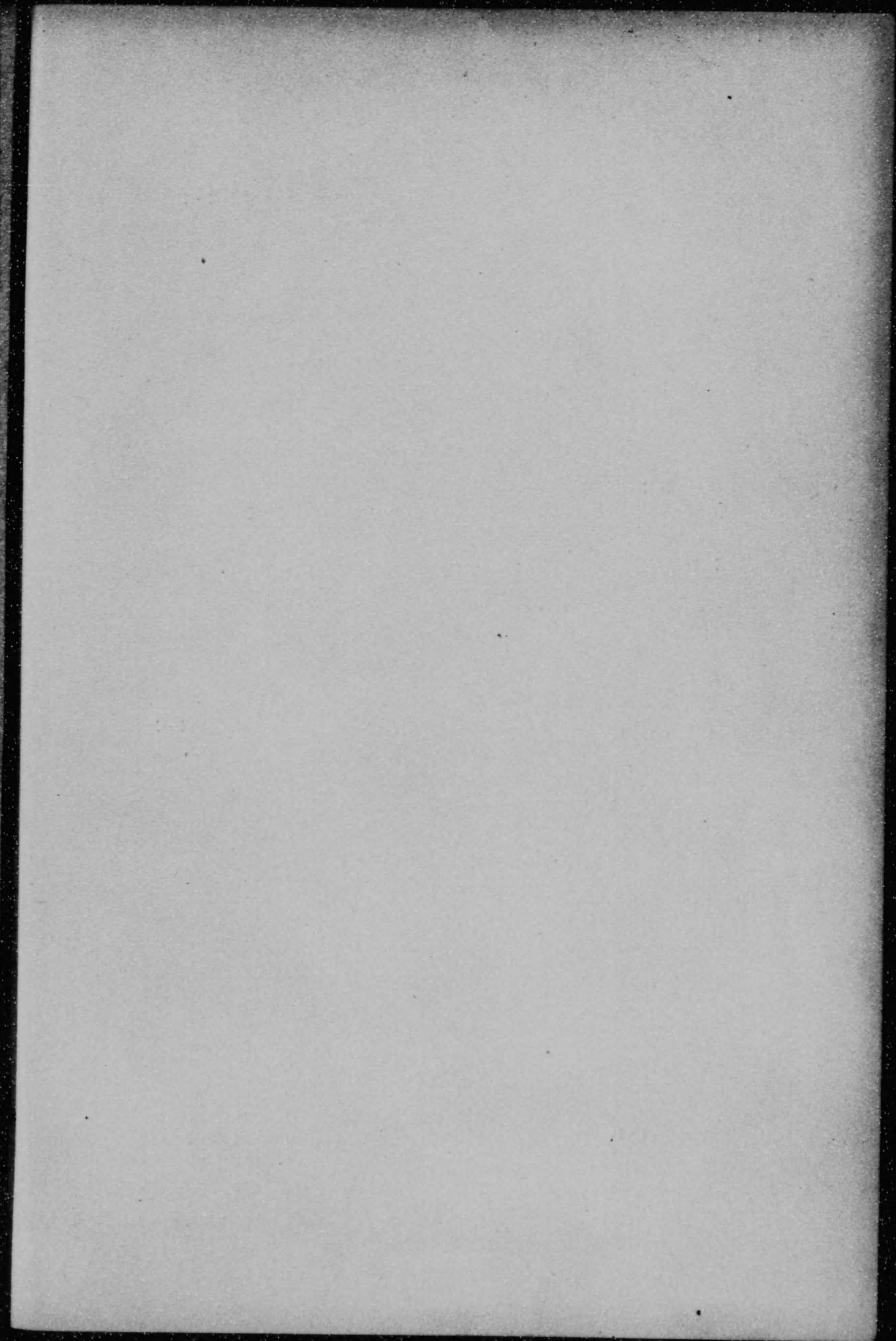
97

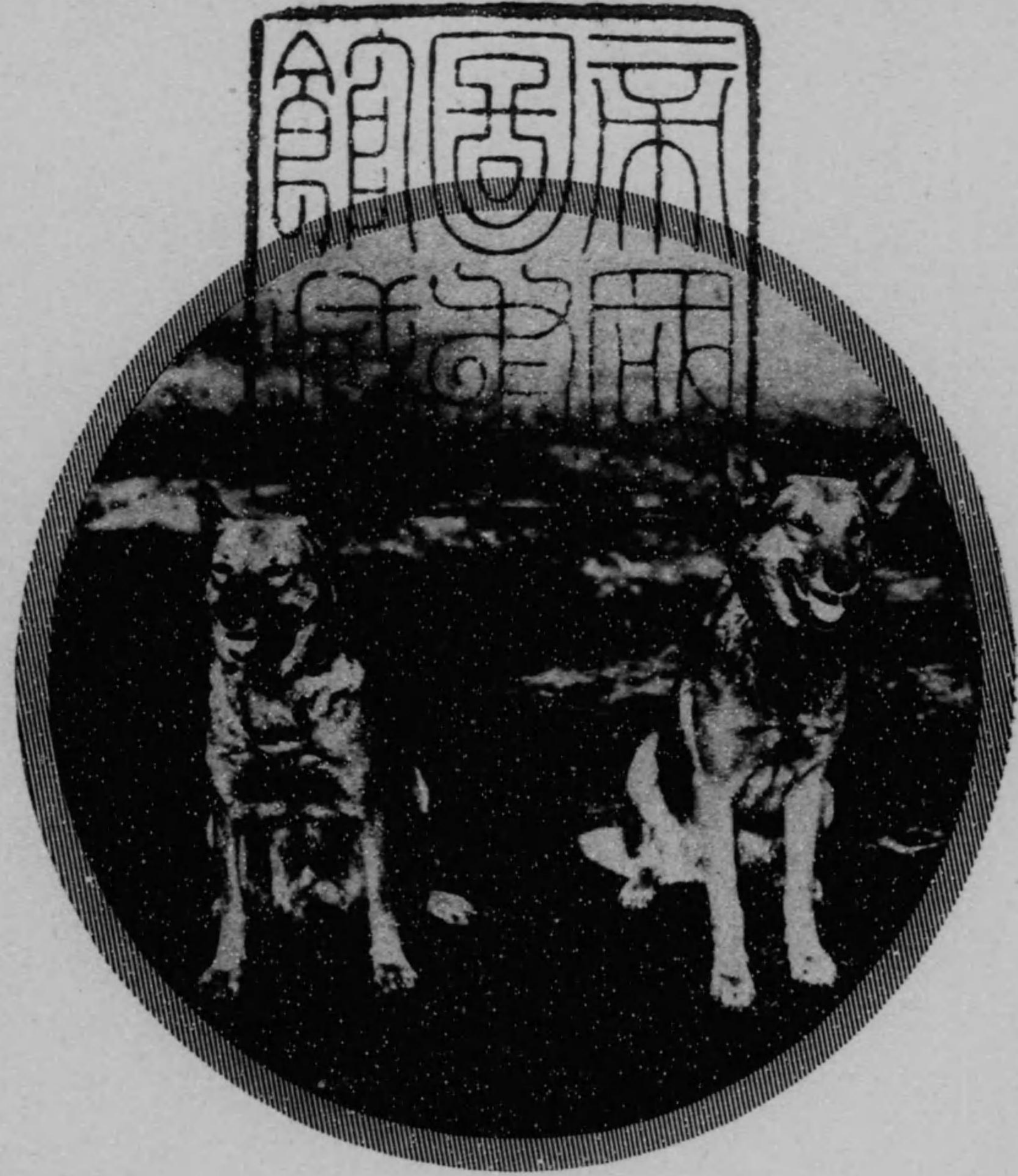
軍用大綱訓練

陸軍步兵學校研究部







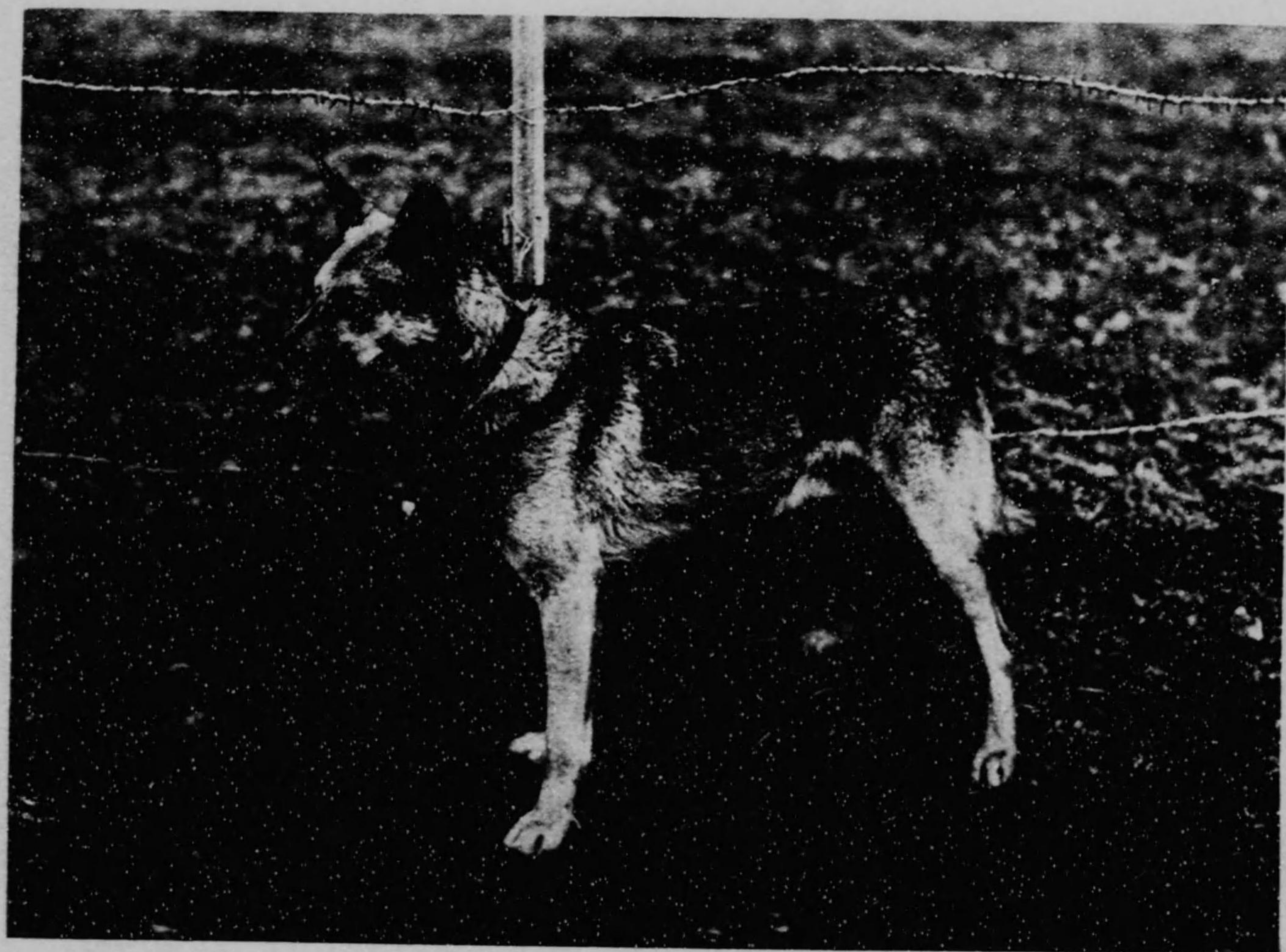


練訓卜育飼ノ犬用軍

校學兵步軍陸

著部究研





セーファー、フンド種

イツ 號 六 才

(歩兵學校産)

獨逸境太利等ニ於テ警察犬及軍用犬トシテ盛
ニ飼育セルモノニシテ體ハ良ク外界ノ感作特
ニ氣候不順ナル地方及高山等ノ使用ニ耐ヘ性
質伶俐、忠實且ツ未知ノ人ヲ信ゼザル美点ヲ
有シ、最優秀ナル犬種ナリ。

(2) 繪 口



ドーベルマン、ピンシエル種

アルグス號 (獨逸産)

故北白川宮成久王殿下ヨリ特ニ本校ニ御下賜
セラレタルモノ

獨逸、諸國ニ於テ警察並軍用犬トシテ飼養セ
ルモノニシテ、謙從性ト活潑性ヲ有シ、體形
ノ美ト優雅性トハ他ノ追從ヲ許サル所ナリ

(3) 繪 口



セーファー、フンド種

クロー號 六オ

(青島産)

(4) 繪 口



エアール種

シヨックク號

三オ

(シドニー産)

歐洲諸國ニ於テ軍用犬トシテ盛ニ飼育セラレ
特ニエアール種、テリヤ種ハ軍用犬ノ優良ナ
ル犬種ナリ。

(5) 繪 口



コ
リ
ー
種

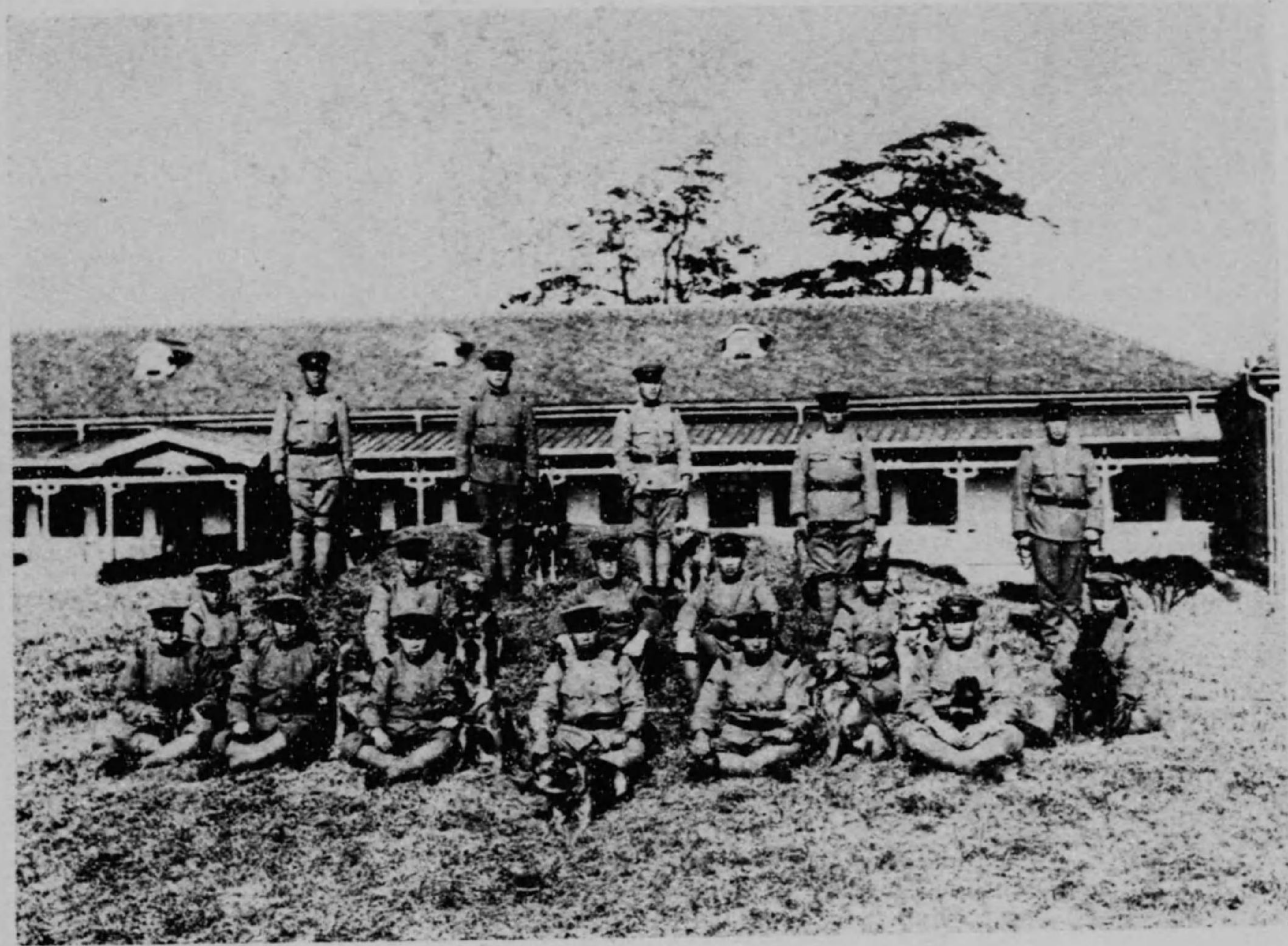
ノ
フ
號
ニ
オ

(内地産)

英國軍用犬ノ過半ヲ占ムルモノニシテ極メテ
伶俐ニシテ歩哨及搜索ノ勤務ニ適ス。

軍用犬ノ現況
(昭和二年)

(7) 口繪



步兵學校

昭和二年度

軍用犬取扱兵ト軍用犬ノ大部

(二十六頭中十五頭)

(6) 口繪

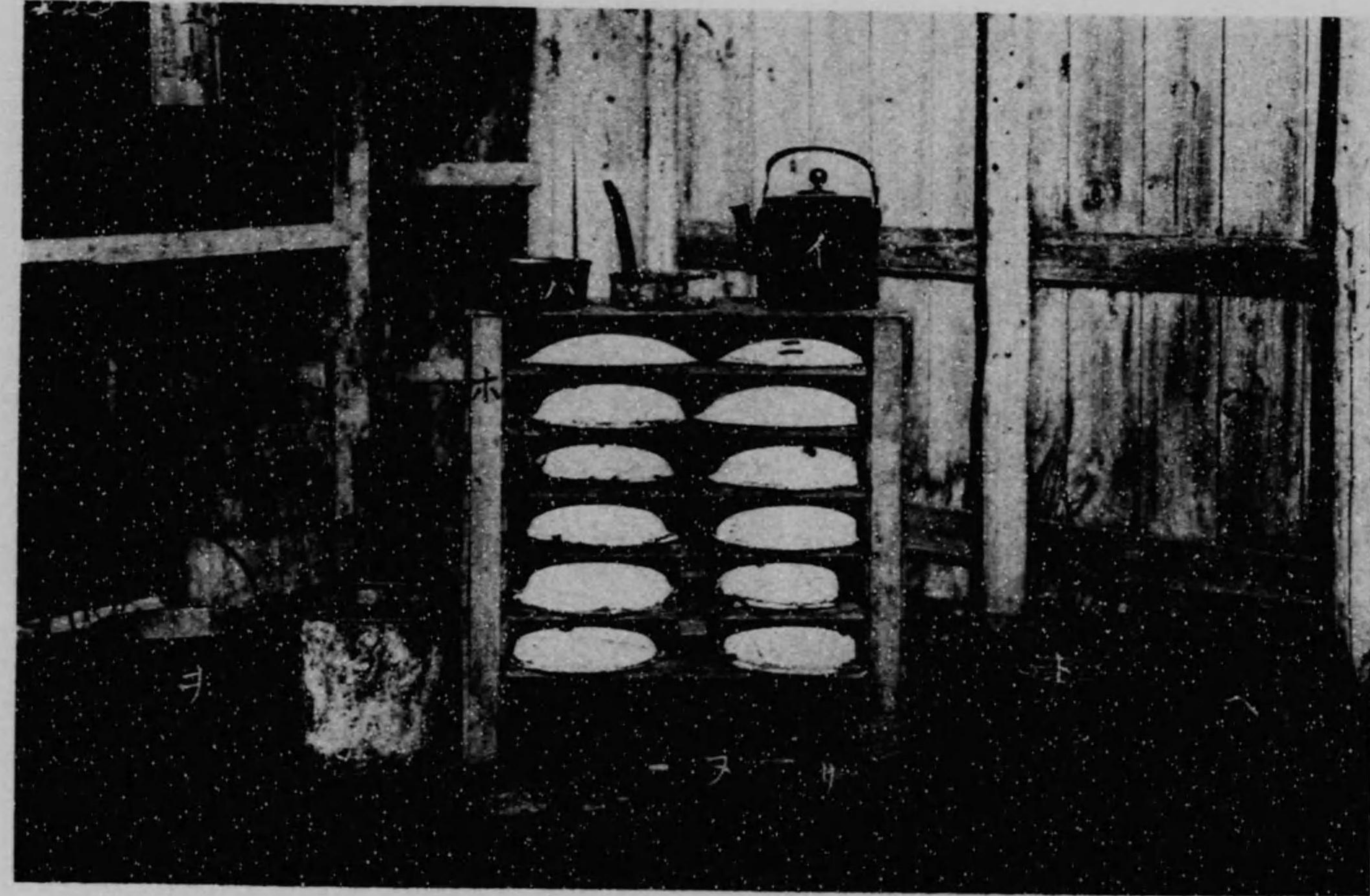


樺太犬種

ジョン號

四才

輓曳犬ニ適ス



名 稱	用 途
イ 茶 瓶	湯ヲ沸スニ用フ
ロ 汁 杓 子	汁ノ分配ニ用フ
ハ 小 鍋	野外又ハ出張ノ時食餌煮用
ニ 食 器	食餌ヲ與フルニ用フ
ホ 食 器 棚	食器ヲ納メ置クニ用フ
ヘ 食 事 運 搬 桶	常ニ食事ヲ炊事ヨリ運ブニ用フ
ト 味 噌 嚢	汁中ニアル肉類ヲ汲取り分配ニ用フ
チ 鍋	肉類ヲ煮ルニ用フ
リ 俎	肉野菜類ヲ切ルニ用フ
ス 出 及 包 丁	物ヲ切レニ用フ
ル 馬 欠	汁ヲ入レルニ用フ

581-97

序

有能ナル犬ガ軍用ニ供セラレ偉功ヲ奏シタルノ記録ハ古キ昔ニ始マルモ最近歐洲大戰ニ於ケルガ如ク大規模ニシテ顯著ナルハ無イ、開戦前獨逸ハ戰場ニ犬ノ有効ナルベキヲ豫察シ民間ニ優能犬ノ飼育ヲ獎勵シ一九一一年ニハ既ニ四百頭ノ軍用犬ヲ有シ一九一四年開戦ト共ニ多數ノ犬ヲ戰場ニ送ツテ犬ノ軍用的効果ノ偉大ナルヲ確認シタノデ益々軍用犬ノ充實ヲ圖ルニ至ツタ、英佛、澳、露ノ諸國モ之ニ刺戟セラレテ犬ノ使用ヲ開始シ戰爭中期以後ニ於テ戰場ニ活動シタ列強ノ軍用犬ノ數ハ驚クベキ數ニ達シタノデアアル、而シテ戦後ノ今日ニ於テモ各國共ニ軍用犬ノ充實、訓練並ニ利用法ノ研究ヲ繼續シ敢テ後レザラシコトヲ期シテ居ル、就中獨逸ハ今尙步兵聯隊ニ八十數頭ノ軍用犬ヲ常備シ且該犬種ノ海外輸出ニ制限ヲ加ヘタ

程デアル。

斯ノ如キハ優能ナル犬ガ或點ニ於テ吾人人類ニ優越セル天賦ノ能力ヲ有シ飼主ニ對シ極メテ忠實ニシテ且鞏キ犠牲心ヲ以テ其命令ニ服スルカラデアアル之等ノ美點ハ訓練ニ依リ益々其價値ヲ増大シ戰場ニ於テ傳令、警戒、搜索、衛生、運搬等ノ諸勤務ニ就カシメ、又軍後方ニ於テハ捕鼠、守衛等ノ勤務ヲ課スルヲ得ルニ至ツタノデアアル。

茲ニ優能犬ト謂フノハ「セエーファード」「ドーベルマン、ピンシエール」「エアードル、テリヤ」「コリー」種及各種輓曳犬種等ヲ謂フノデアツテ戰用トシテ優秀ナル體軀ト性質ト有シ訓練ノ効果ノ鮮カナルモノノミデアアル、彼ノ愛玩犬ノ如キ又我國ニ生存スル數多ノ劣種犬ノ如キハ低能犬トシテ除外サレナケレバナラナイ。

優能犬ノ價値ハ大戰ノ試練ニ依リ益々向上シ國防上ニ於テモ必須缺クベカラザル地位ヲ占ムルニ至リ、列強ガ競ツテ之ガ充實ト改良

トニ努力スルニ方リ我國ノミ獨リ等閑ニ付シテ省ミザルハ痛心ノ至リデアアル、凡ソ事ハ必要ニ直面シテ直チニ成ルニ非ズシテ事前ヨリノ準備ニ依ツテ用ヲ辨ズルノデアアルカラ我國ニ於テモ今日ヨリ優能犬ノ充實整備ニ著手セザレバ將來悔ヲ遺スニ至ルベキハ明カデアアル、優能犬ノ充實整備ハ官民ノ覺醒ニ俟タナケレバナラヌ、軍隊ノミニ之ヲ飼養シテモ戰時之ガ補充ノ續カナケレバ軍用トシテ價値ガ無イノデアアル、故ニ吾人ハ一般國民ノ覺醒ニ依リ目下國內ニ生存シテ徒ラニ皇國ノ粟ヲ喰ム四百萬頭ノ低能犬ヲ驅逐シ之ニ代フルニ優能犬ヲ飼養スルコトヲ要望シテ止マナイノデアアル。

近時我國愛犬家ノ間ニ優能犬ノ飼養熱勃興シ各地ニ軍用犬俱樂部成立セントスル状態ニアルハ吾人ノ大ニ意ヲ強ウスル處デアリ又國家ノ爲幸慶トスル處デアアル、希クハ此趨勢ヲ助長シテ優能犬ヲ以テ我が國犬タラシムルノ域ニ進ミタイモノデアアル。

本校ガ茲ニ本書ヲ發表スルノ趣旨ハ一般國民ニ優能犬ニ關スル知識ヲ普及シ且其飼育訓練法ニ一ノ準繩ヲ與フルト共ニ優能犬ノ價値ヲ明カニシテ之ガ飼育蕃殖ヲ獎勵スルノ意ニ外ナラナイ、本書ニ記述スル處ノモノハ大正八年以來本校ニ於ケル研究ノ結果デアツテ何人ト雖モ之ニ依ツテ飼育訓練ヲ實施シ得ルモノデアルコトヲ附言スル若シ夫レ本書ノ爲我國民間ニ犬ノ知識ヲ普及シ之ガ爲優能犬飼育ヲ旺盛ナラシムルノ端緒トナルヲ得バ本書ノ使命ハ達セラレタノデアアル。

昭和三年六月

陸軍歩兵學校研究部

軍用犬ノ飼育ト訓練 目次

第一編 軍用犬學……………	一
第一章 軍用犬ノ性能……………	一
第二章 犬ノ年齢……………	四
第三章 外 貌……………	六
第一節 外貌上ノ特徴……………	六
第二節 外貌上ノ名稱……………	六
第三節 體 格……………	九
第四節 肢勢及步様……………	三
第五節 斷耳、斷尾……………	四
第六節 稟 性……………	五

第四章 解剖生理……………二六

第一節 運動器……………二六

第二節 循環器及呼吸器……………二九

第三節 消化器……………三〇

第四節 皮膚及泌尿器……………三四

第五節 神經系……………三五

第五章 飼養……………二六

第一節 飼料及其種類……………二六

第二節 成犬ノ飼料……………二七

第三節 幼犬ノ養育……………三一

第四節 榮養……………三六

第六章 管理……………三七

第一節 取扱……………三七

第二節 犬舍及犬舍ノ清潔並ニ消毒法……………三八
第三節 皮膚ノ手入……………四七
第四節 運動……………五〇
第五節 軍用犬検査……………五〇
第六節 健否識別……………五一

第七章 蕃殖……………五二

第一節 種犬ノ選擇法……………五三

第二節 交配……………五四

第三節 妊犬ノ取扱……………五五

第四節 分娩……………五七

第八章 衛生……………五八

第一節 一般衛生……………五八

第二節 傳染病……………六二

第二編 軍用犬ノ訓練

第一章 通 則

第三節 呼吸器及循環器ノ疾病	七五
第四節 消化器病及運動器病	八三
第五節 皮膚病及外傷	八六
第六節 寄生蟲病	九二
第一章 通 則	一〇七
第一節 教育學ノ應用	一〇八
第二節 訓練者ト犬トノ親和	一〇九
第三節 訓練者ノ心得	一一一
第四節 訓練開始ノ時期	一一四
第五節 課目ノ進度	一二五
第六節 訓練ノ繼續時間ト場所	一二七
第七節 課目ノ配合	一二八

第二章 基本訓練

第八節 賞 罰	二九
第九節 聲符、視符	三一
第十節 訓練用具ト其用法	三三
第十一節 訓練課目	三五
第二章 基本訓練	三六
第一節 脚側自由常歩	三六
第二節 停 座	三三
第三節 前 進	三七
第四節 伏臥及呼招	四〇
第五節 持 來	四六
第六節 獵ニ食物ヲ採ラナイコト	五三
第七節 音響及光ニ慣レサスコト	五七
第八節 障礙物ノ通過	六〇

第九節 游

泳

一六九

第三章 應用訓練

一七四

第一節 傳令勤務

一七四

第二節 歩哨ノ勤務

一八五

第三節 斥候勤務

一九二

第四節 負傷兵搜索勤務

一九五

第五節 輓曳勤務

一九九

第六節 同一犬ニ對シ各種役務ノ重複訓練

一九九

附錄

其一 「エアードル、テリヤ」種

二〇七

其二 獨逸護羊犬

二一〇

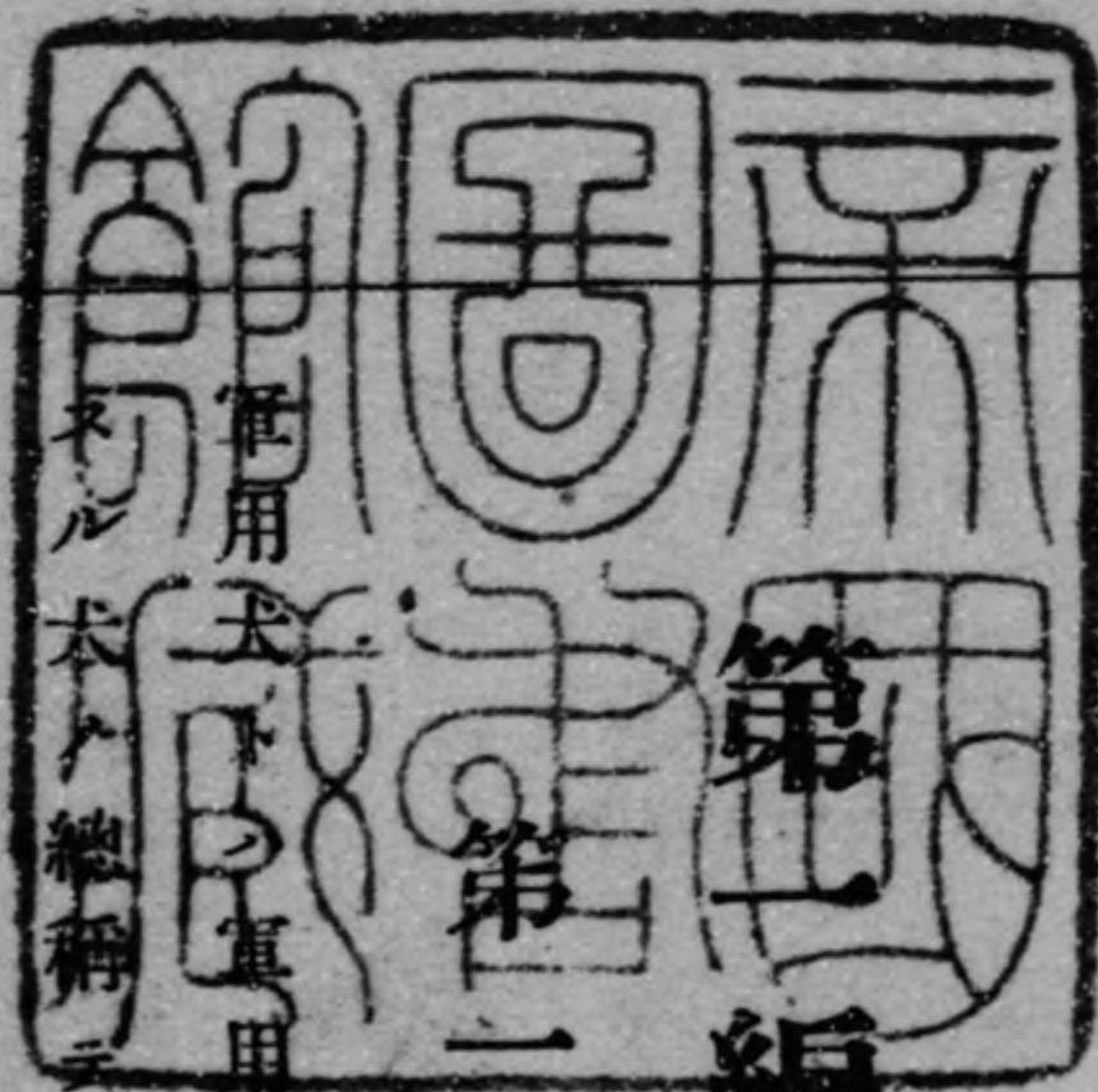
其三 「ドールベルマン、ピンシエル」種

二一六

目次(終)

軍用犬ノ飼育ト訓練

陸軍歩兵學校研究部著



第一編 軍用犬學
第一章 軍用犬ノ性能

軍用犬トシテ軍用ニ供スル目的ヲ以テ軍隊ニ飼養セラレ、軍事諸般ノ役務ニ服
スルモノトシテ、其利用方面ニヨリ傳令犬、警戒犬、搜索犬、運搬犬、捕鼠犬
等ニ區分セラレテ居ル。

抑々犬ヲ軍用ニ供スルノハ、犬ガ或点ニ於テ、吾人人類ニ優越セル天賦ノ性能
ヲ有スルト、飼養主ニ對シ思慕ノ念厚ク、且ツ訓練ノ効果ヲ有スルニ依ルガ爲
デアアル。

然シ乍ラ其能力ハ種類、體格、年齡、訓練、健康狀態等ニヨリ大差ガアルモノデア
ルカラ之等ノ關係ヲ顧慮スルコト十分デナケレバ、其効用ヲ發揮シ難イモノ
デアアル。

種類 人類ハ永年ノ間ニ於テ、犬ニ各々其使用目的ニ應ズル各種ノ特性ヲ附
與シテ了ツタ、獵犬、番羊犬、番犬、救助犬、愛玩犬、闘犬等ガ夫レデアリ軍用犬トシ
テハ此内カラ適當ト認メラルル種類ヲ選定スルノ外ハナイノデアアルガ獵犬
闘犬ハ殆ンド絶望デ番羊犬、番犬、救助犬等ガ有望トセラレテ居ル。則チセエ
フ、アード種、ドーベルマン、ピンシエル種、エアードル、テリヤ種、ロットワイレル
種、コリー種等デアアル。

本邦ニ於テハ近時輸入セラレタル右各種ニ屬スル優良犬種ヲ除ク外ハ軍用
犬ニ適スル犬種ハ皆無トイフベキ有様デアアル。

獨逸ハ近年犬ノ輸出ニ制限ヲ加ヘテ居ル。之ハサモアルベキ事デアアル
他ノ諸外國ガ斯ノ如キ舉ニ出デザル以前右優良犬種ヲ輸入シテ増殖ヲ

圖ル事ハ目下ノ急務デアアルマイカ。

體格、年齡 軍用犬ハ捕鼠犬等ヲ除キ各役種共相當強キ體格ヲ持ツテ居ルコ
トガ必要デアアル。年齡ハ二才乃至六才ノ間ヲ最モ適當トスル。
訓練 如何ニ優秀ナル犬モ、訓練宜シキヲ得ザレバ全ク無能デアアル。

英國ハ南阿戰ノ時ニ犬ヲ使用シタケレドモ、皆單ニ俄仕立ノ犬ノミデア
ツタカラ、犬ノ評判ハ頗ル悪カツタ、然ルニ獨逸ガ大戰間ニ使ツタ犬ハ數
年前カラ善ク訓練準備セラレタモノデアツタカラ其成績ハスバラシイ
モノガアツタ。其後英佛ガ獨逸ニ倣ツテ相當ノ効果ヲ舉ゲタノハ會々
平素國內ニ多數ノ優良犬ガ飼育セラレテ居リ、且ツ戰爭ガ長時日ニ亘ッ
タ爲準備ヲ成シ得ル餘裕ガアツタカラデアアル。

健康狀態 疲勞、飼料ノ不良ハ勿論、疾病ハ其能力ヲ著シク減退セシメル。

性 壯犬ハ一般ニ牝犬ニ比シ強クシテ活潑デアアルケレドモ、往々從順ヲ缺キ牝犬ニ誘惑セラレ任務ヲ放擲スル等ノコトガアル、之ニ反シ牝犬ハ從順ニシテ愛著心深ク嗅覺ノ發達屢々壯犬ニ優リ又警戒心強キヲ一般トシ壯犬ニ優レリト稱セラレテ居ル。然シ之ハ犬次第デ何レトモ決定ハ困難デアアル。

第二章 犬ノ年齢

其一 犬ノ命數

犬ノ命數ハ概ネ十四年(クリスツブ氏ニヨル)ニシテ普通十年位生存スルモノノヤウデアアル。

其二 年齢區分ニヨル犬ノ名稱

取扱上、犬ヲ其年齢ニヨリ幼犬(生後六ヶ月迄)未成犬(六ヶ月—一年)成犬(滿一年以上)ニ區分シ其間滿二才以上六才迄ヲ壯犬ト稱シ犬ノ能力ノ最モ良好ナル時代デアアル。

其三 犬ノ年齢鑑定

犬ノ年齢ハ其容相ト齒牙ノ状態トニヨリ略判斷スルコトガ出來ル。幼齡ノ犬ハ性質無邪氣デ容相ニ若々シサガアリ頭部圓ミヲ帶ビテ居ルガ壯齡ニ達スルト眼光ハ銳ク被毛光澤ヲ生ジ元氣最モ旺盛デアアル、老犬ハ舉動不活潑デ毛ハ光澤ヲ失ヒ眼邊口邊ニハ白毛發生シ齒ハ磨滅著シク互ニ離隔シ來ルモノデアアル、年齢ト齒牙トノ關係左表ノ如クデアアル。

犬		成		未成犬	幼犬 二、三週乳齒	年齢區分	齒牙發生	齒牙脫換	磨減	摘	要
五歲	四歲	三歲	二歲								
					五 一 八 月	白 齒	二 一 六 月	切齒 犬齒	殆 ド ナ シ	生後八ヶ月ニシテ永久齒完成ス	
									下門齒	尖銳端消失ス純白色ナリ	
									下中齒	尖銳端消失シ尙白色ナリ	
									上門齒	尖銳端消失シ齒根ニ齒石ヲ附著	
									上中齒	齒黃色トナル	

第三章 外貌

第一節 外貌上ノ特徴

被毛ハ犬種ニ依リ異リ長毛、短毛、粗毛、軟毛、直毛、縮毛等ノ別ガアルモ犬種ニヨリ特有ナルヲ常トシ全身ノ被毛ガ單一色彩ナルヲ單毛色トイヒ然ラザルヲ複毛色トイフ單毛色ニハ白色、黑色、黃色、褐色、灰色等ガアリ更ニ同色ニ於テモ濃淡ノ別ガアル複毛色ニハ糟毛即チ有色毛ト白色毛トノ混生スルモノト斑毛即チ主色毛ニ大ナル斑紋狀ノ異色毛混成スルモノトガアル。外貌上ノ特徴トシテハ毛色ノ外斷尾、斷耳等ノ特異ナル形態、癩痕、烙印等ヲ舉グベキデアル。

第二節 外貌上ノ名稱 (挿圖第一參照)

犬體ハ之ヲ頭頸、軀幹、四肢ノ三ニ大別シ更ニ局部ニ左ノ如キ名稱ヲ附ス

挿圖

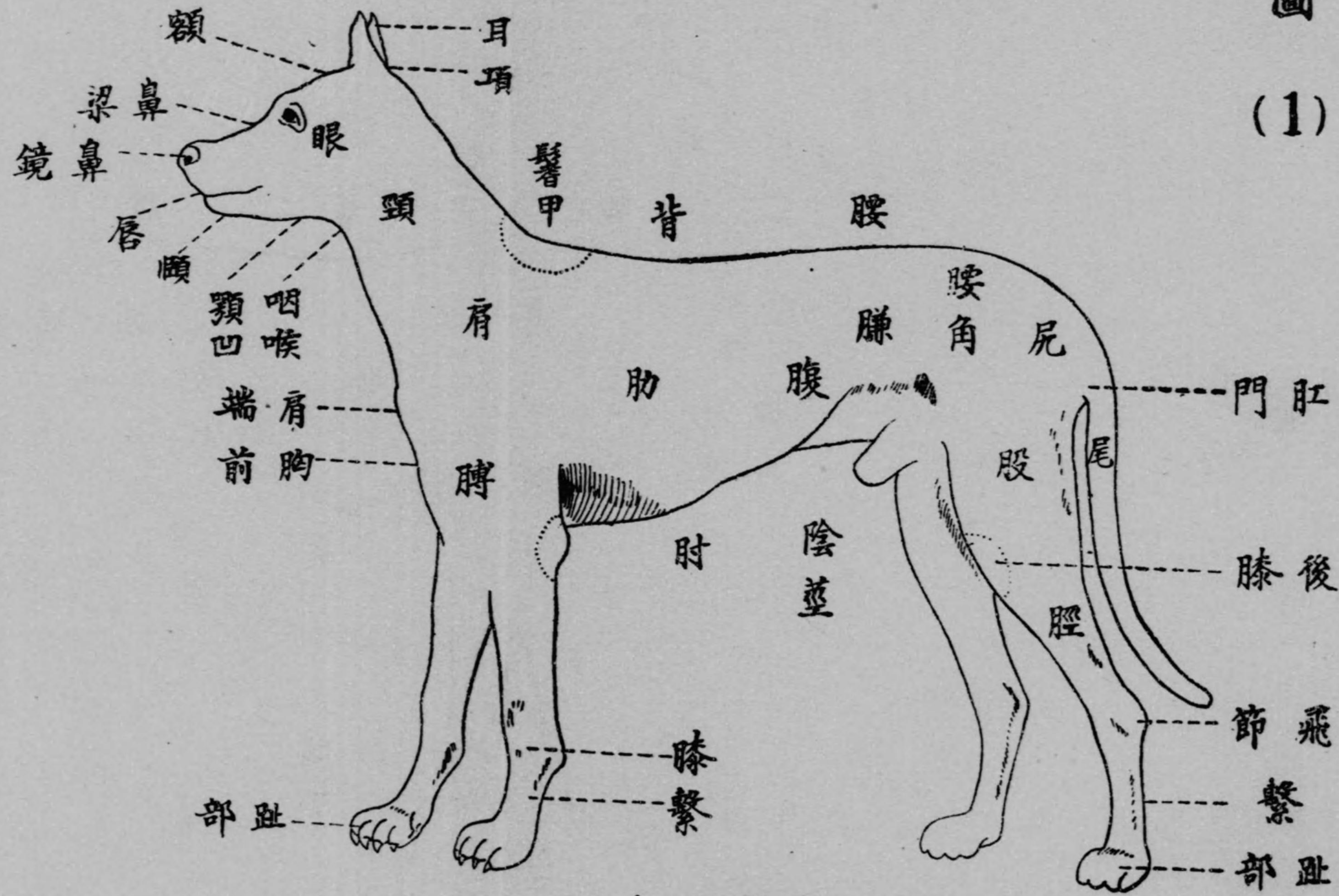
(1)

門 肛
膝 後
節 飛
部 繫
趾

犬體外貌名稱圖

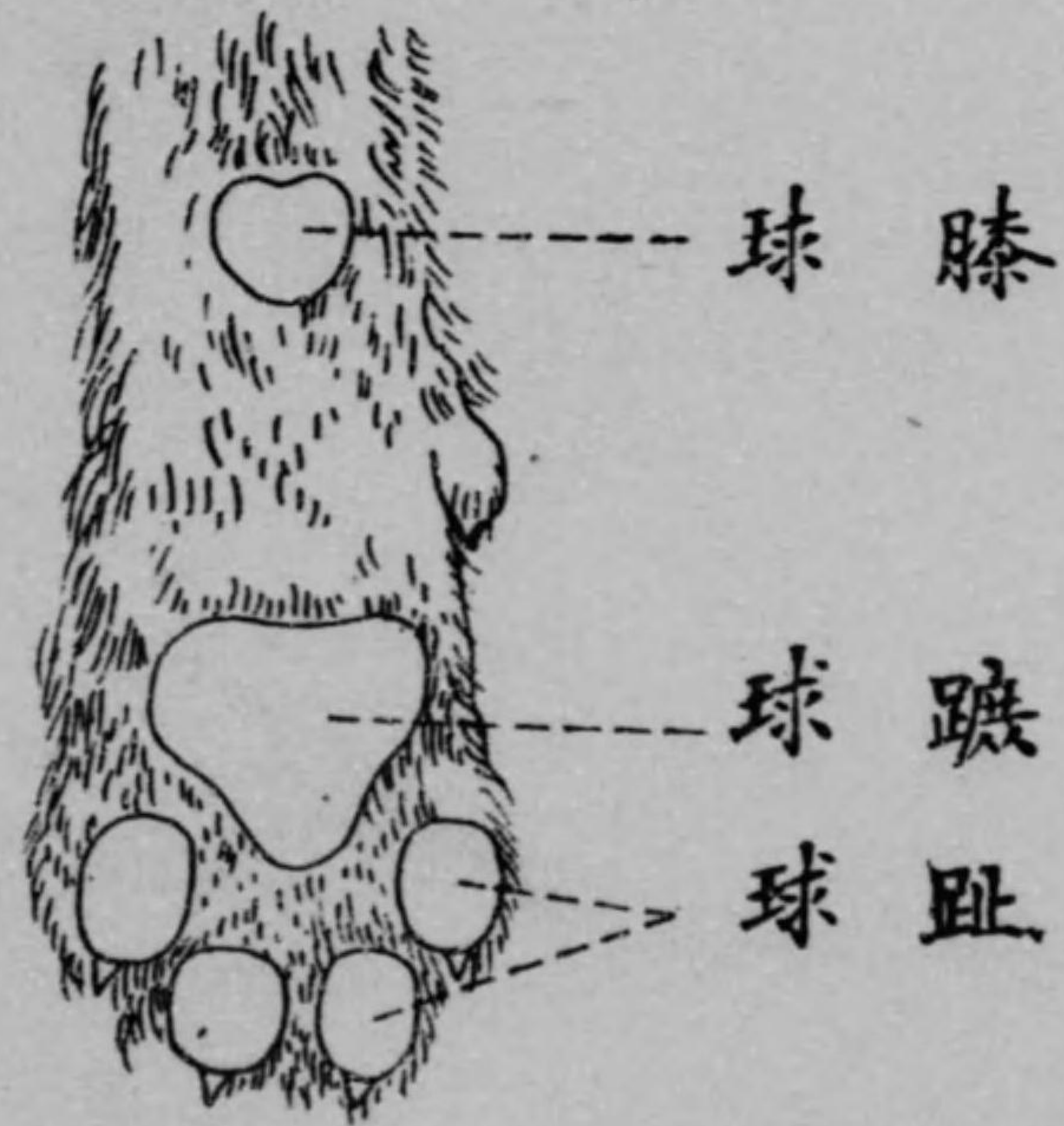
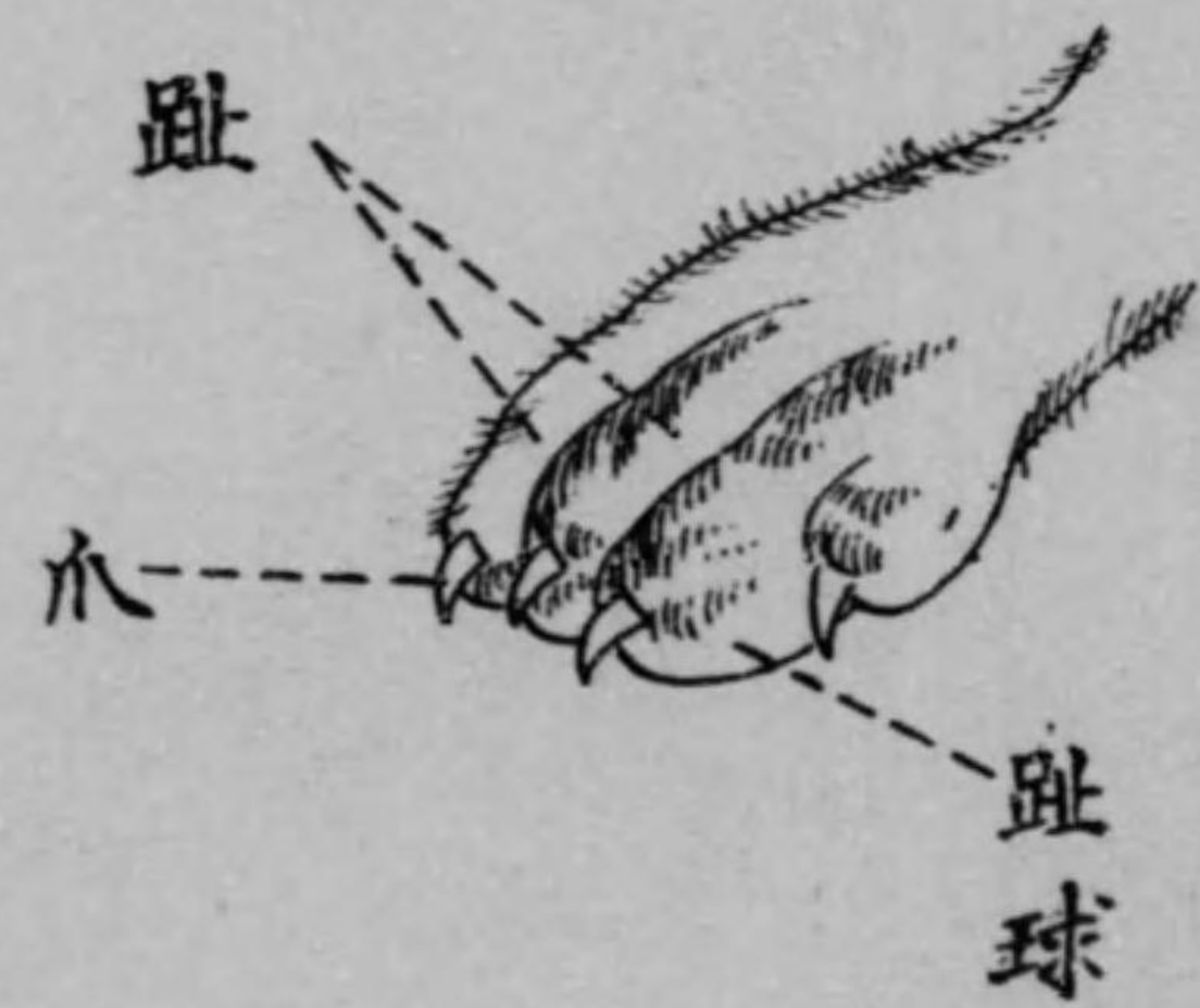
挿圖

(1)



(面蹠部趾)

(面跖部趾)



ニヨリ特有ナルヲ常トシ全身ノ被毛ガ單一色彩ナルヲ單毛色トイヒ然ラザルヲ複毛色トイフ單毛色ニハ白色、黒色、黄色、褐色、灰色等ガアリ更ニ同色ニ於テモ濃淡ノ別ガアル複毛色ニハ糟毛即チ有色毛ト白色毛トノ混生スルモノト斑毛即チ主色毛ニ大ナル斑紋狀ノ異色毛混成スルモノトガアル。外貌上ノ特徴トシテハ毛色ノ外斷尾、斷耳等ノ特異ナル形態、癩痕、烙印等ヲ舉グベキデアル。

第二節 外貌上ノ名稱 (挿圖第一參照)

犬體ハ之ヲ頭頸、軀幹、四肢ノ三ニ大別シ更ニ局部ニ左ノ如キ名稱ヲ附ス

部 頸 頭											大區分		
頸	咽喉	口	頰	鼻	鼻梁	顎頸	頤頰	眼孟	眼	額	項	耳	各部
頸ノ上縁、下縁	顎凹ヨリ顎ニ移ル隅角	上下唇、齒、齒齦、口角、舌	顔面部ノ兩側ヲ云フ	鼻孔、鼻鏡、鼻翼（鼻吻、鼻端）	額ノ下方鼻端ノ上方ニ在リ	上顎、下顎、頤（下唇ノ後方隆起部）、顎凹（下顎兩枝間）	俗ニ「コメカミ」ト稱シ頭ノ上端側面ノ頤頰、顎關節ヲ基礎トス	眼上ノ凹窩ニシテ老齡ニ至レバ著シク凹陷シ白毛ヲ生ズ	睫毛、眼瞼、瞬膜、結膜、角膜、瞳孔、虹彩、眼球	頭ノ前面上部ニシテ前頭骨ヲ基礎トス	頭ノ頂ニシテ兩耳間ノ後方ニ位ス	耳孔（外聽道）、耳朶	摘 要

肢 四	軀 幹											
	脊 峯	背	腰	尻	尾	胸 前	腋 及 腋 間	肋	腹	膝	陰 部	乳 房
後 肢	脊椎前方(第一—第四附近)ノ刺狀凸起ヲ基礎トス	背峯ノ後方ヨリ腰ニ至ル間	背ヨリ尻ニ至ル間	腰角、肛門、臀端(挫骨結節端)	尾根、尾端	上方ハ頸、下方ハ腋、兩側ハ肩ト界ス垂肉(胸垂)アルモノアリ	前膊内上端ト胸ト接スル所ヲ腋ト云ヒ兩腋間ヲ腋間ト云フ			最後肋骨ノ後方ヨリ腰角及股ニ至ル間	陰筒、陰囊、陰門	乳房、乳頭(兩側ニ五個宛)
前 肢												肩膊、肘、前膊、膝、膝球、髻、趾部(蹠球、趾球、爪)
												股、脛、飛節、繫趾部(蹠球、趾球、爪)

第三節 體 格

其一 體 形

犬ノ軀幹ハ肩胛骨ノ後角ト腰角ノ前端ヨリ下シタ垂線ニヨリテ之ヲ前中後ノ三軀ニ區分スル。

體高(脊峰ノ頂点ト地面トノ距離)ト體長(肩端ヨリ臀端ニ至ル水平線ノ長さ)ノ略相等シキ體形ヲ方形型ト謂ヒ體長體高ヨリ長キモノヲ長方形型トイフ。方形型ノ體形ハ軀幹ニ比シテ四肢比較的長キヲ示シ長方形型ノ體形ハ四肢短キカ或ハ軀幹ノ著シク長キヲ示スノデアアル。

其二 各部ノ形態

外貌鑑定上必要ナル各部ノ形態ニ就テ概説スレバ左ノ如クデアアル。

1. 頭頸部

(イ) 頭ノ形狀容相ハ犬ノ種類及稟性ヲ判定シ得ル材料トナルモノデアアル。

頭ニハ大小長短種々アツテ其形狀ニハ直頭(額鼻梁ノ平直ナルモノ)凸

頭(額又ハ鼻梁ノ凸隆スルモノ)凹頭(鼻梁ノ凹灣スルモノ)楔頭(額廣ク眼ノ附近ヨリ急ニ細長トナルモノ)等ガアル。

(ロ) 耳ニハ直耳、半直耳(下部起立シテ上部傾クモノ)垂耳等アリ又耳朶ニモ大小種々ノモノガアル。

(ハ) 額ノ廣濶ナルハ腦ノ發達佳良ナルヲ示ス場合ガ多イ。

(ニ) 眼ハ才智性質ノ表象デ眼瞼ヨク開張シ中等大ナルヲ可トスル。

(ホ) 頸ノ形狀ニハ長短、厚薄、廣狹等アリ細長デ薄キ頸ハ失格デアアル。

2. 軀幹

(イ) 脊峯ハ善ク發育シアルヲ可トスル、之レ廣大ナル脊峯ニハ背、頸、肩ノ強大ナル筋肉ヲ附着シ得ルカラデアアル。

(ロ) 背腰ハ幅廣ク平直ニシテ強ク筋肉良ク附着シアルヲ可トシ、背腰長ク所謂弱背ヲナスモ、凹背凸背ハ共ニ失格デアアル。

(ハ) 胸幅(兩肩端間)著シク狭キモノハ筋力及持久力乏シク體質虛弱デアアル、之ニ反シ廣キモノハ持久力筋力強大ナルモ速力遅キヲ一般トスルカラ

中等ナルヲ可トス。

(ニ) 尻ニハ長、短、水平、傾斜ノ別アリ尻幅狭ク短クシテ傾斜大ナルハ失格デアアル。

(ホ) 肋ハ穹窿ニシテ豊圓ナルヲ可トスル。

(ヘ) 腹ハ適度ニ緊縮セルヲ可トシ、垂腹、捲腹ノ甚ダシキモノハ失格デアアル。

3. 四肢

(イ) 肩ハ長ク廣クシテ傾斜セルモノヲ可トスル。

(ロ) 前膊ハ長クシテ筋肉強大ナルモノハ速度大デアアル。

(ハ) 股ハ適度ノ傾斜ヲ有シ強廣ナル筋肉附着セルヲ可トスル。

(ニ) 脛ハ長ク強大ナル筋肉ヲ有スルハ速力大ニシテ股脛ノ筋肉強大ナルハ輓曳力大デアアル。

(ホ) 膝及飛節ハ強大ニシテ方向正シキヲ可トスル。

(ヘ) 繫ハ適度ニ傾斜シ内外上下ニ屈曲セズ太キヲ可トスル、細キ弱繫ハ失格デアアル。

(ト) 趾部ハ跗面圓ク穹窿シ趾能ク相接シ爪短ク蹴球、趾球硬ク善ク發育セルヲ可トスル。

其三 各役種ノ體格

軍用犬ノ體格ハ重大ナラズシテ體質強健各部殊ニ四肢ノ筋肉腿ノ發育良好ニシテ肢勢正シク趾部堅韌ナルヲ可トシ、且各役務ニ應ズル體格ヲ具備スルノ要ガアル、但軍用犬ハ能力優秀ヲ第一要件トセネバナラヌカラ單ニ外貌ノミニ重キヲ置クコトハ不可デアアル。

近年犬ノ品評會ガ各地デ開催セラレ優秀犬ノ出陳セラルルモノモ少ク無イガ其審査ガ單ニ系統外貌ヲ主トスルノハ我等ノ頗ル不滿トスル所デアアル、系統外貌ハ大切ニハ大切デアアルケレドモ犬ノ優劣ハ寧ロ能力ヲ以テ定ムベキデアアル、將來ハ更ニ訓練程度ヲ審査ノ一項ニ加ヘ度イモノデアアル、斯クテ單ニ高價ノ犬即チ優秀犬トイフ如キ弊風ガ一掃セラルルデアアラウ。

1、傳令犬、搜索犬

歩様ノ持續及速度ノ迅速ニ恰適セル體格則チ一般ニ輕快ニシテ體形方形型ニ近ク背腰直ニシテ強ク肋良ク穹窿シ腹ハ適度ニ緊縮シ尻ハ長ク廣ク四肢ハ長クシテ灣曲セズ筋腱良ク發育シ關節堅牢ナルベク、肩ハ傾斜シ前膊脛ハ長ク歩様輕快步幅廣キモノヲ可トスル。

2、運搬犬

歩幅廣キ持續的常歩ト輓曳ニ適スル體格トヲ具フルヲ要ス即チ體格稍々重大ニシテ體形長方形型ニ近ク胸廣ク肋深クシテ穹窿宜シク背ハ直ニシテ凹背ヲ惡ム腰ハ廣強ニシテ尻著シク傾斜セズ四肢稍々短クシテ屈曲セズ後肢ハ特ニ角度適度ニシテ筋ノ發育セルヲ可トスル。

3、警戒犬

能力ヲ主トシ形態ヲ次トスベキデアアル。

第四節 肢勢及歩様

其一 肢 勢

肢勢ハ種類ニヨリ特徴アルヲ常トスルケレドモ軍用犬トシテハ前側後望共ニ垂直デ正シキ方向ヲ有スル所謂正肢勢ノモノヲ可トスル。
肢著シク内外前後ニ屈曲スルモノ及ビ内外ニ轉向セルモノハ共ニ不正肢勢デ持久力ト速力トヲ阻害スルモノデアアル。

其二 步 法

犬ハ趾行動物ニ屬シ角度關節ノ存在ト蹴球趾球ノ彈力裝置ニヨリ音響ヲ發スルコト少クシテ歩行シ得ルノ特性ヲ有スル。
其歩法ニハ常歩速歩、駈歩及飛越ノ四種ガアル。
迅速ヲ要スル傳令搜索等ニ於ケル歩法ハ犬ノ種類ニ依リテ異リ「ドーベルマン」種「エヤーデル、テリヤ」種等ハ駈歩ヲ以テスルモ「セエハード」種ハ速歩ヲ以テ主歩度トスル。

第五節 斷耳、斷尾

斷耳、斷尾ハ動物ニ苦痛ヲ與ヘ且其性能ヲ害スルコトナシト斷言シ得ザル点ナキニ非ザルモ「ミュンヘン、シユナウゼル」種「ボクセル」種、「ドーベルマン」種ニ對シテハ今日尙之ヲ行フヲ普通トシテ居ル、之ハ垂耳ニ不滿ニシテ緊張雅快ノ風姿ヲ添ヘントスルノ主旨デアアル、耳腔ニ空氣ト光線ヲ與フル爲トイフ如キハ恐ラク第二ノ理由デアラウ。

斷耳ハ生後五週間目ニ斷尾ハ三乃至五日目ニ行フヲ可トスル。

第六節 稟 性

稟性トハ犬ノ先天的ニ有スル品位稟賦、性質、體質等ノ總稱デ此内性質ト體質トハ或程度迄ハ保育訓練ニヨリ變化セシメ得ベキモノデアアル。

品位 容相優美ニシテ品位ヲ具備スルモノト然ラザルモノトノ別ガアル。

稟賦 容相輕美ニシテ感覺銳敏、運動活潑、輕捷ナルモノト體格粗大ニシテ緊縮ヲ缺キ遲鈍ニシテ運動性ニ乏シキモノトガアル。

性質 溫順、忠實、伶俐、莽猛、怯懦等ノ別ガアル。

體質 強壯ト虛弱トアル。

第四章 解剖生理

第一節 運動器

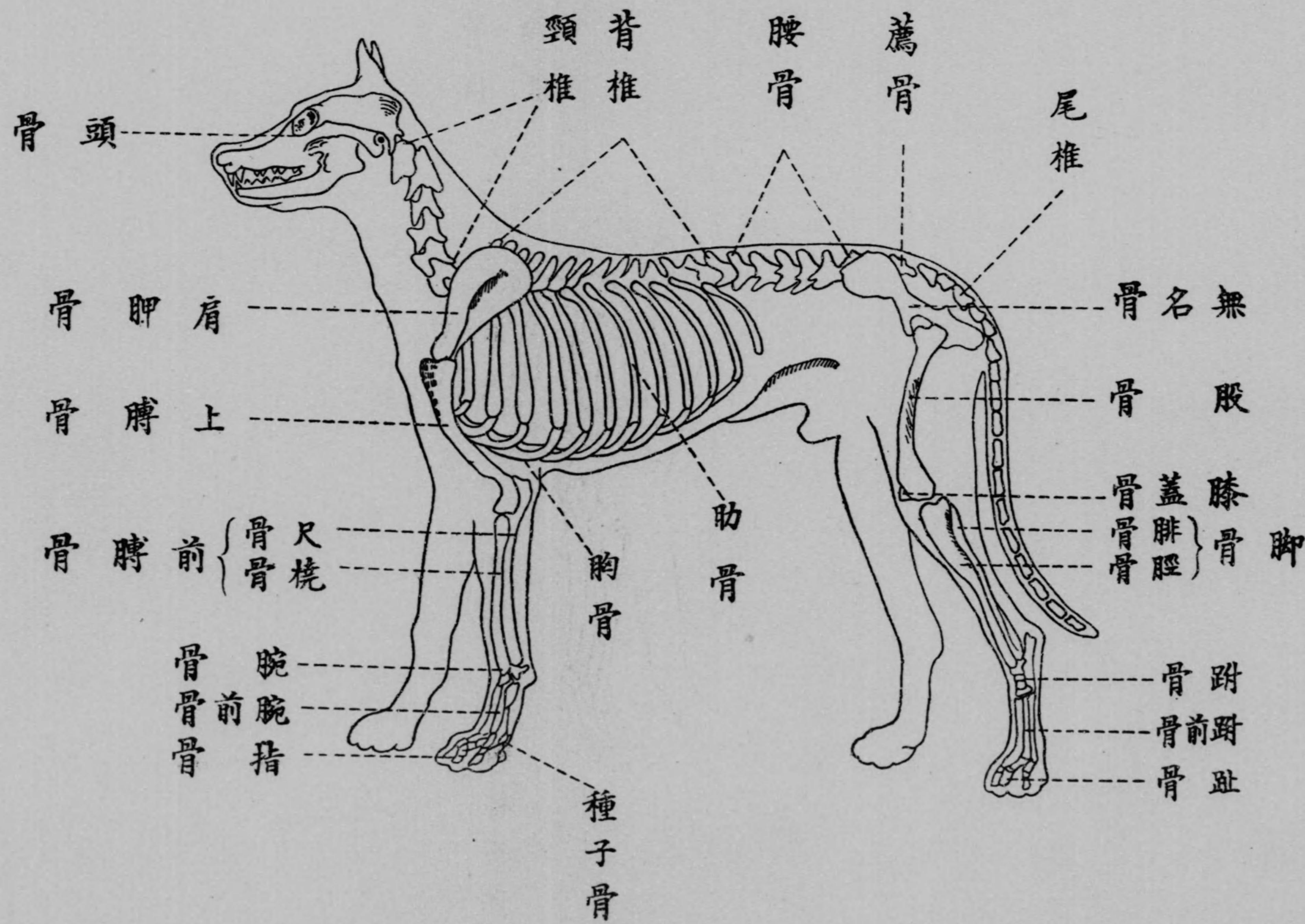
運動器ニハ骨、靭帶、筋ノ三部ガアル。

其一 骨 格

骨格ハ大體ノ基礎デ内臟ヲ保護シ筋、腱、靭帶ヲ附着セシメ運動ノ槓桿臂トナル骨格ハ大別シテ頭骨、軀幹骨及四肢骨ノ三トシ各骨ノ名稱及外貌トノ關係ハ左表ノ如クデアアル（挿圖第二參照）

犬體骨格圖

挿圖
(2)



運動器ニハ骨、靱帶、筋ノ三部ガアル。
 其一 骨 格
 骨格ハ犬體ノ基礎デ内臓ヲ保護シ筋、靱帶、筋ヲ附着セシメ運動ノ槓桿臂トナ
 ル骨格ハ大別シテ頭骨、軀幹骨及四肢骨ノ三トシ各骨ノ名稱及外貌トノ關係
 ハ左表ノ如クデアアル(挿圖第二參照)

四		軀						頸	頭		外貌名稱
前		胸	肋	尾	尻	腰	髻甲及背		頭蓋骨	顏面骨	
膊	肩	胸骨	肋骨	尾椎骨二〇—二三	薦骨 無名骨	腰椎骨七	背椎骨二三	頸椎骨七			頭蓋骨
上膊骨一	肩胛骨一	胸骨一	肋骨一三	尾椎骨二〇—二三	薦骨ハ三個ノ椎骨ヨリ成ル 無名骨ハ腸骨、座骨、耻骨ノ三部ヨリ成ル	腰椎骨七	背椎骨二三	頸椎骨七	後頭骨、前頭骨、篩骨、蝴蝶骨、顛頂骨、顛顛骨 鼻骨、上顎骨、下顎骨、淚骨、顴骨、前顎骨、上下甲介骨、 口蓋骨、翼狀骨、鋤骨	摘 要	
		八個ノ胸骨片ヨリナル	前九肋骨ヲ眞肋骨、後四肋骨ヲ假肋骨ト稱ス			稀ニ六ナリ	髻甲ハ第一背椎ヨリ第四背椎附近マデトシ背ハ其後方ナリ				

肢							
肢				後		肢	
趾部	繫	飛節	脚	後膝	股	趾部	前膊
趾骨	附前骨 四	跗骨 七	脚骨 一	膝蓋骨 一	股骨 一	指骨	前膊骨 一
四行アリテ各行ハ第一第二第三趾骨ヨリ成ル	第一跗前骨及第一趾骨(拇)ハ缺除ス(發育不全ニ存スルコトアリ)下方關節部ニ種子骨アリ	距骨、跟骨、舶様骨、骰子骨、大中小楔狀骨	腓骨ト脛骨トヨリ成ル			五行アリテ各行ハ第一第二第三指骨ヨリ成ル	橈骨ト尺骨トヨリ成ル
						第一腕前骨最短ナリ 下方關節部ニ種子骨アリ	舶様骨、半月狀骨、楔狀骨、豌豆骨、小富稜骨、鈎狀骨、頭狀骨

其二 韌帶

韌帶ハ強韌ナル纖維ヨリ成リ各關節ノ骨ト骨トニ附着シ其連接ヲ保ツト共ニ關節ヲ固定スル作用ヲ營ムノ具デアル。

其三 筋

筋ハ意志ニ依リ収縮(不隨意筋ヲ除ク)シ以テ大體各部ノ運動ヲ起スモノデアル。
 腱ハ其一端筋ニ連リ他端ハ骨又ハ軟骨ヲ附着シ筋ノ収縮ヲ傳達スルノ用ヲナス。

第二節 循環器及呼吸器

其一 循環器

血液ノ循環ヲ營ム器官デ心臟及血管ヨリ成ル、心臟ハ血液循環ノ主動器官デ左右上下ノ四部ニ分レ上部ヲ心房下部ヲ心室ト稱ス、全身ノ不淨ナル血液ハ前後大靜脈ニ集合シ右心房右心室肺動脈ヲ經テ肺ニ達シ清淨トナリタル後肺靜脈左心房ヲ經テ左心室ニ環流シ其収縮作用ニ依ツテ大動脈ヨリ動脈血トナツテ驅出セラレ、動脈血ハ全身ノ毛細血管ニ至リ血液中ノ酸素及榮養物ヲ體ノ組織ニ給シ其組織中ノ老廢物ヲ取ツテ小靜脈ニ移リ漸次大靜脈ニ集

合シ循環スルモノデアル。

心臟ノ一縮一張ハ搏動ト稱シ其動脈ニ傳ハリタルモノヲ脈搏ト謂フ、犬ハ一分間六〇乃至八〇小犬ハ八〇乃至一二〇ノ脈搏ヲ有スルノガ常態デアル。血液ノ全量ハ體重ノ五、五乃至九、一%ニ相當シ出血ノ爲其半量ヲ失フ時ハ死ニ至ルモノデアル。

其二 呼吸器

呼吸器ハ氣道及肺臟ヨリ成リ氣道ハ鼻腔、喉頭、氣管及氣管枝ヨリ成リ肺臟ハ左右ニアリテ各前中後ノ三葉ニ分レ各葉ハ細小ナル細胞ヨリ成ルモノデア。肺臟ハ炭酸、水及其他身體ノ老廢物ヲ含ム不淨ナル靜脈血ヲ酸素ニ富ム清淨ナル動脈血(鮮紅色)ニ化セシメル器官デアル。呼吸數ハ一分間一五乃至二〇回デアル。

第三節 消化器

消化器ハ消化管ト之ニ附屬スル種々ノ消化腺トヨリ成リ食物ノ消化及吸收

ヲ營ムモノデアル。

消化管ハ口腔ニ始マリ咽頭、食道、胃及腸ヲ經テ肛門ニ終ル消化腺ハ唾液腺、胃液腺、腸液腺、肝臟、脾臟等アリテ食物ノ消化ニ必要ナル消化液ヲ分泌スルモノデア。ラ。

其一 口腔

唇ヨリ咽頭ニ至ル間ヲ云ヒ齒、舌、唾液腺ヲ有シ齒ハ臼齒ヲ除ケバ皆尖銳デ左ノ如キ數デア。ル但シ臼齒數ハ犬ノ種類ニヨリ多少ノ相異ガアル。

側 右			側 左			
臼	犬	切	切	犬	臼	
齒	齒	齒	齒	齒	齒	上
6	1	3	3	1	6	
7	1	3	3	1	7	下

齒 切					
隅	中	門	中	隅	
齒	齒	齒	齒	齒	上
1	1	2	1	1	
1	1	2	1	1	下

其二 胃

容積ハ犬ノ體格ニヨリ異ルコト勿論デアアルガ概ネ一日分ノ食餌ヲ保ツコトヲ得ル大サ(三乃至七、五立)ヲ持ツテ居ル、然シ消化作用ノ完全ヲ期スル爲ニハ其容積ノ七割以下ニ制限スル必要ガアル。

其三 腸

小腸ト大腸トヨリ成リ小腸ハ更ニ十二指腸、空腸及廻腸ニ大腸ハ盲腸上行結腸、下行結腸、直腸ニ區分セラレル。

犬ノ腸ハ容積小デ胃ノ五乃至七割ニ過ギナイ(馬ハ十三倍人ハ二〇倍)又其長サハ體長ノ約五倍デアアル。

其四 消化作用

犬ハ元來肉食獸デアアルカラ其消化器ハ至ツテ簡單デ先ヅ切齒デ採食シ大塊ハ前肢ノ補助ニヨツテ咬斷シテ咀嚼スルノデアアル。

犬ノ齒ハ前述ノ如ク尖銳デアアルカラ咬斷ニ適シ又顎ノ運動ハ簡單ナル上下運動ニ止ルカラ其咀嚼ハ單ニ嚥下ニ適スル大サニ破斷スル程度ノ粗雜ナル

モノデアアル。

犬ノ唾液中ニハ他ノ家畜ニ存スル如キ炭水化物分解酵素タル『ブチアリン』ヲ含有シテ居ナイ。

犬ノ胃中ニ入ツタ食物ノ炭水化物及蛋白質ハ胃液腺ノ分泌スル鹽酸及消化酵素ノ作用ニヨリ消化セラレ腸ニ移行スルノデアアル。

犬ノ胃ノ鹽酸量ハ他動物ニ比シテ多量デ之ガ他ノ消化酵素ト共同シテ蛋白質炭水化物ヲ分解スルト共ニ細菌芽胞ヲ滅殺シ或ハ其發育ヲ停止シテ胃内容物ノ醗酵腐敗ヲ防グ作用ヲ營ムノデアアル。

胃カラ腸ニ入ツタ食餌ハ更ニ前述各種ノ消化腺ヨリ分泌セラルル消化液ノ作用ヲ受ケ其蛋白質炭水化物、脂肪ハ腸粘膜ヨリ消化吸収セラレ殘物ハ大腸ニ於テ水分ヲ吸収セラレタル後體外ニ排泄セラルル運ビトナルノデアアル。

斯ノ如ク口中ニ入レル食餌ガ吸収ヲ終ツテ體外ニ排泄セラルル迄ニ要スル時間ハ十六乃至二十時間デ其内四乃至十時間ガ胃、十乃至十二時間ガ腸ニ滯

留スル時間デアル。

第四節 皮膚及泌尿器

其一 皮膚

皮膚ハ表皮、真皮及皮下織ヨリ成リ表面ニハ毛ガ密生シテ居ルコトハ見タ通リデアアル

皮膚ハ身體ヲ保護シ汗及皮脂ヲ分泌スルト共ニ觸覺、皮膚呼吸及體溫調節等ヲ營ムモノデアアルガ犬ハ他ノ動物ト異リ汗ノ分泌ハ極メテ僅少デアアル。

皮脂腺ハ頗ル大デ毛囊内ニ開口シ皮脂ヲ分泌シ皮膚及毛ニ彈力ヲ附與スルノ役ヲ爲スガ趾球、蹴球、鼻鏡ニハ此皮脂腺ナク反對ニ汗腺ノ發達良好デアアル。犬ノ鼻鏡ガ常ニ濕潤シテ居ルノハ鼻鏡腺ト稱スル複合管狀ノ特異腺ガアツテ絶エズ分泌物ガアルカラデアアル。

毛ニハ被毛(體毛)ト觸毛トアリ被毛ハ脱換ヲ行フ。

其二 泌尿器

腎臟、輸尿管、膀胱、尿道ヨリ成リ尿ヲ排泄スル器デアアル。犬ノ尿ハ食物ニ依リ大差ガアリ肉食スルトキハ酸性ヲ呈スルガ植物性食餌ヲ採ル時ハ『アルカリ』性デ透明淡黄色デアアル。

犬ハ排尿ニ際シ完全ニハ膀胱ヲ空虚トセズ任意ノ間隔デ少量ヲ排泄スルヲ常トシ一日ニ半乃至一立ノ量デアアル。

第五節 神經系

腦脊髓、腦脊髓神經及交感神經ヨリ成リ犬體各部ニ分布シテ互ニ連繫シ生活機能ヲ調和統轄スル。

五官器ハ神經系中重要ナル知覺裝置即チ外界ノ諸現象ヲ腦ニ傳達スルモノデ其感覺ハ左ノ如クデアアル。

1、嗅覺 鼻腔中、鼻中隔ノ上部、上甲介骨ノ上部及節骨ヲ被ヘル粘膜炎ニ存スル嗅神經ノ末器即チ嗅細胞之ヲ司ル。

2、視覺 眼球内網膜ニ分布スル視神經末器之ヲ司ル。

3、聽覺 音波ハ先ヅ鼓膜ヲ振動シ其振動漸次内部ノ傳道路ニ傳ハリ聽神經末梢ニ達シ聽覺トナル。

4、味覺 口腔内ニ分布スル舌咽神經及三叉神經ノ末器即チ味蕾之ヲ司ル。

5、皮膚及露出粘膜中ニアル知覺神經末器之ヲ司ル。

第五章 飼 養

第一節 飼料及其種類

犬ハ元來肉食獸デアルカラ、肉類ヲ主要食トスルノガ最モ適當ナルハ勿論デアアルガ肉類ハ一般ニ高價デアルノ一面、食品化學ノ發達ニヨリ、分析上相當ノ營養價ヲ有スル他ノ食料品ヲ以テ代用シ得ルトノ見解カラ、今日ニ於テハ雜食獸ト略同一ノ飼料ヲ飼育セラルルニ至ツタ。

犬ノ飼料トシテ具フベキ條件ハ概ネ左ノ如クデアアル。

1、消化性營養素炭水化物、蛋白質、脂肪、無機鹽類ヲ有シ必要ノ熱量アルコト。

2、充分量ノ蛋白質アルコト。

3、必要ナル無機物質ノ適當量ヲ有スルコト。

4、各種『ビタミン』ヲ充分含有スルコト

犬ハ肉食獸ナリトシテ肉ノミヲ以テ飼養セバ遂ニ斃死スルモノデアアル、之レ肉ハ蛋白質、脂肪ノ外必要ノ營養素ヲ缺ク所以デアアル。

犬ノ飼料トシテハ其種類頗ル多ク、本邦ニ於テハ米、麥、甘藷、馬鈴薯、疎菜類、獸魚肉、牛乳、麵麩、味噌、豆腐、糟屠場廢肉（肺、肝、脾、腎、牛ノ第一胃）庖厨ノ殘滓等ヲ使用セラレテ居ル。

第二節 成犬ノ飼料

軍用犬ハ戰時ノ願慮上最モ得易クシテ容積過大ナラズ安價ニシテ相當營養素ヲ含有セル飼料ヲ以テ飼養セラレネバナラス。

犬ノ胃ハ大デアルケレドモ過量ノ食料ハ消化作用ヲ障害シ運動ノ輕快性ヲ缺キ、怠惰性ヲ誘起シ能力ガ減退スルノ虞ガアル。

兵營ニ於ケル上殘飯及庖厨殘滓ハ犬ノ好餌料デ之ニ適當ナル補助飼料殊ニ蛋白質ト脂肪トニ富メルモノヲ混ズレバ上々デアアル補助飼料トシテハ魚類、肉類、味噌、廢肉、肉スープ等ガ適當デアアル、下殘飯ハ滋養分少ク適當デナイケレドモ時トシテ補助飼料ノ多量ヲ増加シテ使用スルノ已ムナキ時モアルデアラウ。

其一 食餌ノ日量

食餌量ハ體格ノ大小、食餌ノ種類、勞働ノ程度ニヨリ一定シ難イケレドモ、二十乃至四十疋ノ犬ニ對シテハ千五百乃至二千七百大「カロリー」ノ熱量ヲ適當トシ、蛋白質七十瓦以上ヲ含有セネバナラス。軍用犬ノ日量標準ハ左ノ通りデアアル。

米麥飯	二、〇〇〇瓦（米麥五合ノ量）
魚肉類	一五〇瓦（四十匁）
蔬菜類	一五〇瓦（四十匁）
食鹽	少量

右ノ熱量ハ二千五百大「カロリー」ニ相當シ粗蛋白質約八十九瓦ヲ含有シテ居ル。

其二 食餌回数

諸外國ノ軍用犬ハ概ネ一日一回ヲ度トシテ居ルケレドモ、食餌回数ハ飼料ノ種類ニヨリ差異ヲ生ズベキモノデ米飯ノ如キ容積大ナルモノハ肉類ノ如キ容積小ナルモノニ比シ回数ヲ多クセネバナラス。

前述軍用犬飼料ノ日量ハ二回ニ分チ與ヘルノガ適當デアアル。

其三 飼養衛生

- 1、食餌ヲ與ヘルモノハ取扱者自身デナケレバナラス。
- 2、食器ハ陶製又ハ琺瑯製ノモノヲ適當トシ、食後ハ直チニ殘物ヲ捨テテ洗濯乾燥シ長ク放置シテ蠅ノ涓集ニ任ス如キハ最モ不可デアアル。
- 3、食事毎ニ食慾状態ヲ注意スル必要ガアル。
- 4、飽食ハ消化器ヲ害シ運動ヲ緩慢ニシ過肥ニ陥ルノ因ヲナス。
- 5、熱キモノ辛キモノ刺戟性ノモノハ嗅覺ヲ害スル。

- 6、魚肉類ナキ時ハ鳥獸肉ノ煮出汁ヲ作り或ハ味噌汁等ヲ混ジテ與ヘル。
- 7、綠食物(ウイタミン)食鹽骨片(小魚)(無機質)等ヲ與ヘル必要ガアル。
- 8、食餌日量ハ犬ノ榮養状態ニヨリ加減シ肥滿ハ減食シ瘦削ハ増量ス。
- 9、勞働劇シキ時ハ食餌ノ日量ヲ増加セネバナラヌ之ニハ滋養アル補助飼料ヲ以テスルヲ可トスル。
- 10、食餌日量ハ又季節ニヨリテモ加減セネバナラヌ。

其四 飲 水

水分ハ動物體ノ主成分デ其量ハ體重ノ六四%ニ相當シ若シ渴シテ體重ノ一〇%ニ當ル水分ヲ失ヘバ死ニ至ル程デアル。

犬ノ飲料タルベキ水ハ清淨デナケレバナラヌハ勿論之ヲ陶器製容器ニ入レ犬ヲシテ自由ニ飲マシメルノデアル、水ハ毎日交換シ其容器ハ洗滌ノ必要ガアル、若シ野外等デ清淨ノ水ヲ得ラレヌ時ハ淨水法ヲ行ツタ後ニ與ヘルノ注意ガ肝要デアル。

淨水法トシテハ、過マンガン酸加里ヲ二十倍ノ割合ニ混ジ或ハ水一斗ニ對シ

明礬二匁ヲ混ジ其上水ヲ用フルノガ簡單デアル。

第三節 幼犬ノ養育

幼犬ハ身體至ツテ虛弱ナモノデ外界ノ刺戟ニ對スル抵抗力乏シク内臟寄生蟲、犬瘟熱等ニ冒カサレ易イモノデアルカラ保育取扱ニ注意シ、夏季ハ清涼冬季ハ溫暖ナル場所ニ置キ、冬季出産ノモノハ春季ノモノヨリハ一層大切ニセネバナラヌ。

即チ犬舎ニハ清潔ナル寢藁ヲ用ヒ、犬舎ノ賊風ヲ防ギ日中ハ陽光ヲ採ラシメ夜間ハ煖爐、湯タンボ等ヲ用フルノ類デアル。

其一 分娩母犬ノ攝養

妊娠中ノ母犬ニ對スル注意ト同ジク仔犬養育上母犬ノ攝養ハ忽ニスベカラザル問題デアル、食餌ハ分娩前ト同ジク一日二回消化シ易キ滋養食ヲ與ヘ、分娩後一週間ヲ經レバ晴天ノ日午前、午後、三十分乃至一時間輕キ逍遙運動ヲ課シ以テ健康ヲ保持シ其泌乳量ヲ豊富ナラシメルト共ニ乳質ヲ良好ニスルコ

トヲ計ルコトガ肝要デアアル。
骨片少キ食糧ニ對シテハ燐酸『カルシウム』一日一茶匙ヲ食餌ニ混ジテ與ヘ
ルヲ可トスル之ハ母體仔犬ノ骨成分ヲ十分ニセンガ爲デアアル。

其二 養育頭數及離乳

養育頭數ハ母犬ノ體格健康狀態泌乳量ニ依リテ一定シ難イケレドモ概ネ五、
六頭ニ限ルヲ可トスルカラ分娩後一週間位迄ノ發育體格健康狀態ニヨリ不
要頭數ヲ除カネバナラス、若シ慾バツテ多數ノ犬ヲ養フ時ハ全部ノ仔犬發育
不良トナリ蛇蜂トラズトナルノデアアル。
母犬ニヨリ飼育スルコトノ出來ヌモノハ假母犬ニ依ルカ又ハ人工養育ニヨ
ルノデアアル。

離乳ハ生後六週間目ヲ適當トスル但シ五週間目位カラ米湯粥等消化シ易イ
モノヲ與ヘ習慣ヲ附ケ第七週目カラハ成犬ノ食餌ヲ軟化シテ與ヘルノデア
ル。

其三 生後一年間ノ養育法

時期	餌	養	運	動	摘	要
第一週	主食餌、母乳					人ノ出入ヲ禁ジ母犬ヲ安靜ナ ラシム
第二週	右ニ同ジ					仔犬眼ヲ開ク
第三週	主食餌、母乳、牛乳、 「スープ」ヲ微温湯ニテ二倍ニ稀釋シ少量 ヲ舐メシム					
第四週	主食餌、母乳、牛乳ヲ微温湯ニテ 稀釋シ一日二回與ヘ母乳ヲ補助 ス、其量ハ一度ニ飲ミ盡ス量トス					
第五週	主食餌、母乳、牛乳「スープ」ノ 外米湯、粥ノ消化シ易キモノノ小 量宛與フ、一週二回綠食ヲ混ズ					
第六週	右ニ同ジ但シ米湯、粥ノ分量 ヲ漸次増加シ離乳ノ準備ヲナ ス					
第七週	母乳ヲ絶チ親同様ノ食餌ヲ軟 化シ之ニ牛乳一合ヲ混ジ四回 ニ分與ス					
自第八週 至二ヶ月	親同様ノ食餌(日量ハ成犬ノ 半分トナシ牛乳一合ヲ混ジ 四回ニ分與ス 飲水ハ隨意採飲シ得ル如ク容 器ニ入レ備付置クベシ					
<p>此間遊戯ニヨリ仔犬同志運動セム</p>						
						<p>每日燐酸石灰(三頭ニ對シ一 茶匙)ヲ食餌ニ混ズ、本週一回 硫黃華一頭一茶匙ヲ與フ</p> <p>右ニ同ジ(硫黃華ヲ除ク)</p> <p>每日燐酸石灰ヲ一頭ニ一茶匙 食餌ニ混ズ 第八週ノ始メ硫黃華一茶匙ヘ 第九週ナシ 第十週ヨリ每週 一回硫黃華一茶匙</p>

自三ヶ月 至四ヶ月	牛乳ヲ中止シ魚肉類ノ軟キモノヲ煮テ與フ、其他前ニ同ジ	午前午後草原 チ運動場ニ放シム	右ニ同ジ 一犬舎ニ二頭宛收容ス
自五ヶ月 至六ヶ月	食餌日量成犬ノ7/10回數三回 食餌ニ骨片ヲ混ズ	右ニ同ジ	硫黃華投與ヲ中止 必要ニ應シ驅虫劑ヲ與フ
自七ヶ月 至十ヶ月	食餌日量成犬ニ同ジ回數三回	調教 逍遙 運動	
自十一ヶ月	食餌回數二回	成犬ニ準ズ	

其四 人工養育及假母犬ニヨル養育

人工養育

生後一週間母乳ヲ以テ養育シタモノデナケレバ人工養育困難デアアルガ、既ニ一週間ヲ經過シタモノニ對シテハ牛乳日量一合五勺ニ少量ノ砂糖ト同量ノ微溫湯ヲ加ヘタモノヲ吸入器ニヨリ飲マシメテ養育スル、一日ノ量ハ犬ノ吸攝ニ委シ日中ハ五回夜間二回位ニ分與スルヲ適當トスル。
又日量ハ漸次増量シテ生後二週間後ニ至ル時ニハ牛乳三合ニ増加スル如ク

シ此時分ニハ容器モ吸入器ヲ廢シテ皿ニヨルノデアアル。
生後三、四週間ハ日中四回夜間一回位採食セシメル。
生後五週間以降ハ母犬ニヨルモノト同一デアアル。

假母犬養育

假母犬トシテハ略同時ニ出產シタ二歳乃至五歳ノ健康ナルモノガ適當デア
ル、假母犬ガ新入ノ仔犬ヲ嫌フ時ニハ香水『アルコール』等ニヨリ自體ノ仔犬
ノ香ト紛ハセバヨロシイ。

其五 幼犬衛生

- 1、牛乳ヲ『コンデンスミルク』ニ代ヘルコトハ不利デアアル、之レ糖分過度デ消化器ヲ害スルカラデアアル。
- 2、仔犬ノ眼邊、口邊、肛門、陰部ハ微溫湯又ハ硼酸水ニ浸シタル布片デ屢々清拭スル。
- 3、食器ハ一頭一箇宛トシ別々ニ食セシメル方可デアアル、之ハ一ツニスルト強健ナルモノノミ早ク多ク喫食シ弱犬ハ益々發育ノ不良ヲ來スカラデアアル。

- 4、仔犬ノ食餌ハ特ニ蛋白質、無機質『ウイタミン』ノ含有豊富ナラザレバ發育ノ不良ヲ來スモノデアアルカラ六週間以後ノ食餌ハ此点ニ注意シ魚肉、綠菜ヲ豊富ニシ食糧ヲ加ヘルコトヲ忘レテハナラナイ。
- 5、生後四ヶ月迄ハ堅キ骨片ヲ避ケ其代リトシテ燐酸石灰(沈降性)カルシユウム「骨粉又ハ牡蠣末」ヲ與ヘテ骨ノ生成ヲ助ケ佝僂病ヲ豫防セネバナラス。
- 6、仔犬ノ疾病中最モ恐ルベキハ内臓寄生蟲デアアル、蛔蟲驅除ノ爲ニハ硫黃華ヲ食餌ニ混ジ(六週ヨリ十週迄ハ二週ニ一回一茶匙十週ヨリ每週一回一茶匙)其後ハ必要ニ應ジ驅蟲劑ヲ與ヘルノデアアル。
- 7、仔犬ハ感冒ニ罹リ易イカラ雨天等ニハ外出セシメザルヲ可トスル。

第四節 榮 養

軍用犬ハ榮養堅肥(甲)即チ被毛光澤アリテ肉附適度運動輕快ナル状態ニ在ラシメネバナラナイ、之ガ爲飼養ト勞役トノ調和ヲ得シメ常ニ筋骨ノ鍛鍊ヲ圖ルコトガ緊要デアアル。

過肥(乙)ハ性質ノ鈍重ヲ來シ運動性減退持久力ヲ害スルモノデアアル。
瘦削(丙)ハ持久力ニ乏シク勞役ニ適シナイ

第六章 管 理

第一節 取 扱

軍用犬ノ取扱者ハ犬ニ關スル正格ナル知識ヲ有シ正直忠實デ犬ヲ愛シ溫和、熱心、忍耐ヲ信條トシ適切ナル訓戒ヲ施シ得ナケレバナラナイ。

- 1、取扱者ハ常ニ一定シ時々交代セシメナイノガ本則デアアル。
- 2、取扱者ハ自己管理ニ屬スル犬ノ性情ヲ熟知シテ常ニ其異常ニ注意シ惡習慣豫防矯正ニ努メテ訓練ヲ破壊シテハイケナイ。
- 3、他人トノ親和ヲ嚴禁セネバナラス、之レ犬ハ人ニ親シミ人亦犬ヲ愛撫センコトヲ欲スルモノデアアルケレドモ、軍用犬ハ關係外ノ他人ト親和スルコト

ニヨリ訓練ヲ妨害スルコトニナリ能力ノ減退ヲ來タスニ至ルカラデ自己以外何人ト雖モ之ト嬉戯シ或ハ呼招飼與セシメテハナラナイ。雜踏ノ市街地或ハ群衆集合ノ地ハ之等無用ノ愛護ヲ受ケ易イカラ注意シテ之ニ近ヅカズ『職務カ犬舎カ』ヲ信條トスルヲ可トスル。

4、取扱ニ關シテハ更ニ訓練編ヲ參照セラレタイ。

第二節 犬舎及犬舎ノ清潔並ニ消毒法

犬舎ハ天候ノ感作ニ對シ犬體ヲ保護シ安靜ナル休養ヲ與ヘルト共ニ飼養管理ヲ容易ニシテ犬ノ健康ヲ保全スル場所デアアル故ニ位置ノ選定、廣サ、採光等ニ注意シ清潔ヲ保持シナケレバナラナイ、犬舎設置上注意スベキ事項ヲ擧グレバ左ノ如クデアアル。

其一

1、犬舎ノ敷地ハ高燥ニシテ濕潤セズ排水可良デ終日太陽ノ直射ヲ受ケル所ガヨイ。

2、犬舎ノ入口ハ東南ニ向ヒ西北ヲ裏面トシ防風防寒上、地形、地物ヲ利用シ得バ有利デアアル。

3、近傍ニ沼澤、汚水溝等アリテ蚊蠅ノ群集スル所ハ不可デアアル。

4、他人ノ接近ヲ防グ爲人ノ出入頻繁ナル場所ヲ避ケタイ。

5、附近ハ閑靜ニシテ運動場ニ適スル草原地ガ欲シイ。

6、犬舎ハ永ク一地ニ固定スルコトニヨリ土地ノ不潔ヲ來シ、寄生蟲、細菌等増殖シテ驅除シ難キニ至ルカラ時々移動スルノガ理想デアアル。

7、多數ノ犬ヲ収容スル際ニハ一頭毎ニ廣大ナル運動場ヲ設ケルノ贅澤ヲ許サヌ場合ガ多イカラ、各犬舎毎ニ小運動場ヲ設ケ別ニ共同ノ大運動場ヲ設ケテ小地域ノ利用ヲ圖ルヲ可トスル、此小運動場ハ排尿排便場ヲ兼ヘルモノデアアル。

共同大運動場ハ露天デ周圍ニハ金網ヲ繞ラシ五、六犬舎ニ對シ約五十坪トシ乾燥ヲ害セヌ範圍ニ於テ所々樹木ヲ植エ夏季炎暑ヲ防グ如クシ又土地ニハ勾配ヲ附シ排水溝ヲ作り土地ノ濕潤不潔ヲ防止セネバナラナイ。

- 8、本犬舎ノ外隔離犬舎ヲ設ケ發情犬、疾病犬ノ隔離用トスル必要ガアル。
- 9、犬舎ハ夏季清涼デ冬季温暖ナル爲周圍ハ板張トナシ賊風ヲ防ギ極寒地デハ之ニ壁ヲ塗ル等ノ注意ヲ怠ラズ又藁藎等ヲ用ヒテ防寒設備ヲ施ス。
- 10、犬舎ニハ尙分娩犬舎、養育犬舎及訓練、食餌調理室等ヲ附屬シ猶取扱兵ハ犬舎ノ附近ニ起居シテ犬トノ親和ヲ圖ラナケレバナラナイ。

其二 犬舎ノ種類

犬舎ノ構造ハ收容頭數、氣候風土、使用ノ期間等ニ依リ一定シ難イケレドモ大要移動式犬舎ト固定式犬舎トニ區分シ移動式犬舎ハ更ニ解體式犬舎ト箱型犬舎ニ分ツトガ出來ル。

1、移動式犬舎

解體式犬舎ハ其構造、組立、解體ニ自由ナル状態ニ製作セルモノデ必要ニ應ジ隨所ニ携行シ得ルノ便益ガアル(挿圖第三)ハ其一例デアアル。

箱型犬舎ハ概ネ左ノ標準(挿圖第四參照)ニ依リ製作スレバヨイ。

(1) 入口ハ床ヨリ約十糎上方ヲ底邊トシ幅四十糎高サ六十糎必要ニ應ジ開

(3) 挿圖

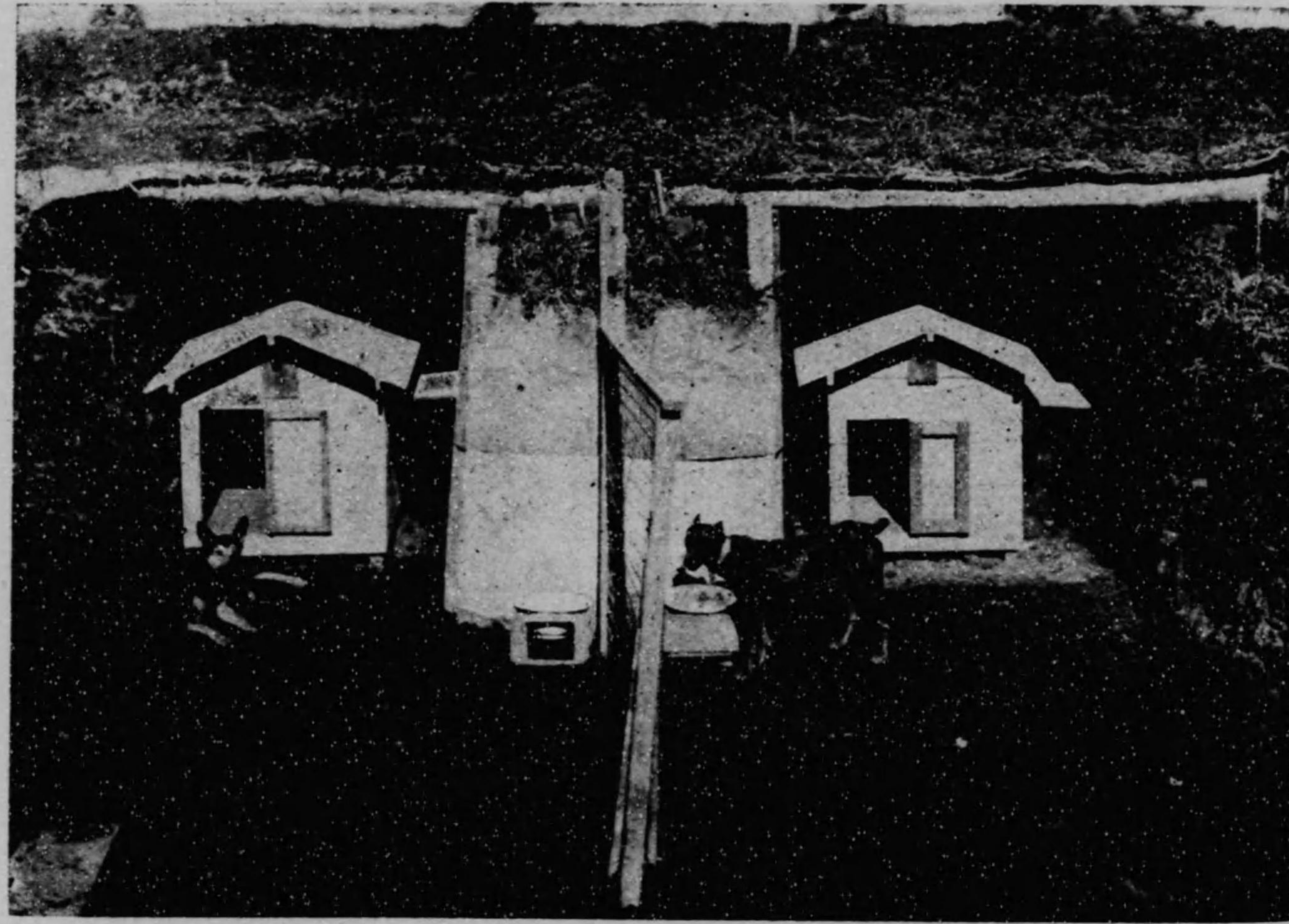


移動犬舎 (半解體式)

屋根モ床モ消毒ノ爲除去シ得ル特徴ヲ有ス。

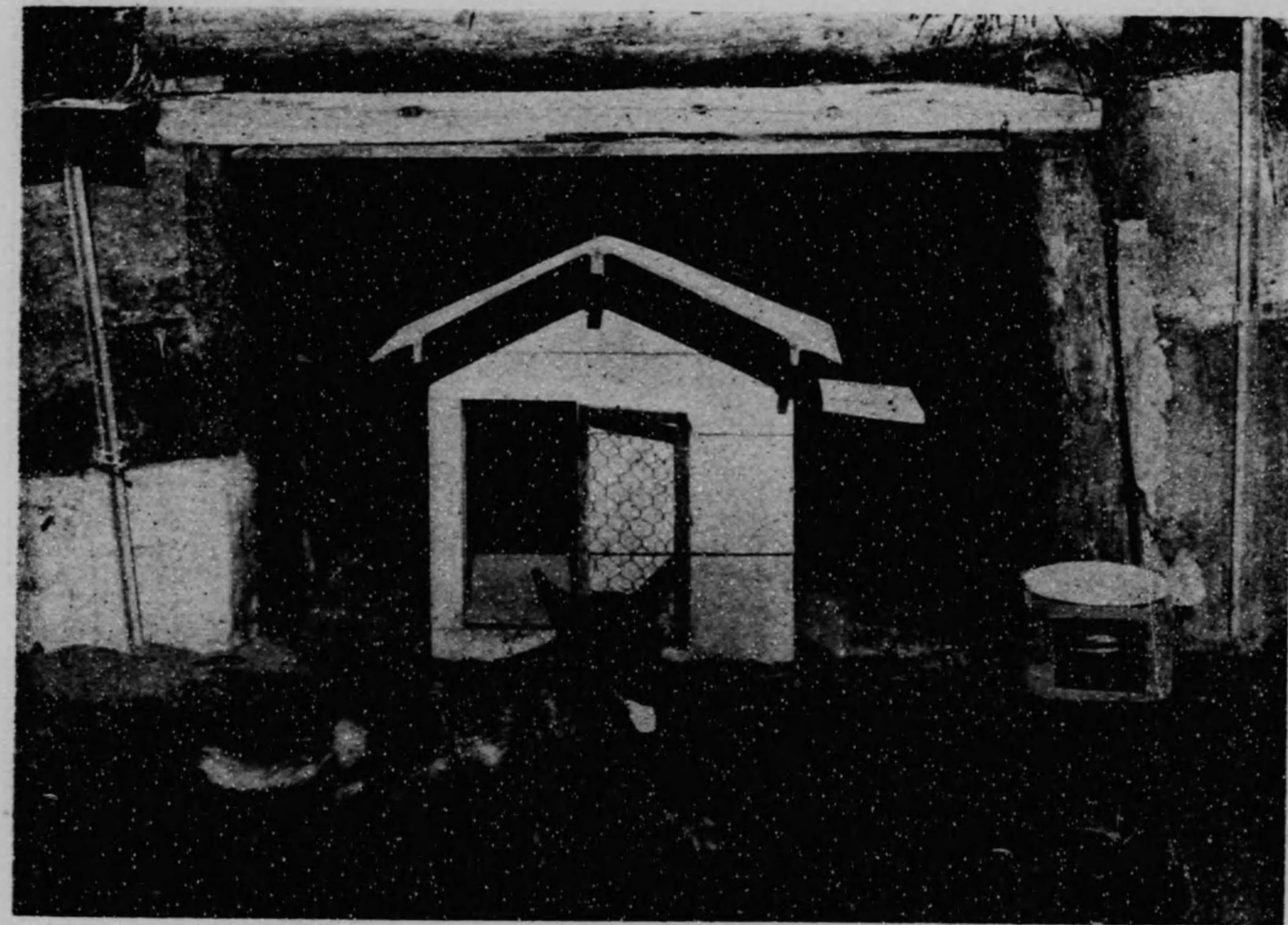
屋根ノ傾斜ハ急ニ失スル時ハ冬季保温上餘リ宜敷ナイ。脚ハ二十糎以上トシ冬季ハ床板ガ地面上ニ近ク位置スル迄ニ地中ニ埋没ス。以上ハ箱内ニ於ケル空氣ノ環流ヲ少クス。

(5) 圖 挿



参考犬舎ノ一例
 土地ヲ圖ノ如ク掘リ下ゲテ
 其中ニ移動式犬舎ヲ入レタ
 ルモノデアツテ冬季仔犬ノ
 育成ニハ最モ適シタモノデ
 アル。外界ニ比シテ一日平
 均攝氏三度乃至五度ノ高温
 ヲ保持ス(要スレバ夜ハ藪ヲ
 前ニ垂ラス)。
 特ニ排水ト日當リニ注意ス
 ル必要ガアル。

(4) 圖 挿



参考犬舎ノ一例
 地上ニ柱ヲ植立シテ板デ柱
 ノ間ヲ塞ギ四周カラ土ヲ盛
 リ上ゲ其中ニ移動犬舎ヲ入
 ル。
 保温ト構築共ニ容易且ツ價
 低廉ナルモノデアル。
 冬季ノ仔犬育成用ニ適ス

閉戸ヲ附ス。

- (2) 幅一米奥行一米二十糎高サ(屋蓋及脚ヲ除ク)九十糎。
- (3) 後面上方ニ開閉窓ヲ附ス。
- (4) 屋蓋ハ著脱式トシ高サ三十糎左右ニ傾斜シ四方ニ相當ノ庇ヲ有セシメ尙屋根ノ前方及後方ニ三、四箇ノ換氣孔ヲ附ス。
- (5) 脚ノ高サハ二十糎内外。

2. 固定式犬舎

固定式犬舎ハ半永久的施設デアルカラ其施設ハ前述セル犬舎設置ノ注意事項ヲ參酌シテ完全ヲ期セナケレバナラナイ、殊ニ犬舎ノ清潔消毒並ニ排水ニ對スル設備ノ完否ハ犬ノ保育衛生上重大ナル關係ヲ有スルモノデアアル。固定式犬舎ノ構造ハ小運動場、寢室、出入口ニ區分スル(挿圖第五參照)

- (1) 固定式犬舎ノ床下及小運動場ハ『セメント』『コンクリート』『アスファルト』石敷等ヲ最適トスル、之レ保存期限長ク且ツ清潔消毒ニ便デ寄生蟲ヲ驅除シ病毒ニ汚染セラレルコト少キヲ以テデアアル。

床下及小運動場ニハ多少ノ勾配ヲ附シテ排水ヲ可良トスル。

- (2) 小運動場ハ犬舎前ニ設ケ大部分ハ露天廣サハ約一坪内外トシ其前方ハ金網張兩側ハ板又ハ金網ニテ張ル。
- (3) 寢室ノ床ハ地上ヨリ四十糎ノ高サニ設ケ前方ニ開閉扉ヲ附シ後方ニ五十糎平方ノ開閉小窓ヲ附ス。
冬季寢藁ヲ要スル季節ニハ別ニ長サ九十糎幅七十五糎深サ十五糎ノ寢臺箱(挿圖第四參照)ヲ使用スルヲ便トスル。
- (4) 出入口ハ寢室ニ出入スル門口デ板張ヲ以テ之ト境セシメ飲水容器置場、食事場ヲ兼ネシメ外部ニハ扉ヲ附ス。

其三 犬舎ノ清潔及消毒法

犬舎ノ清潔並ニ消毒ハ犬ノ衛生上最緊要ナ事項デ其實施不確實ナトキハ病毒ノ蔓延寄生蟲ノ増殖ヲ免レ難ク、犬ノ保健殊ニ幼犬ノ養育上ニハ大害ヲ及ボスモノデアアルカラ左ノ注意ヲ必要トスル。

1. 一ヶ月毎ニ消毒シタ犬舎ニ移轉セシメル。

閉戸ヲ附ス。

- (2) 幅一米奥行一米二十糎高サ(屋蓋及脚ヲ除ク)九十糎。
- (3) 後面上方ニ開閉窓ヲ附ス。
- (4) 屋蓋ハ著脱式トシ高サ三十糎左右ニ傾斜シ四方ニ相當ノ庇ヲ有セシメ尙屋根ノ前方及後方ニ三、四箇ノ換氣孔ヲ附ス。
- (5) 脚ノ高サハ二十糎内外。

2. 固定式犬舎

固定式犬舎ハ半永久的施設デアルカラ其施設ハ前述セル犬舎設置ノ注意事項ヲ參酌シテ完全ヲ期セナケレバナラナイ、殊ニ犬舎ノ清潔消毒並ニ排水ニ對スル設備ノ完否ハ犬ノ保育衛生上重大ナル關係ヲ有スルモノデアアル。固定式犬舎ノ構造ハ小運動場、寢室、出入口ニ區分スル(挿圖第五參照)

- (1) 固定式犬舎ノ床下及小運動場ハ『セメント』『コンクリート』『アスファルト』石敷等ヲ最適トスル、之レ保存期限長ク且ツ清潔消毒ニ便デ寄生蟲ヲ驅除シ病毒ニ汚染セラレルコト少キヲ以テデアアル。

床下及小運動場ニハ多少ノ勾配ヲ附シテ排水ヲ可良トスル。

- (2) 小運動場ハ犬舎前ニ設ケ大部分ハ露天廣サハ約一坪内外トシ其前方ハ金網張兩側ハ板又ハ金網ニテ張ル。
- (3) 寢室ノ床ハ地上ヨリ四十糎ノ高サニ設ケ前方ニ開閉扉ヲ附シ後方ニ五十糎平方ノ開閉小窓ヲ附ス。
冬季寢藁ヲ要スル季節ニハ別ニ長サ九十糎幅七十五糎深サ十五糎ノ寢臺箱(挿圖第四參照)ヲ使用スルヲ便トスル。
- (4) 出入口ハ寢室ニ出入スル門口デ板張ヲ以テ之ト境セシメ飲水容器置場、食事場ヲ兼ネシメ外部ニハ扉ヲ附ス。

其三 犬舎ノ清潔及消毒法

犬舎ノ清潔並ニ消毒ハ犬ノ衛生上最緊要ナ事項デ其實施不確實ナトキハ病毒ノ蔓延寄生蟲ノ増殖ヲ免レ難ク、犬ノ保健殊ニ幼犬ノ養育上ニハ大害ヲ及ボスモノデアアルカラ左ノ注意ヲ必要トスル。

1. 一ヶ月毎ニ消毒シタ犬舎ニ移轉セシメル。

其方法ハ豫備犬舎ヲ置キ一定ノ使用期間(一ヶ月)ヲ經レバ犬ヲ其豫備犬舎ニ移シ洗滌消毒ヲ行ヒ、少クモ二週間空房トシテ日光ニ乾燥シ順次交代消毒ヲ實施スルノデアアル。

2、移動式犬舎ニアリテハ一ヶ月一回土地ヲ移轉スル。

3、豫備犬舎ナキトキハ一ヶ月一回大消毒ヲ實施スル。

犬舎消毒ニハ熱湯消毒『クレゾール』石鹼液『クレオリン』ノ三%液石灰一〇%液等ノ何カニヨル。

4、右ノ外毎日清潔ニ掃除シ二週間ニ一回〇、一%過『マンガン』酸加里液ニテ洗ヘバ一層可デアアル。

5、尿ノ流出ヲ良クシ糞便ハ直ニ除去シナケレバナラヌ、地上ノ糞便ハ土込メニ除去ノ必要ガアル。

6、寢臺箱ハ晴天ノトキハ毎日取出シ若シ汚染シアレバ洗滌シ日光ニテ乾ス、箱型犬舎ハ屋蓋ヲ脱シテ行ヘバヨイ。

7、寢臺モ亦寢臺箱ト共ニ日光ニ晒シ不潔トナリシ部分ヲ交換スル。

寢臺ノ分量ハ一日一頭二百匁冬季ノミ用フレバヨイ。

8、小運動場ノ土砂(硬質製地盤ヲ除ク)ハ一ヶ月一回厚サ三寸許リ表土ヲ取去リ日光ニ曝露セル乾燥土ト交換シ搗固スル。

表面土ヲ砂トスルトキハ水分瀘過シ糞ノ排除ニ便デアアル。

第三節 皮膚ノ手入

皮膚ノ手入ハ犬體ノ污垢塵埃ヲ取去リ犬ニ快感ヲ與ヘルノミナラズ其刺戟ニ依リ皮膚ノ血行ヲ旺盛ニシ以テ其機能ヲ完全ニ營爲セシメルト共ニ皮膚病寄生蟲ノ豫防驅除上益スル所大デアアル、手入ノ回数ハ一定シ難イケレドモ軍用犬ノ如キ過激ナル勞役ニ服スルモノハ一日概ネ一回トシ天候不良トカ演習等ノ場合ハ其回数ヲ増加スル必要ガアル。

其一 手入法

手入ヲ別チテ日常ノ手入ト演習後ノ手入トノ二種トスル。

1、日常ノ手入

先ヅ犬ヲ犬舎ヨリ牽出シ適當ナル場所ニ繫ギ犬ヲ座セシメテ頸輪ヲ堅ク握リ頭頸背腹四肢ノ順序ニ根櫛(長毛種ハ最初木櫛ヲ用フ)デ最初毛並ニ逆ヒテ擦上ゲ更ニ毛並ニ擦下ゲ數回反復シテ犬體ノ塵埃污垢ヲ梳拭シ去ル、口、眼、肛門附近ハ清水ニ浸セル布片デ拭キ耳ノ内部ハ脫脂綿ヲ鑷子ニ挟ミ垢ヲ除ク。

尙手入ト同時ニ身體特ニ耳ノ内側、口邊、四肢ノ下端ヲ精細ニ點檢シ虱、蚤、壁蝨等ノ寄生蟲ヲ除去シ濕疹ノ有無ヲ檢ス。

2、演習後ノ手入

演習後ハ犬ガ塵埃ニ汚レテ居ルカラ日常ノ手入ノ外ニ簡單ナル手入ヲ行ヒ皮膚ノ清潔ヲ保ツト共ニ疲勞ヲ醫ス、之ガ爲先ヅ東藥ヲ以テ犬體ヲ能ク摩擦シ毛櫛ヲ以テ手入ヲ行ヒ四肢殊ニ趾間ニ附著セル泥土污垢ハ丁寧ニ取去ル。

若シ雨雪等ニ遭フタトキハ先ヅ水ニテ泥土ヲ洗ヒ落シ藁ニテ摩擦シ乾キタル布片ニテ水分ヲ去リ被毛ノ乾燥シタル後ニ普通手入ヲ行フ。

其二 手入ノ良否判定法

- 1、被毛光澤アリ毛並善ク整ヒ縷毛、脫毛、擦毛等ヲ認メザルハ手入良好ノ證デアル。
- 2、指端ニテ毛並ニ逆ヒ擦過スル時被毛滑澤デ乾キタル感ヲ與ヘ指端ノ汚染セザルハ手入良好ノ證デアル。
- 3、口、眼、肛門、耳ニ分泌物、垢脂ヲ附著セザルハ手入良好ノ證デアル。
- 4、皮膚ニ寄生蟲寄生シ居ラザルハ手入良好ノ證デアル。

其三 水浴

水浴ハ夏季清澄ナ河海ニ於テ行フハ可デアアルガ冬季ハ感冒、消化器病等ノ原因トナルカラ成可ク行ハナイ方ガヨイ、若シ寒冷ノ時期ニ水浴ヲ行フ必要ナル場合ハ暖爐、火鉢等ノアル暖房ニ於テ行ヒ乾燥スル迄良ク摩擦スル必要ガアル。

又水浴ニ方リ石鹼ヲ用フルトキハ石鹼ノ『アルカリ』性成分ノ皮膚ニ殘置セザル様留意シ濕疹ヲ豫防シ、尙石鹼ハ必ズ良質ノ洗面用石鹼ヲ用フルコトガ

必要デアル。

第四節 運動

運動ハ血行ヲ興進シ諸臟器ノ機能ヲ旺盛ニシ犬ノ精神ヲ爽快ナラシメルカ
ラ作業ヲ課セナイトキハ日々適當ナ運動ヲ行ツテ犬ノ健康並ニ能力ノ保持
ニ努メナケレバナラナイ。
運動ノ方法ハ逍遙運動、牽運動等ニ依リ毎日朝夕一時間宛清潔ナル草原ニ於
テ行フヲ可トスル。
幼犬及未成犬ハ前述セル大運動場ヲ設置シ之ヲ開放シ自由ニ逍遙運動セシ
メルノガ適當デアル。

第五節 軍用犬検査

軍用犬ノ保育管理及調教訓練ノ狀況ヲ視察スル爲ニ屢々軍用犬ノ検査ヲ行
フ、検査ノ要目ハ榮養狀態、體重、體尺ノ増減、手入ノ良否、疾病ノ有無及調教ノ進

度等デ其成績中必要ノ事項ハ軍用犬々籍簿ニ記載シ將來ノ參考ニ資スベキ
デアル。

第六節 健否識別

軍用犬取扱者ハ犬ノ健康狀態ニ注意シ異常ハ速ニ發見シ以テ適切ナル處置
ヲ講ズル必要ガアル。

被毛及皮膚	眼	飲食慾	歩様	舉動	區分		摘要
					健	病	
細美ニシテ光澤アリ皮膚滑カナリ	結膜淡紅色ニシテ良ク開大ス	口ノ周圍清潔ニシテ飲食慾旺盛ナリ	活潑ニシテ敏速ナリ	快活ニシテ事物ニ注意シ横臥シ居ルモ人近クバ直チニ起立ス	健	不活潑ニシテ人聲ヲ聞クモ注意セズ	病
光澤ナキモノ、脱毛セル部分、皮膚ノ濕潤又ハ腫物アルモノ	眼多ク腫脹スルモノ、結膜濃赤色又ハ蒼白ナルモノ	飲食慾缺損、口ノ周圍ニ涎ヲ附着(中毒、狂犬病)	澁滯活潑ナラズ、跛行		健		病

鼻鏡	糞尿	體溫	脈搏	呼吸
適度ニ濕潤ス	糞、暗黒色又暗灰色ニシテ堅シ尿透明ナリ	三十七度五分―三十九度	六十乃至百二十	十五乃至二十
乾燥スルモノ鼻漏アルモノ	軟泥狀糞、血液粘液糞、濁獨セル尿、血液ヲ混ズル尿	三十九度以上	百二十以上	二十以上
犬病徴ノ最モ發見シ易キ所ナリ	毎日檢査シ異狀アレバ糞ヲ鏡檢ス	肛門ニ水銀部ヲ挿入シ十分間計測ス	股動脈(内股)ニテ計測ス	胸腹運動ニ依リ計測ス

第七章 蕃 殖

犬ノ蕃殖法ハ雜種蕃殖、純粹蕃殖及近親蕃殖等アリ、此内軍用犬ノ採用スベキ蕃殖法ハ純粹蕃殖法デアアル。
 純粹蕃殖ハ體格稟性、能力ノ遺傳確實且強力デ一般ニ産仔ノ成績最モ優良デアアル。

雜種蕃殖法ハ已ムヲ得ザル場合ノ外行フベキモノデナイ、之レ形態變化スル

ト共ニ遺傳力薄弱トナリ、優良仔ノ產生ヲ期シ難ク、其交配雜多ニ亘ルモノハ一般ニ能力低下スル傾向ガアルカラデアアル。
 近親蕃殖法ハ純粹蕃殖中血族的關係ノ特ニ濃密ナルモノノ配合デアアルカラ親ノ良性美格ガ強ク仔ニ移ルト同時ニ失格或ハ缺點モ亦著シク遺傳スルモノデアアル、故ニ此蕃殖法ニヨリ極メテ優良ナル仔犬ヲ出産スルコトガアルケレドモ普通仔犬體格矮小、體質虛弱、蕃殖力減退、遺傳的疾ノ享有等種々ノ弊害ヲ生ズルカラ成可ク避ケタ方ガ安全デアアル、種屬保存上已ムヲ得ズ近親蕃殖法ヲ採用シタ場合ニハ仔犬ノ保育管理ニ周到ナル注意ヲ拂ハナケレバ養育困難デアアル。

第一節 種犬ノ選擇法

種犬ノ選擇ニ當リ著意スベキ事項ハ左ノ如クデアアル。

- 1、種屬特有ノ稟性、體格、形態ヲ具備スベキコト。
- 2、血統明カニシテ最近親ニアラザルコト。

- 3、能力優秀ナルコト。
- 4、身體強壯ニシテ蕃殖年齢ニ達シアルコト。

第二節 交配

其一 蕃殖ニ適スル年齢

蕃殖ヲ營ムニ適スル成熟期ハ犬ノ種類、體質、飼養等ニ依リ遲速ガアルケレドモ概ネ生後二ケ年ヲ經タルモノガ適當デアル、蕃殖ノ期間ハ犬ノ生存命數ヲ平均十歳トシテ生後二ケ年ヨリ六、七歳迄ヲ適當トシ、未成熟期及老齡ナル犬カラハ善良ナル仔犬ヲ産出セシメルコト困難デアル、又幼牝犬ハ之ガ爲將來自體ノ發育ヲ完全ニ遂ゲルコト困難ナルニ至ルモノデアル。

其二 發情

牝犬ハ生後八乃至十ヶ月ニシテ發情シ、爾後毎年春秋二回發情シ六日乃至十日間持續スル、若シ受胎セザルトキハ再ビ一ヶ月以内ニ發情スルモノデアル、發情ノ徵候ハ左ノ如クデアル。

牝犬ノ舉動一變シ喧噪トナリ牡ヲ慕ヒ好ンデ牡犬ニ接近セントシ其陰唇ハ膨隆潮紅シ赤色ノ粘液若クハ血液ヲ漏出スル。

其三 交配

成熟期ニ達セル牝犬ノ發情ノ極期(發情後五、六日目ニシテ尾ヲ指ニテ打テバ之ヲ側方ニ動かス時)ニ交尾セシメルト受胎スル。

牝犬ハ年二回發情シ妊娠スル能力ヲ有スルケレドモ毎回妊孕セシメルト優良ナル仔犬ヲ得ラレナイノミデナク母體ノ健體ヲ害スルカラ一、二回間隔ヲ置キテ交尾セシメルヲ可トスル。

成熟期ノ牡犬ハ常ニ蕃殖ニ用ヒ得ルガ一年間ニ十五回乃至二十回一日二回ノ交尾回数ヲ適當トス。

牝犬ノ發情極期ニ配合シ受胎ノ疑念アルトキハ二十四時間ヲ經テ第二回ノ交尾ヲ爲サシメレバ殆ンド確實デアル。

其四 妊娠ノ鑑定

妊娠ハ一ヶ月後デナケレバ其確認困難デアルガ左ノ徵候アルモノハ概ネ妊

娠ト認ムベキデアル。

1. 舉動平常ニ移リ發情退衰シ牡犬ヲ嫌ヒ之ヲ拒避スルモノ。
2. 交配後一ヶ月以内ニ再ビ發情セザルモノ。
3. 交配後一ヶ月ニ達セシトキ腹部稍、膨張シ且ツ乳房大トナル、腹部ヲ摩擦スル時瘤塊ニ觸レルハ確徵デアル。

第三節 妊犬ノ取扱

妊犬ノ飼養管理ノ要旨ハ母體ヲ強健ニシ胎兒ノ健全ナル發育ヲ計リ流産ヲ防グノデアル、即チ榮養分ニ富ミ消化シ易キ食餌(魚肉類)ヲ豊富ニ與ヘ特ニ蛋白質、骨成分ノ分量ヲ十分ニシ、骨成分少キトキハ磷酸石灰一日一茶匙ヲ與ヘ食餌ノ回数ハ敢テ増加スル必要ナキモ消化ヲ容易ナラシメル爲三回ニ分與スルヲ可トシ、不消化物、刺戟物、水浴ヲ禁ジ、犬舎ハ清潔ニシテ寢藁ヲ敷キ寒冷、濕潤ヲ防ギ日々能ク皮膚ノ手入ヲ行フ。

受胎前半期ハ普通ニ使役シ得ルモ過劇ナル勞働ハ流産ノ原因トナルカラ之

ヲ避ケナケレバナラナイ、後半期ハ一般ニ使役ヲ廢シ毎日午前午後一時間適當ナル逍遙運動ヲ行ハスヲ可トスル。

第四節 分娩

妊娠後五十九日乃至六十三日ヲ經過スレバ分娩シ、其頭數ハ一定シナイケレドモ普通四頭乃至十頭ヲ分娩スルモノデ一頭ヲ産出シ次ノ一頭ヲ産ム迄二十三分ヲ要スルカラ全部ノ分娩ヲ終ル迄ニハ約三、四時間ヲ要スルモノデア

ル。
分娩ノ徵候ハ食慾減ジ不穩トナリ寢藁ヲ搔キ後體ヲ顧眄シ或ハ犬舎ノ一隅ニ伏臥シ陰唇膨大潮紅シ粘稠ナル粘液ヲ漏出スルカラ此頃ニハ寢藁ヲ多量ニ入レ他人ノ出入ヲ禁ジテ不安ヲ除ク、犬ハ分娩毎ニ産仔ノ汚物ヲ舐メ臍帶ヲ切斷シ自ラ處理シ産仔終リ暫クニシテ娩隨ヲ排出シ茲ニ全ク分娩ヲ終ルノデアアルカラ茲ニ於テ新ニ準備セル寢臺箱ニ移シ替ヘルノデアアル。

第八章 衛生

第一節 一般衛生

一般衛生中ノ飼養管理上ノ須要ナ事柄ハ其ノ梗概ヲ説述シ盡シタガ、尙犬ヲ實際使役スル上ニ衛生的ニ而カモ合理的ニ實施スルタメ、必要ナ事柄並ニ其他養犬家トシテ須要ノ事柄ヲ補足的ニ次ニ述ベヨウ。

其一 平常ニ於ケル使役

- 1、使役スル前ニハ必ラズ健否ノ検査ヲ行ツテ飲食慾ノ有無ハ勿論其ノ他犬ノ状態ニ注意ヲ拂ヒ殊ニ飲食慾ノ無イモノハ其ノ使役ヲ免ジ休養セシム可キデアル。
- 2、夏季殊ニ蒸熱ナ時勞働激シイ時ハ屢々飲水ヲ與ヘ疲勞ヲ醫シ他面ニハ日射病、肺充血等ニ罹ラス様事前ニ豫防法ヲ講ズルガヨイ。
- 3、食後直チニ劇烈ナ勞役ヲ課スル事ハ消化器病ヲ誘發スルノ因ヲ醸成スル

カラ作業開始ハ食後少ナクトモ一時間位ヲ經過セナクレバ不可デアル、又課役ハ漸進ニ程度ヲ高メルノガ原則デアル。

- 4、作業間ハ不斷犬ノ状態ニ注意ヲシ疲勞ノ色ガアツタラ休息ヲセシメテ飲水ヲ與ヘ疲勞ノ恢復ヲ待テ作業ニ服セシメ決シテ無理ナル要求ヲ強ヒテハ不可デアル。

- 5、休憩ヲサス時間ハ作業ノ程度ニ應ジ斟酌ス可キハ勿論其ノ回数モ同様ノ理由デ適宜増加ス可キデアル。

- 6、休憩時ハ可成精神的慰藉ノ手段ヲ講ジ作業終ツタナラバ充分手入ヲ施シテ疲勞ヲ醫ス可キデアル。

演習後ノ手入ノ時ハ犬體ニ異常ガアルカ否カヲ能ク検査ス可キデアル、使役中意外ノ外傷不慮ハ勿論其ノ他内科的ノ疾病ヲ誘發スル事ガアルカラデアル。

其二 野外行軍演習又ハ特別體力ヲ要スル使役

- 1、特種ノ行軍演習ニ參加スル場合ニハ必ラズ豫備的ニ使役ノ目的達成ニ充

- 分ノ體力ヲ具備スル様ニ強健法ヲ實施スルガヨロシイ、
而シテ強健法ヲ行フ日數ハ概ネ七日乃至十日間毎日距離ヲ逐次増加シ三日毎ニ一日休養(但シ休養日ト雖道遙運動ヲ課スルコトガ必要)ヲナシ、希望ノ體力ヲ有スル程度ニ達スル迄行ヒ、其ノ間ハ平常ヨリ滋養分ニ富メル補助飼料ヲ與ヘ兩々相待ツテ體力ヲ養成シ或ハ助長ス可キデアアル。
- 2、課役前犬體ノ細密ナル検査ヲ行フ可キデアアル。
 - 3、犬ノ行軍速度及一日ノ行程ハ人ノ歩行スルノト同様デアツテ其ノ休止モ亦同一時間ヲ附與ス可キデアアル。
 - 4、使役間ハ規定ノ日量以外ニ滋養消化シ易キ補助飼料(獸肉、魚肉)一日三十匁以上増飼ガ必要デアアル。
 - 5、使役間、水筒或ハ其ノ他適宜ノ器具ニ飲水ヲ携行シ適時ニ飲水ヲ與ヘルノハ疲勞ヲ恢復シ潛性力ヲ養フ事ガ出來テ元氣ヲ新ニスル効ガアル。
 - 6、夜間及ビ不良ナル道路ノ歩行ハ疲勞大デアアルカラ宿營地ニ至リテ十分休養セシム可キデアアル。

- 7、宿營ニ當リ寒冷ノ季節特ニ雨雪ノ時ハ出來得ル限り屋下ノ安靜ナ場所ニ寢所ヲ設ケテ一日ノ疲勞ヲ醫セシム可キデアアル。
- 8、長距離ノ行軍演習ノ際ハ角砂糖カ若クハ『ビスケット』ヲ携行シ休憩時少量宛與ヘレバ勞ヲ慰メルバカリデナク犬體ノ糖分ヲ補給シ疲勞ノ恢復ヲ迅速ニ且ツ容易ナラシメルノ利益ガアル、但シ糖分ノ過給ハ下痢ヲ誘發スル惧ガアルカラ其量ヲ適當ニスルノ注意ガ必要デアアル。
- 9、應急ノ衛生材料ヲ携行シテ急救ノ處置ヲ講ズルトキハ疾病ヲ未然ニ防止シ又ハ重症ニ陥ルコトナク經過セシメ得ル。
夫ニハ先ヅ疲勞恢復劑、沃度丁幾、繃帶、脫脂綿、『ガーゼ』等ガ必要デアリ、又健胃劑トシテハ稀鹽酸(稀鹽酸一、〇水五〇、〇ニ混ジ一食匙宛與フ)胃散(重曹一〇、〇『ゲンチアナ』二、〇『メントール』二、〇『ヂアスターゼ』〇、一ノ割合ニ混ジ其一茶匙ヲ每飼料ニ混與スル)ヲ最適トスル。

其三 犬ノ睡眠

睡眠ハ獸類ト雖モ勞働後ノ疲勞ヲ醫スルタメ必要缺クベカラザルモノデア

ルカラ使用ノ後ハ所要時間必ラズ睡眠ヲ與ヘル必要ガアル、犬ハ晝夜ニ亘リ不斷使役シ得ル如ク考ヘル者アルハ大ナル誤デアル。

世界大戰中英軍ハ警戒犬トシテ夜間使役セシモノハ晝間、晝間勤務ノモノハ夜間全ク休眠セシメタトイフ事デアアル。

其四 疲勞ト其ノ恢復法

犬疲勞ニ陥ルト元氣頗ル衰へ運動ヲ厭ヒ倦怠ノ色ガアリ、食慾減損シ其重イモノハ全ク食事ヲ廢絶シ、休止スルト頭ヲ垂レ直チニ横臥シ（輕キモノ）嗜眠シ（重病ノモノ）呼吸、脈搏ハ疾速トナリ容態ハ元ニ復サナイ、排尿ノ回數ガ減少シ且其色濃黃色デ粘稠トナル。

コノ様ニ疲勞ヲシタ犬ノ恢復法ハ先ヅ第一勞役ヲ休止シ、夏季デアアルナラバ清涼ナ樹蔭ニ冬季デアレバ陽光アル溫暖ナル場所ニ牽連シ専ラ休養セシメ藁デ全身ヲ摩擦シ他面ニハ清水ト疲勞恢復劑トヲ與へ食餌ハ消化シ易クテ滋養ニ富メルモノヲ與ヘルノデアアル。

疲勞恢復劑トシテハ糖分『メントール』酒精赤酒、重曹等種々アルモ疲勞恢復

合劑（精製樟腦一〇〇拘櫛酸一二〇『メントール』三〇單舍利別適宜甘草末五〇〇ヲ混ジ百丸トシ一回一、二粒ヲ與ヘル）最モ有効デアアル。

其五 輸送

鐵道及船舶輸送ノ際ニ於ケル衛生上ノ著意ハ全ク平素ニ於ケルト同一デアアルガ鐵道ノ輸送ニ方リテハ軍隊専用ノ列車デナケレバ食餌飲水ヲ途中デ給與スルコトハ困難デアルカラ豫メ搭載二時間前ニ一日分ノ食餌（肉類ヲ多量ニ混ズルガヨイ）ヲ與へ輸送犬箱ニ入レル際ハ更ニ飲水ヲ充分採ラシメ、斯ノ如クスル時ハ二十四時間ノ輸送ニ堪ヘルモノデアアル、下車後ハ直チニ飲水ヲ與ヘレバ宜シイ。

其六 防疫及治療ニ關スル注意

1. 防疫

傳染病就中人畜ニ危險デアアル狂犬病ト幼犬ヲ好デ侵襲シ而カモ死亡率甚ダシキ犬瘟熱ニ對スル防疫ハ犬取扱上最モ主要ナ事柄デアアル、防疫上著意ス可キ事柄ノ梗概ヲ述ベルト次ノ様デアアル。

イ、犬ノ所有者ハ相互ニ他人ノ犬舎附近ニ入ル事ヲ防制シ相互接觸ノ機會ヲ嚴ニ避クベキデアル。

ロ、疑似病犬ガ出來タ場合ハ速ニ其ノ兩側ノ犬ト共ニ各別々ニ隔離ヲシテ一定ノ期間視察シ疑ノナキニ至ツテ始メテ他ノ犬ト同棲サス可キデア
ル。

ハ、多ク犬ヲ繫養シテアル所デハ一度傳染病ガ發生シタナラバ毎日總テノ犬ノ健康検査ヲ實施シ、犬舎ハ勿論犬舎周圍ノ清潔法ト大消毒ヲ行ツテ病原菌ヲ撲滅セシメルノ著意ガ大事デアル。

ニ、狂犬病ノ豫防上毎年一回其豫防注射ヲ實施スル必要ガアル。
2、一般治病上ノ注意

各種疾病ニ就キテノ症狀ヤ治療法ハ第三節以降デ詳細述ベルガ尙全般共通のニ必要ナル治療法ノ注意事項ヲ述ベルト次ノ様デアル。

イ、攝養療法 之ガ適否ハ如何ナル病氣デモ治療スルカ又ハ不幸斃死スルカノ分レル所デ其宜敷ヲ得ルト何等藥ノ力ヲ借ルコトナク治療セシメ

得ルコトハ尠クナイ、殊ニ攝養療治ノ内、食餌、保温、清潔、運動等ニ對スル注意ハ藥物治療ト共ニ缺クベカラザルモノデアアル。

ロ、疾病ノ手當ノ遲速ハ經過ニ至大ノ影響ヲ及ボスモノデ發見ガ早ク手當ガ速カナル程經過ヲ短縮シ得ルカラ異常ヲ發見シタナラバ速カニ受診スルノ著意ガ肝要デアアル、此際診斷ノ助トナルベキ事柄ハ細大洩ラサズ稟告スルガ宜シイ。

3、内服藥ノ用量

犬ノ大小及年齢ニ依リ差異ガアルガ藥用量ノ比率ヲ概括スルト次ノ様デア
アル。

生後六ヶ月以上ノ用量	1
生後三ヶ月乃至六ヶ月ノ用量	$\frac{1}{2}$
生後三ヶ月以内	$\frac{1}{4}$

次ニ藥物ノ計量上ニ用フル所ノ表示方法ヲ舉ゲヨウ。

一茶匙 約四、〇（咖啡ニ用フル普通ノ匙）

一食匙 約一五〇(西洋料理スプーン用匙)
4、内服藥投與法

散劑

- 1 『カプセル』ニ入レロヲ開キ舌根ニ押込ミ嚥下セシメル法。
- 2 美食(肉、『ビスケット』)ニ混ズル法。
- 3 胃散ハ普通食餌ニ混ジ『カマラ』ハ『ミルク』ニ溶解シテ與ヘル
方法ニヨルノガ普通デアアル。

水劑

- 1 少量ナルモノ(例ヘバ四塩化炭素)ヲ『カプセル』ニ入レ與ヘル。
- 2 矯味劑ヲ多ク入レ投藥器(半徑一、五釐長サ一〇、釐ノ竹筒)ニ入レ
頸部ヲ固定シ口角ヨリ注入ヲスル。

丸劑 『カプセル』ノ投藥法ニ同様

第二 傳染病

犬ノ傳染病トシテハ犬瘟熱、狂犬病、結核、犬ノ窒扶斯、炭疽、犬痘、犬腺疫等アルガ
屢々發生シ而カモ被害ノ甚大ナノハ犬瘟熱及狂犬病デアアル。

其一 犬瘟熱

本病ハ直接或ハ間接ニ病犬ト接觸スルニ由テ傳播スル急性熱性傳染病デア
ル。幼犬ヲ侵襲スルタメ特ニ幼犬病ノ名ガアル。

本病ハ『カテゴリー』型、胃型、神經型、皮疹型及眼型犬瘟熱ト稱スルコトノ出來ル
様ニ種々ナ型ヲ發生スル。然シ單純ノ型ヲ發生スルハ稀デ數型複合シテ來ル
ノガ常デ一度コノ病ニ罹ルト久シキ間免疫スルタメニ成犬ノ罹ルコトハ稀
デアアル。

徵候

本病ハ全身違和ヲ以テ端ヲ發シ即チ病犬ハ倦怠、不活潑、食慾減損シ疲勞シ
易ク惡寒戰慄シ被毛粗剛ニシテ鼻端乾燥シ熱ヲ帶ビル。體温ハ四十一度乃至
四十二度ニ達スルノガ普通ダガ強壯ナル老犬ニ於テハ輕熱ノモノガアル。夫
デ徵候ハ冒サレル部位ニヨリ前述ノ如ク色々ノ型ニ分類スル通り各型各樣
デアアルガ大概左ノ如キモノデアアル。

1、眼 多クノ場合ニ眼ノ症狀ヲ現ス結膜潮紅腫起、眼瞼腫脹シ、初期水樣流

涙アルモ速ニ粘液及膿ニ變ジ結膜囊殊ニ内眥ニ蓄積シ又ハ眼瞼ニ附着シ乾燥シテ痂皮ノ狀ヲ呈スル(眼型犬痘熱)之ニ伴フニ角膜缺損及潰瘍虹彩脫、葡萄腫ヲ發スル尙虹彩炎及化膿性全眼球炎ヲ起スコトガアル。

2、消化器 食慾減損、嘔吐、粘膜潮紅乾燥シテ渴甚ダシク初期便通遲滯シ末期ニハ下痢シ糞ハ惡臭ヲ帶ビ往々粘液泡沫液若クハ血液ヲ混ズ、罕ニ黃疸ヲ見ル。

3、呼吸器 當初鼻カタールノ徵ガアツテ水様鼻漏、晩期ニハ粘液及膿様液ヲ排泄シ屢々噴嚏シ鼻腔ニ癢痒アルタメ前肢デ之ヲ摩擦ス、晩期ニナルト鼻液ニ臭氣ヲ帶ビ敗膿ノ狀トナル、大抵鼻カタールト同時ニ喉頭カタールヲ發シ粗勵ノ乾咳ヲ發ス、後ニ濕咳ニ變ジ其都度咯痰シ咽頭ニ蓄積スレバ嘔吐ヲ催シ絞約運動ヲ來タス、又「カタール」ガ喉頭及氣管氣管枝ニ波及スルト呼吸ハ頻數咳嗽頻發シ肺炎ヲ發スレバ高度ノ熱、呼吸困難ヲ來タスガ常デアル。

4、神経系 腦充血ヲ發シ眼光凄ク頭蓋熱ヲ帶ビ不安ニシテ興奮シ、晩期ニ

至レバ沈鬱スル、又身體ノ一局部ニ或ハ全身ニ強直兼間代性痙攣(搐搦)ヲ現スモノガアル、或ハ末期ニ麻痺ヲ見ルコトガアル、カ、ル麻痺ハ一肢若クハ兩後肢ニ發シ、又ハ全身ノ痙攣ヲ來シ、患犬ハ後體ヲ支ヘルコトガ出來ナクテ伏臥勝デアル。

貽後病トシテ後肢ノ痙攣、膀胱、直腸ノ麻痺、露舌、聾、盲、嗅覺脫失、痴呆ヲ見ルノハ稀デナイ。

5、皮膚 後肢ノ内面及腹下ニ偏豆大乃至蠶豆大ノ膿疱ヲ發ス、膿疱ハ全身ニ波及シ稍々稀ニ尋麻疹ヲ生ズル事ガアル。

經過死亡率

輕症ハ八乃至十日内ニ癒エルガ通常長クテ三、四週日ニ亘ル、重キ合併症(神經病)アル時ハ年月ノ久シキニ亘ル事稀デナイ。

死亡率ハ五十乃至六十%デアアル。

治療法

本病ハ前ニ述ベタ通り病ノ型式ガ種々アルノデ、療法モ一ツノ方法デ全テノ

病型ニ對シテ效果ガアル様ナモノハナイ、治療藥及豫防藥ニシテ種々ノ血清
ガ製出サレタガ、何レモ何時デモ效果アルモノトハ信ゼラレス、夫故ニ犬瘟熱
ノ治療法ハ主トシテハ對症的ノモノニ過ギナイ即チ。

眼病膿漏ニ對シテハ硫酸亞鉛又ハ硝酸銀ノ一—二%溶液、角膜ノ潰瘍二%ノ
『コカイン』硼酸溶液又ハ1/2—1%ノ『クレオリン』液デ洗滌ヲ行フ
消化器病ニハ健胃消化劑ヲ與ヘル。

病初ハ吐劑デ病勢ヲ頓挫セシメ得ルコトガアル夫デ吐劑トシテハ(鹽酸ア
ボモルフイネ〇〇五—〇〇一蒸餾水五〇)皮下注射又ハ内服ヲサス。

健胃劑トシテハ稀鹽酸(數滴)苦味丁幾ヲ與ヘル(例之稀鹽酸五〇苦味丁幾
二〇〇水三〇〇〇一日三回半食匙又ハ一食匙)或ハ大黃丁幾(一回量一茶匙)
又次硝酸蒼鉛若クハ『サリチール』酸蒼鉛一回量〇、一乃至〇、二肉越幾斯(二
乃至五〇)葡萄酒又ハ赤酒一茶匙ヲ與ヘル。

頑固ノ嘔吐ヲスル様ナモノニハ屢々氷片ヲ與ヘ阿片〇、一乳糖三、〇ヲ内服セ
シメル。

下痢ニ對シテハ止瀉劑ヲ與ヘ『タンニン』酸二、〇單舍利別一〇、〇卵白一個水
一五〇、〇ヲ混和シ毎三時間ニ一食匙又ハ甘汞〇、〇五阿片末〇、一乳糖〇、五ヲ
一日一回與ヘル。

呼吸器、喉頭、胸壁ニハ溫濕布ヲ纏フ。

氣管枝炎及肺炎ノアルモノニハ鹽酸『モルフイネ』〇、一苦扁桃水一〇、〇蒸餾
水一五〇、〇一日三回一茶匙乃至一食匙ヲ與ヘル又ハ磷酸『コデイン』蜀葵舍
利別一〇、〇茴香水一五〇、〇毎三時一茶匙乃至一食匙、杏仁水二、〇吐根丁幾〇、
五『サリチール』酸『ナトリウム』一、〇水三〇、〇ヲ混ジ一日三回ニ與ヘル。

神経系病、痙攣ニ對シテハ臭素『ナトリウム』(或ハ『カリウム』)一〇、〇水二五
〇、〇(一日三回一茶匙乃至一食匙)『スルフオナール』(一、一四、〇)抱水『クロラ
ール』(〇、五乃至二、〇)ヲ粘汁ニ容解シ灌腸スル、麻痺又ハ衰弱セルモノニハ珈
琲(五乃至一〇、〇熱湯一〇〇、〇ノ浸劑)樟腦精(一乃至二、〇)『カフェイン』(〇
五—二、〇)皮下注射ヲ選用スル、衰弱甚ダシキ時ハ生理的食鹽水ヲ三〇、〇立方
糖注射スル。

熱四十度以上ノ熱久シク持續スル時ハ『アスピリン』『アンチピリン』(〇.二—〇.五)『アンチフエグリン』(〇.二五—一.〇)ヲ與ヘルト多クハ解熱ノ目的ヲ達成スル。

豫防法

- 1、豫防上ノ第一義トシテハ幼犬ヲ常ニ強健ニシテ置クノデアアル、夫ガタメニハ寄生蟲ノ驅除ヲ適時適確ニ行ヒ、食餌ハ滋養ニ富ミ消化シ易イモノヲ與ヘ一面能ク運動ヲ課スルノガ必要ノ事柄デアアル、殊ニ體質虛弱ナルモノニ於テハ上述ノ勵行ハ缺ク可カラザル豫防手段デアアル。
- 2、感冒ハ本病ノ最大ノ原因デアアルカラ幼犬ヲ雨露ニ曝露セシメタリ或ハ犬舎ノ保温ノ不良ナドハ充分注意ヲセネバナラナイ。
- 3、猥リニ他犬ニ接觸サセヌコトハ又必要ノ事柄デ假令疑似ノモノデモ發生シタナラバ速ニ隔離スルガヨイ。

其二 狂犬病

狂犬病ハ急性ノ致死の接觸傳染病デ最モ犬ニ多發スル、通常病獸ノ咬嚙ニヨ

リテ動物ヨリ動物ニ又動物ヨリ人ニ傳播シ意識ノ障礙、中心神經ノ興奮及續發スル麻痺ヲ特徴トスル。

潜伏期

自然感染ノ時ハ最短二週間デ其ノ最長ハ恐ラク一年若クハ其以上デアルト言ハレテ居ル病犬ニ咬嚙サレ、ソノ後發病スル迄ノ期間ハ大體三—六週間デアル。

徵候

本病ニハ躁狂ト鬱狂トノ二通アル。

躁狂

1、前驅期(不安期) 犬ノ舉動一變シ不安神經質トナリ憤怒シ易ク又頑犢トナリ逸走セントシ、食慾ノ病的錯亂ヲ來タシ、糞、土石、木片、硝子片、自己ノ糞等ヲ貪食スル、カカル状態ハ半日乃至二日間持續スル。

2、興奮期(狂亂期) 狂亂期ト言フ様ニ狂躁、痙攣ノ發作一張一弛スルヲ特徴トスル、而シテ平均三、四日ニ至ル、此間ハ不穩ノ狀ハ著明トナリ漫リニ奔逸ヲ

企テ欄ヲ毀テ鏈ヲ斷テ窓戸ヲ破ラントスル、戶外ニ脱走シ目的ナク處々ヲ徘徊シ、又咬嚙ヲ逞ウシ、人畜其他ノ動物ヲ問ハズ苟モ遭遇スルモノハ皆之ニ咬著シ甚シキハ齒芽ノ折損スルヲモ意トセズ鐵桿熱火ヲ咬ムモノガアル。其他ノ要徴ハ音聲一變シ嘶嘎粗糲ニシテ長ク引ク所ノ吠鳴トナル。

3、麻痺期 末期ニアツテ大イニ羸瘦シテ相貌一變シ毛子粗剛、眼球陷沒眼光瘳惡、咽頭麻痺シ嚥下不能トナリ、或ハ下顎麻痺シテ口ヲ哆開シ舌ヲ挺出シテ涎ヲ流出スル、或ハ身體ガ麻痺シテ起立不能トナリ、衰弱ガ加ツテ大體五日乃至八日長クトモ十日ヲ越エナイデ斃ル。

鬱 狂

興奮發狂ノ期ヲ缺クカ或ハ其期至ツテ短キモノヲ言フノデ下顎麻痺ヲ特徴トシ大概二、三日デ斃レ、恢復スルモノハ殆ンド稀有デアアル。

豫 防 法

先ヅ治療ノ手段方法トシテハ現下ノ狀態デハナイノデアアルカラ人畜ニ危害ヲ及ボサヌ様ニ總テ屠殺ヲスル。

毎年一回本病ノ豫防注射ヲ行ヘバ先ヅ大概ハ犬ニ咬嚙サレテモ安心シテヨロシイ。

若シ人が犬ニ咬嚙サレタ場合狂犬病ノ罹否ガ不明デアラバ豫防注射ヲ行フノヲ安全トスル。

第三節 呼吸器及循環器ノ疾病

其一 呼吸器病

呼吸器ノ疾患トシテ主ナルモノヲ記述セバ次ノ諸病デアアル。

イ、鼻カタール 原因ハ感冒ガ主ナルモノデ繼發的ニハ犬瘟熱ノ場合ニモ亦鼻カタールヲ發スルノデ單純ノ鼻カタールデアルカ將亦否デアアルカヲ區別スルノ必要ガアルガ此兩者ノ區別モ却々困難デアアル、夫デ鼻カタール(感冒)ノ場合ハ往々犬瘟熱ヲ誘發スルコトガ多イカラ何レニシテモ取扱上ニハ注意ヲ肝要トスル。

主ナル徵候ハ鼻涙噴嚏頻々頭ヲ掉リ前肢ニテ鼻ヲ摩擦スル外、鼻塞音並ニ粘液音ヲ發シ時トシテ多量ノ膿粘液ヲ漏シ或ハ血液ヲ混ズ、或ハ時ニ

室死又ハ脳病ノ原因トナルカラ輕視シテハナラス。

療法トシテ溫暖デ換氣ノヨキ所ニ移シ食鹽又ハ重曹(1%)ノ吸入ヲ行フ
ロ、喉頭カタル 原發ノモノト繼發ノモノトノ二ツアル後者ハ主ナルモ
ノハ犬痘熱デアルガ之ハ犬痘熱ノ項ニ詳述シタカラ此處ニハ述ベナイ。

原因 感冒デアアル從テ之ガ發生ノ多イノハ寒冷ノ季節デアアル。

徵候 咳嗽ヲ主ナル徵トシ咳嗽ノ際ニ嘔吐シ易イ、喉頭ハ知覺過敏デ鼻
孔ヨリ粘液ヲ漏ス、重病ノモノハ呼吸ガ困難トナリ喉頭部ニ異常ノ音ヲ
聞ク。

療法 保温ト換氣ニ努メ喉頭部ニ濕布ヲ施ス、鎮咳劑トシテ磷酸「コデ
イン」〇、三單舍一〇、〇蒸餾水一五〇、〇混和毎三時間一食匙。

或ハ鹽酸「ヘロイン」〇、一單舍利別一〇、〇蒸餾水一五〇、〇毎六時一茶匙。

ハ、氣管枝カタル

原因 感冒、刺戟性ノ瓦斯(毒瓦斯)ノ吸入(犬痘熱ノ場合ニモ併發的ニ
發生スル)

徵候 高熱ヲ以テ發病シ患犬ハ沈鬱、戰慄、食慾廢絶シ頻々咳嗽ヲ發シ鼻
孔ヨリハ水様液、粘液様液又ハ膿様ノ液ヲ漏ス、試ミニ耳ヲ胸壁ニ當テル
ト髮ヲ捻ル様ナ音ヲ聞ク。

治療法 安靜ニシ換氣ヲヨクシ且空氣ニ一定ノ濕度ヲ保タス、之ガ手段
トシテハ平鍋ニ水ヲ沸シ火爐ノ上ニ熱スルノデアアル、尙收容室又ハ箱ノ
内ノ溫度ヲ調節シテ滋養物デ而カモ易化ノモノヲ與ヘル、序デ食鹽、重曹、
明礬水ノ蒸氣吸入ヲ施ス可キデアアル。

内服藥トシテハ祛痰劑「セネガ」根浸(一〇、〇)一五〇、〇杏仁水六、〇ヲ混
ジ一日三回一茶匙又礮砂〇、二一一、〇硫黃〇、〇五一一、〇三ヲ與ヘル。

鎮咳劑トシテハ喉頭カタルト同一ノ治療法ヲ施セバヨイ。

ニ、肺充血

原因 過劇ノ勞働(殊ニ炎暑時)長距離ノ汽車輸送。

徵候 呼吸頻リニ促迫一分間六〇―一〇〇ヲ算シ露出粘膜ハ鮮赤色ヲ
帶ビ患畜ハ不安鬱憂、眼球凸隆、脈ハ頻數デアアル。

治療法 胸部ニ冷罨法又ハ刺戟擦劑ヲ塗布シ尙緩下劑ヲ投與スルノデアル、衰弱ノ徵ガアレバ『エーテル』精又ハ『アルコホル』ヲ水ニ混ジテ與ヘル。

ホ、肺出血

原因 主トシテ心臟糸狀蟲ニ依ルノデアアル。

徵候 鼻及口ヨリ泡沫ヲ混ジタル鮮赤色ノ血液ヲ排出ス、血液ヲ緩流シ或ハ急ニ迸出スル、カカル状態ニ化スルト呼吸ハ促進シ咳嗽ヲ發シ不安震戰鬱憂シ發汗ガ甚シイ、尙出血甚シキ時ハ失神シ行歩踳踉デ結膜ハ蒼白トナリ皮膚厥冷、脈ハ細小デアアル。

治療法 通常胸部ニ冷罨法又ハ冷湯ヲ施シ止血劑ノ注射又ハ血液ノ凝固性ヲ賦與スルタメ『ゲラチン』ニ一〇ヲ生理的食鹽水ニ溶解シ皮下ニ注射ヲ行フカ或ハ『クロールカルシウム』(一—二%)ヲ皮下注射スルト良効ヲ奏スル。

ヘ、カクテール性肺炎

原因 大體氣管枝カクテールノ原因ト同一デアアルガ幼犬ハ犬痘熱ノ繼發症トシテ可成頻繁ニ襲ハレル、夫デ徵候モ又大同小異デアアル、即チ高熱デ鼻漏ト弱キ痛咳ガアリ且呼吸ハ促進スル。

治療法 犬痘熱ノ場合ノ肺ノ病狀ニ對スルモノト同ジデ祛痰劑、鎮咳劑及下熱劑ヲ投與シ尙充分攝養療法ニ留意ス可キデアアル。

ト、肋膜炎

原因 此ノ疾病ニハ原發性ノモノト繼發性ノモノトノ二者アル而シテ前者ノ主因ハ感冒デ後者ハ結核性ノモノガ多イ。

徵候 食慾ハ急減、倦怠、被毛逆立、惡寒、戰慄、眼瞬憂苦、體溫上昇、脈數増加シ且微弱、呼吸疾速、淺表腹式デ帶痛性ノ咳嗽ガアル。

療法 患犬ヲ安靜ニシ且易化滋養食ヲ與ヘテ榮養状態ヲ良好ニ保持スルノガ第一要諦デアアル。

初期冷水又ハ氷雪デ胸壁ヲ冷却シ、時日ガ經過シ慢性ノモノデアアルナラバ、濕布又ハ芥子泥ヲ胸壁ニ塗布シ、高熱ノモノハ下熱劑(アスピリン、ア

ンチピリン)ヲ其他利尿劑(醋酸加里甘汞)強心劑(ヂキタリス、ストロフ
ム、カル酸ナトリウ)ヲ投與スル

チ、胸水

原因 心臟病(瓣膜病)肺病、腎臟病或ハ貧血ノタメニ來ル。

徵候 胸腔内ニ滯液ノ分量ガ多クナルト呼吸困難、水平濁音ヲ呈スルガ
本病ハ體温ノ上昇ヲ見ナイノガ特有ノ病狀デアアル。

治療法 利尿及強心劑(醋酸カリウム液二〇、〇ヂキタリス葉浸〇、五)五
〇〇、〇單含二〇、〇毎三時一食匙。

其二 循環器

循環器病ノ主ナルモノ左ノ二種デアアル。

イ、急性心内膜炎

原因 創傷ヨリ感染(傳染病原菌ノ侵入)シテ發病スルノト犬瘟熱ノ繼
發病トシテ發スルノト二ツノ原因ガアル。

徵候 心臟ノ部分ニ手ヲ觸レルト心搏動ガ著シク強ク胸壁ヲ衝動スル

ノガ感知サレ脈數ハ非常ニ多ク(一二〇—一四〇)且不正デ心雜音ヲ聞ク。

治療法 運動興奮ヲ避ケ安靜ニシテ心臟ノ部分ニ冷却法ヲ施シテ尙強
心劑ヲ與ヘル。

ロ、慢性心内膜炎

原因 急性ノモノカラ轉症スルモノト然ラザルモノトアル、夫デ後者ハ
糸狀蟲ノタメニ發病スルモノデアアル、此ノ外尙腎炎ニヨルモノ結核ニ
原ク反復ノ感冒及過度ノ勞働ハ發病ノ原因ヲナスモノデアアル。

徵候 脈搏及心搏動ガ疾速デ呼吸困難、水腫チアノーゼ(結膜及其他ノ粘
膜ガ紫色ヲ呈シテ來ル)トナリ或ハ黄色(黃疸)ヲ呈シ尿量ガ減少羸瘦
シ心音ハ必然雜音ヲ交ヘルノデアアル。

治療法 勞役ヲ輕減シ滋養食ヲ與ヘ尙強心劑(ストロファンチヌチン
キ)一、〇白糖一〇、〇水六〇、〇一日二回一食匙又『ヂキタリス』葉〇、一乳
糖〇、五一日一包利尿劑、醋酸ナトリウム(二、〇—四、〇)衰弱甚シキモノハ
衝動劑樟腦油『アルコホル』ヲ處方シ心臟著シク興奮スルナラバ心臟部

ノ冷卷法ヲ施スガヨイ。

第四節 消化器病及運動器病

其一 消化器病

犬ノ疾病ノ中デモ消化器病ハ最モ頻繁ニ發生スルモノデ幼犬ト成犬トノ論ナク苟モ犬ヲ飼養管理スルモノハ充分心得テ置カネバナラヌ、今其中主要ナルモノヲ述ベルト次ノ様ナモノデアアル。

原因 飼養ノ失宜之ハ犬ガ一時ニ多量ノ食餌ヲ與ヘル習慣アルノデ往々過食ヨリ發病スルコトガ多イ、又骨附ノ肉ヲ與ヘル關係上、胃内ニ此様ナ異物ノ存在ノ爲ニ或ハ食餌ソノモノノ變敗セル場合或ハ運動ノ過不足等種々ノ原因ガアル、其他症候的ニ發スル場合ガアル（犬瘟熱、內臟、寄生蟲、心臟病、肺腎ノ病、感冒等）。

徵候

A、胃食滯 是ハ大概自然ノ機能デ嘔吐ヲシテ治癒スルノガ常デ假令嘔吐

ヲセナイマデモ屢々嘔吐ヲ試ミテ盛ニ流涎ガアル、食慾ハ全クナク採食ヲ強要セバ嘔吐ヲ催ス、之ト反對ニ飲水ハ頻リニ要求スル、胃部ガ著シク膨大シ之ヲ壓スルト疼痛ヲ訴ヘル、患犬ハ憂鬱デ不活潑呼吸ハ著シク促進シ不安デ自己ノ身體ノ位置ヲ頻時變換ヲスル。

B、胃カタル 胃カタルハ食慾ノ障礙嘔吐（之ハ特有ノ病狀デハナイ何トナレバ犬ハ胃ノ其他ノ疾病又ハ胃以外ノ臟器ノ疾病デモ發生スル、カラデアアル）飲慾亢進、胃部ノ壓痛、輕熱及精神鬱憂ガ伴フモノデアアル。

C、腸カタル 單獨ニ腸ノミ罹病スル時ハ胃カタルノ様ニ食慾ノ廢絶スルコトガナク胃腸部ヲ壓スルモ疼痛ヲ訴ヘナイ、主ナル症候ハ下痢ヲスルカ或ハ正反對ニ便秘ヲスル、下痢ヲスル場合最初ハ巴布狀デ後ニナルト粘液又ハ水様トナリ時ニ血液或ハ泡沫ヲ混ジテ臭氣ガ甚ダシイ、便秘スル時ハ患犬ハ頻ニ努責シテ排糞ヲ試ミルガ通便ガナク唯疼痛ヲ覺ユルバカリデ腹部ヲ按診スルト固キ糞塊ノ存在スルノヲ認知スルコトガ出來ル。

治療法 第一ニ絶食セシメルカ或ハ大イニ減食セシメ飲水ヲ攝セシメル、胃ニ食物ノ停滯シアル時ハ吐劑(鹽酸アボモルヒネ、吐根末、吐酒石)ヲ與ヘ尙健胃劑(稀鹽酸〇、一—〇、五瓦)又ハ苦味丁幾五、〇稀鹽酸二、五水一五〇、〇(一日三回一茶匙)大黃四、〇一日三回服用。

下痢ガアル場合ハ乾食ト粘汁(葛湯、米飯汁)ヲ與ヘ腹部ヲ温包スル、處方トシテハ阿片丁幾(一、〇—三、〇)頑固ノモノハ『タンニン』酸『アルブミン』(〇、二—〇、五)ヲ與ヘル。

便秘ニハ水ヲ灌腸シ腹ヲ按摩シ下劑(蓖麻子油二〇—三〇、〇P.C)甘汞(〇、二—〇、四)ヲ處方スル。

ロ、胃腸炎

原因 變敗セル肉、内臓、魚類腸結、之ハ腐敗菌及『プトマイン』ニ職由スル。

徵候 卒然出血性ノ下痢ヲ發シ且嘔吐スル、頻ニ飲水ヲ慾求スル、高熱(四十一—四十二度)ヲ呈シ困憊瘧瘵ヲ發スル。

治療法 吐劑及下劑(甘汞〇、一白糖〇、五頓服)。

ハ、腹 水

老犬及幼犬ニ頻發ノ病氣デ原因トシテ胸水ト同様デアアル。

徵候 腹部ハ徐々ニ膨滿シテ來テ殊ニ臍部ハ突出スル、腹部ヲ按診スルト腹側上部ハ弛緩シ下部ニ緊張シ波動ヲ呈スル時ニ拍水音ヲ聞ク、之ハ姿勢ヲ變ズル際著明デアアル、呼吸ハ困難デアアルガ無熱デ脈ハ頻數細糸、皮膚粗剛、四肢下部厥冷、時ニ浮腫ヲ發スル、食慾ハ次第ニ衰ヘ或ハ嘔吐シ或ハ便秘ト下痢ガ交々來リ榮養又衰損スル。

治療法 胸水ト同様手段方法ヲ採用スレバヨロシイ。

其二 運動器病

イ、筋肉及關節痲質斯

原因 筋肉痲質斯ハ原因ハ感冒デアアル、關節痲質斯ハ往時ハ同様感冒ガ原因デアルト誤認サレタガ現今デハ感染性ノ疾患ナル事ガ闡明サレタ。

徵候 筋痲質斯ニ罹リ易キ筋群ハ肩胛部、腰筋、頸筋、肋間筋デ罹患部ノ異ルニヨリテ病狀モ各々特有ノモノデアアルガ、共通的ノモノハ游走性ナルコ

ト、運動ニヨリテ病徴ノ消失スルコト、再發ノ傾向アルコト、慢性ノ經過ヲ取
ルコト、筋ノ腫脹觸診上疼痛ヲ訴ヘルコト等デアアル。

(イ) 肩胛痲質斯 懸垂跛(肢ヲ舉揚スルコト)僅微デ歩幅短縮シ坂路ヲ
昇ルニ運動障礙一層顯著デアアル。

(ロ) 腰筋痲質斯 背ハ凝勁、後肢ノ運動痿弱、臀股筋モ侵サレル時ハ後肢ハ
緊張歩法ヲナシ肢ヲ摺曳、倒レル時ハ起立困難デアアル。

(ハ) 頸筋痲質斯 頸ヲ伸長シ一側ニ傾斜ス。

(ニ) 肋間痲質斯 呼吸疾速淺表性、肋間ヲ壓スルニ疼痛ガアル、熱ナク食欲
異常ナキガ常デアアル。

治療法 限局サレル時ハ局所ノ按摩、刺戟劑ノ塗、布濕器法ヲ施スノデア
ル、處方トシテハ(サリチル酸ナトリウム〇、五—一、〇)ハ良効ヲ奏スル。

(ホ) 關部痲質斯 一若シクハ數關節ノ疼痛、腫脹、増温ガアリ顯著ノ跛行ヲ
呈ス、大概横臥シ後ニ至ルト他ノ關節ニ移轉シ又ハ同一關節ニ再發スル。

治療法 溫器法ヲ施シ(サリチル酸ナトリウム一、〇)處方スル。

ロ、尙痲病

原因 主トシテ幼犬ニ頻發スルモノニシテ適確ナル因ハ未詳デアアル。

夫デ炎症說、新陳代謝說、榮養物不足說ガアルガ先ヅ一般的ニ信ズルニ足ル
モノハ榮養不足說デアアル、又之ハ實際ニ本病ヲ發セシメ得ルノデアアル、即チ
飼料中ニ石灰ニ乏シキ食餌(馬鈴薯、麵粉、穀)或ハ植物性ノ食餌ノミ與ヘル
場合或ハ骨質ヲ混ゼザル動物性ノ食物或ハ土地及飲料水ニ石灰質ノ乏シ
キガ如キ事柄ハ本病ヲ誘發スル因デアアル。

徵候 骨ノ變形ヲ來シ關節ニ近キ骨端ハ腫脹シ四肢ノ如キ長骨不正曲ス
ルタメニ種々ノ肢勢ヲ呈スルノデアアル、或ハ脊柱ハ變形(垂背、鯉背、背椎ノ
側灣)シ其他肋胸骨等ノ變形ヲ來タスノガ常デアアル、甚ダシキ重症ノモノ
ハ全ク起立不能トナル場合モアル、斯ノ様ニ骨ノ變狀ヲ來ス前ニ食欲ノ減
損腹部卷縮、下痢、異嗜等ヲ現スコトハ稀デハナイ。

治療法 沈降炭酸、石灰、牡蠣末一茶匙ヲ食餌ニ混シ與ヘル時ハ奏効スル、肝
油ヲ投與スルモヨロシイ。

其他飼料ノ不良ナルヲ認知シタナラバ變換ス可キハ勿論デアル。

ハ、跛行

原因 外傷(打撲)關節轉振、脱臼及趾部ニ寄生スル壁蝨ニ因リ跛行ヲ來タスコト尠ナクナイ。

治療法 跛行ヲ認知シタナラバ原因ガ何ナルカラ闡明ナラシメル事ノ必要ナノハ勿論デ意外ニ壁蝨ノタメニ跛行スルコト多イカラ注意ヲ要スル、夫デアルカラ療法トシテハ原因ノ芟除デアル、壁蝨ニ原因セナイモノハ醋酸一%液デ冷却シ三―四日ノ後『ブリースニツ』巻法又ハ樟腦精又ハ沃度丁幾ヲ塗布スレバ大體治癒スル。

第五節 皮膚病及外傷

其一 皮膚病

本病ハ消化器病ト共ニ多發ノ疾病デ其大部分ノモノハ濕疹ト寄生蟲ニ原因スルモノト言フモ過言デハナイ。

イ、濕疹

之ハ主トシテ背部ニ發シ次ニ發生スルハ四肢ノ外面、耳殼及外聽道(外耳)デ其他ノ部分ノ罹病スルハ稀有デアル。

發生原因トシテハ蚤、虱、塵埃、污垢、反復ノ皮膚摩擦、從テ手入ノ不良ハ主因ヲナスノデアル、刺戟性ノ藥物ノ使用、不良ノ石鹼デ洗滌等モ又因ヲナス事ハ勿論テ殊ニ優良性ノ皮膚纖弱、消化障礙、老犬、過度ノ肥胖ノモノ等ニ於テ然リデアアル。

其他天然口(鼻孔、肛門、陰部)ノ周圍ニ起リ易イ。

徵候 患部ハ腫起、富脈、焮熱、癢痒ヲ帶ビテ無數小結節ヲ生ジ、毛ハ逆立紛糾シテ之ニ觸レルト疼痛ヲ訴ヘル、最小結節ハ水泡性デ間モナク水泡ハ搔破シ、序デ痂皮ヲ形成スルモノト然ラズシテ膿泡ニ變ジテ被毛ハ互ヒニ粘著シ表皮及ビ毛ヲ脱出スル、搔摩スルト劇シキ化膿性トナリ、又ハ出血ヲ來タス。

治療法 原因ヲ探究シテ之ヲ除クニアルガ却々適確ナ因ヲ捕捉シ難キコ

トガ多イ、殊ニ痒覺ノ因ヲ除クノガ第一義デアアルガ疼痛過度デ如何ニシテモ之ヲ免除シ難キコトガアル。

外觀ヲ損スルガ被毛ヲ剪除スルガヨロシイ、序デ塵埃、污垢ヲ刷毛デ除キ輕度ノモノハ亞鉛化軟膏『ウイールソン』軟膏、硼酸軟膏、鉛糖軟膏、亞鉛華澱粉(五、二五)『タンニン』一分『サリチール』酸二分木炭末二分ノ合劑等ヲ用ヒ、頑固ノ症ニハ『サリチール』酸軟膏(二、一〇〇)『タンニン』軟膏(一、一〇)『ヨードホルム』糊皮末(一、一〇)亞鉛化軟膏(五、一〇)『クレオリン』二分乃至四分硼酸三分ノ合劑又ハ白降汞軟膏ヲ塗布スルガヨイ。

慢性ノモノニハ『タール』ヲ單用シ或ハ酒精軟膏、石鹼ヲ加ヘ『タール』酒精(二、五、〇)又ハ『タール』一分、軟石鹼二分、酒精三分又ハ『タール』ノ代用ニ『クレオリン』ヲ用フレバ先ヅ目的ヲ達シ得ルモノデアアル。

ロ、匍行疹 本病ハ稍々稀デアアル、原因ハ『ヘルペス』菌ニ由ルノデ傳染性ヲ有シテ他犬ニ蔓延スルノデ取扱上注意ヲ要スル。

徵候 頭及脚部ヲ好ンデ侵襲スルカ亦全身ニ蔓延ヲスル、限界劃然タル圓

キ秃毛斑ガ孤立散發シ後ニハ相癒合スルノガ本病ノ特徴デ序デ周圍ニ蔓延シ小斑ガ大トナル、カカル秃毛部ハ汚穢灰色ノ石綿様鱗屑及厚痂ヲ生ジ剝脱スルト下面ハ赤褐色デ凹凸不齊デアアル。

治療法 汚穢灰色ノ鱗屑ノ附著セル場合ハ、綠石鹼ヲ塗布シテ軟化除去シ序デ毛ヲ剪除シタル後ニ硫黃軟膏(一、一〇)『サリチール』酸、酒精(一、一〇、『ウヰルキンソン』軟膏ヲ塗布スルノガ効果ガアル。

其 二 外 傷

外傷ニハ皮下挫傷ト創傷トノ二ツガアル、前者ハ皮下ニ傷害ヲ被ルモノ、例ヘバ挫傷、劇伸、斷裂等ノ種類デ、後者ハ皮膚ヲ破綻スル損傷ヲ云フノデ即チ切創、刺創、打創、挫創、裂創、咬創(最モ頻發ノモノ)銃創等デアアル。

治療法 出血スルモノハ先ヅ止血法ヲ施シテ次ニ創面ヲ清潔ニスルタメ食鹽水(一、一〇〇〇)ニテ洗ヒ尙不潔ナルモノハ過酸化水素水デ再ビ洗滌スル。創ガ比較的新シクテ周圍ノ甚シク缺損セナイデ癒著ノ見込ノアルモノハ縫合ヲスル、創傷ノ淺キモノハ『ヨード』丁幾ヲ塗布スレバ夫デ充分デアアルガ

深キ創ハ『ヨードホルムガーゼ』ヲ挿入シテ創液ノ排泄ヲ便ニスルノデアアル
皮下損傷ハ初期冷却シ三四日ヲ經レバ反對ニ暖メル手段ヲ取ル可キ樟腦
軟膏(一ニ一〇)『アンモニア』樟腦精(等分)沃度丁幾發泡膏等ヲ塗布スル。

第六節 寄生蟲病

寄生蟲ガ寄生々活ヲ營ム宿主ノ體ノ部位ニヨリテ之ヲ二ツニ分ケル、即チ外
寄生蟲ト内寄生蟲デアアル。

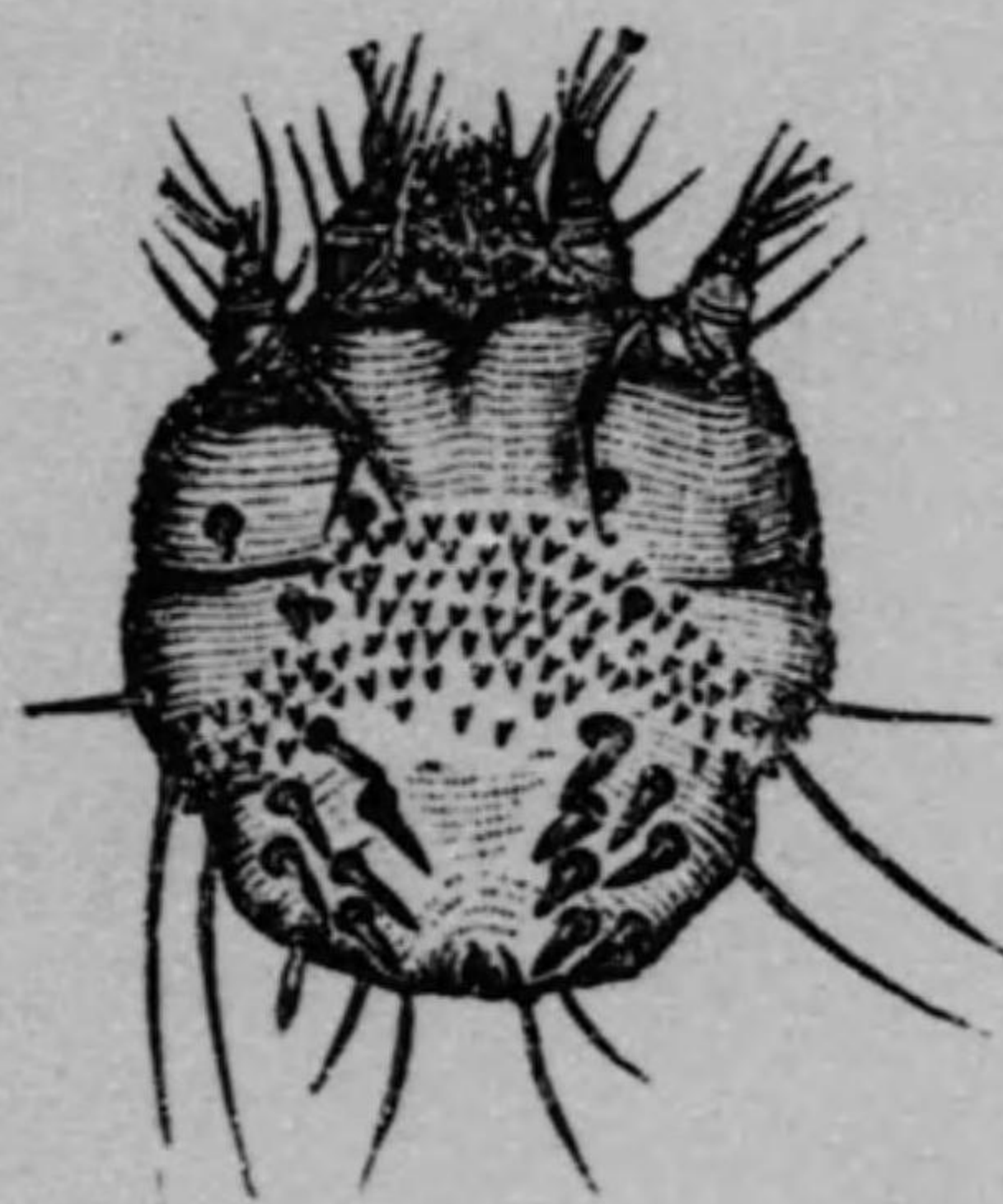
其一 外寄生蟲

イ、疥癬

主トシテ頭部ヲ侵シ其他胸前四肢ノ内面ニ寄生シ患部ハ初メ搔痕ノ如キ
赤斑点ヲ生ジ序デ水泡膿疱帶黃灰白色ノ痂皮被毛脫落、不正形ノ禿斑同時
ニ痒覺ヲ訴ヘ搔爬咬嚙摩擦シ終ニハ濕潤性濕疹ト變ジ放任スル時ハ全身
ニ蔓延スル、遂ニ局部ハ皮膚肥厚ヲ來タシ甚ダシキハ貧血ヲ來タシ瘦削シ
斃死スルモノガアル。

治療法 不斷豫防ニ注意シ患犬ノ使用セシ褥藁ハ燒却シ箱或ハ犬舎ハ嚴
密ナル消毒ノ後ニアラザレバ他ノ畜犬ニ使用セザルコトガ必要デアアル。
輕症ノモノハ(デシン三、〇水一〇〇)ノ割合ノ溶液ニ溶セシメル、若シ重症
ノモノデアレバ三十倍ノ硫化加里ノ浴ヲナサシメタ後乾燥セシメテ『ベ
ル—バルサム』ト酒精ノ等分或ハ『リゾノール』ヲ塗布スルト効果ガアル、
廣汎ニ蔓延セズ局部的ノモノハ單ニ塗布藥デ充分効果ヲ現ハスコトガ出
來ル、即チ疥癬劑(タール一、綠石鹼一、酒精五)ノ合劑、硫黃軟膏(硫黃華一八、
炭酸カリ一〇、豚脂一二〇)、『ペルーバルサム』酒精或ハ油、等分液

犬ノ疥癬蟲
(氏ケルペンテスルユフ)
(倍百) 蟲雄



(倍十八) 蟲雌



本蟲ハ主トシテ犬ニ寄生スル唯一ノ疥癬蟲ニシテ背面銳刺ノ『キチン』
質ハ強カラズ、雄蟲ハ(長サ〇、一九一〇、二三耗幅〇、一四一〇、一七耗)雌蟲
ハ(長サ〇、二九一〇、三八耗幅〇、二三五一〇、二八五耗)ニ達ス。

ロ、毛囊蟲癬

初期頭部殊ニ眼、鼻、口周圍頸部、胸部、後肢ノ内面等ニ寄生シ皮膚著シク充
血、潮紅、脱毛シ、患部ニハ粟粒大ノ結節ヲ發生シ、其結節ハ漸次水泡膿泡ニ變
ジ之ガ破裂スレバ痂皮ヲ生ズル、患部ハ一般ニ赤色若クハ紫赤色ヲ呈シ痒
覺ガアルカラ摩擦シ、化膿ガ潰爛シ次第ニ周圍ニ蔓延スル、重症ノモノハ患
部濕潤シ龜裂ヲ起シ厚キ皺裂ヲ生ジ其内ニ黄色粘稠物ヲ含有スル、蔓延甚
ダシクナルト貧血ヲ來タシ瘦削スル甚ダシキニ至リテハ全身ニ蔓延シ惡
液質ニ陥リテ斃死スル。

大ノ毛囊蟲

(タツコイル氏)

雌蟲(百五十倍)



生殖孔

雄蟲ハ長サ(〇、二二一〇、
二耗五幅〇、〇四五耗)ニシ
テ雌蟲ハ長サ(〇、二五一〇、

三耗)ニ達シ、幅ハ雄蟲ニ等シ、腹部ノ長サハ他ノ體部ヨリ僅ニ大ナリ、吻ハ
長サ幅殆ンド相等シ。

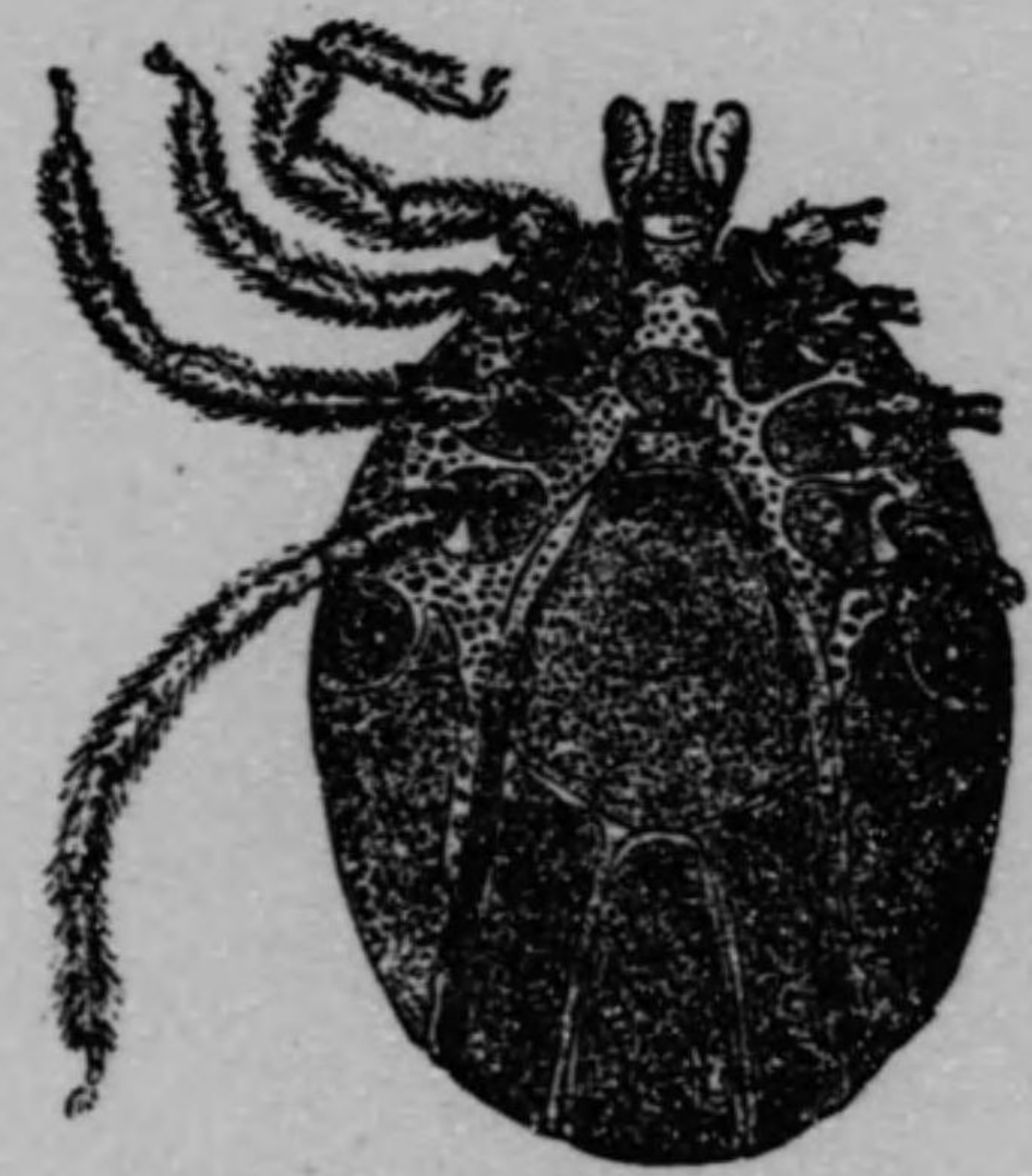
治療法 一局部侵サレタル時ハ患部ノ毛ヲ剪除シ、燒灼シタル後、亞鉛華軟
膏(ウヰルソン氏軟膏)ヲ用フル、患部大ナル時ハ藥液ヲ蟲體ニ達セシメル
タメ膿疱ヲ截開シ、之ヲ壓搾シ、内容物ヲ除去シ、藥浴(クレオリン二乃至五%
又ハ硫華一—三%)ヲ隔日若クハ三日ヲ隔テテ用ヒ、脱脂綿ヲ以テヨク拭
ヒ乾燥セシメ、數回塗擦藥用スレバ効ガアル、其他疥癬ニ用ヒタル療法ハ凡
テ有効デアアル。

ハ、壁 蝨

驅除法 直接、手又ハ鑷子ヲ用ヒテ摘除スレバ簡單ナル方法ナルモ、強ヒテ
鑷子若クハ其他ノ方法ヲ用ヒテ除去スル時ハ倒逆鉤ヲ具ヘル、口器、皮下ニ
殘遺シテ炎症ヲ起シ、化膿スルコトガアルカラ注意ヲ必要トスル、藥物ヲ除
去シヨウトスルナラバ『ベンチン』(五%)『クレオリン』溶液、樟腦油『テレ
ピン』油、『エーテル』性油、木『タール』合劑ヲ海綿又ハ刷毛ヲ以テ塗布シタル

後梳拭スレバ脱落ス、或ハ「クレオリン」「リゾール」等ノ藥液ヲ噴霧器デ撒布シテモ可イ、多數ノ畜犬ガ侵サレタル場合ハ「クレオリン」浴、硫華浴、石炭「タール」六八耗、曹達二〇耗、砒石八瓦、水三、六五立等ハ驅除法トシテ試ミル可キデアル。

犬ノ壁蝨雄雌腹面
(氏シマーヌ)
(倍三十約)



雄虫ハ褐色ニシテ腹面ニ七個ノ甲板(生殖前板及後板、肛門板)ヲ具ヘ(長サ二、五耗幅一、五耗)ニシテ雌虫ハ吸血セザル時ハ扁平卵圓形ニシテ(長サ四耗幅三耗)ナリ。

ニ、蚤

本蟲ハ三回脱皮シテ成蟲トナル、即チ第一回脱皮ニテ六脚ヲ具ヘ、第二回脱皮ニテ八脚ヲ具ヘ、第三回脱皮ニテ雌雄分明トナレリ。

除虫菊末ハ最モ有効デ其他「アルボース」石鹼モ有効デアアル。

ホ、蝨及毛蝨

全身ニ寄生スルモ前者ハ殊ニ咽喉部ノ周圍ヲ侵襲スル。

驅除法

「クレオリン」三—五%溶液ハ無害デ加之調劑並ニ用法ガ容易ナ爲ニ多ク賞用セラレル又「リゾール」若クハ「クレゾール」三%液モ効ガアル、蟲體ヲ殺傷スルト共ニ産卵セルモノヲ殺ス必要ガアルノデ、驅蟲藥ト適宜醋酸ヲ混和シ用フルト兩者ノ目的ヲ達スル事ガ出來ル。

其二 内寄生蟲

1、寄生蟲症ノ一般症候

寄生蟲ガ少數ノ時ハ外部ニ認ム可キ明瞭ナ徵候ハナイガ、多數寄生スル時ハ消化器神経系ノ障碍榮養ノ變調等ガ現レ來ルノガ常デアアル、即チ元氣沈錘シ、垂耳ハ耳根ニ向テ釣上ダラレ、背ヲ猫ノ様ニ圓ク屈シテ歩行シ又屢々後肢ヲ屈曲シテ尻ヲ地ニ引キ摺ルガ如キ動作ヲナシ、庭土、砂石、炭、粗剛ナル

草等ヲ食スル異嗜ヲ生ジ嘔吐スル事ガアル、糞ハ軟ク粘液、血液、泡沫等ヲ混入シ、榮養ハ不良トナリ、被毛粗剛光澤ヲ失シ諸粘膜ガ蒼白トナル。

2. 診 斷

- (1) 一般ノ病候
- (2) 糞便内ノ片節蟲體ノ發見
- (3) 卵子ノ鏡檢
- (4) 血液ノ検査(赤血球ノ減少、白血球增多症)

等デ確定ヲスルガ後ノ二項ハ相當設備ノアル所デナケレバ出來兼ネル事柄デアアル、然シ前二項デ診斷スルモ敢テ大ナル過誤デハナイノデアアル。

驅除法

1. 準備 前日ノ夕食ヨリ投藥迄絶食セシメテ準備ヲナス、此絶食ノ代リニ下劑ヲ投與シテモ同様ノ目的ヲ達成シ得ルノデアアル。
2. 投藥 例ヘバ午前九時豫メ各々犬相當ニ計量シタ驅蟲劑ヲ『カブセル』ニ入レ又ハ『ミルク』ヲ混ジテ内服サス。

3. 午前十一時ヒマシ油(成犬三〇、〇未成犬二〇、〇幼犬七、〇)ヲ内服サスル外必要アレバ下劑投與後三、四時間ニ灌腸ヲ行フガヨイ。

4. 食餌 夕食ハ軟化食餌平常ノ半量ヲ與ヘ翌日ヨリ平常ノ通りナスノデアアル。

5. 驅蟲藥ヲ一回與ヘテ完全デナイ場合ハ二三日ヲ隔テテ再ビ實施スル。

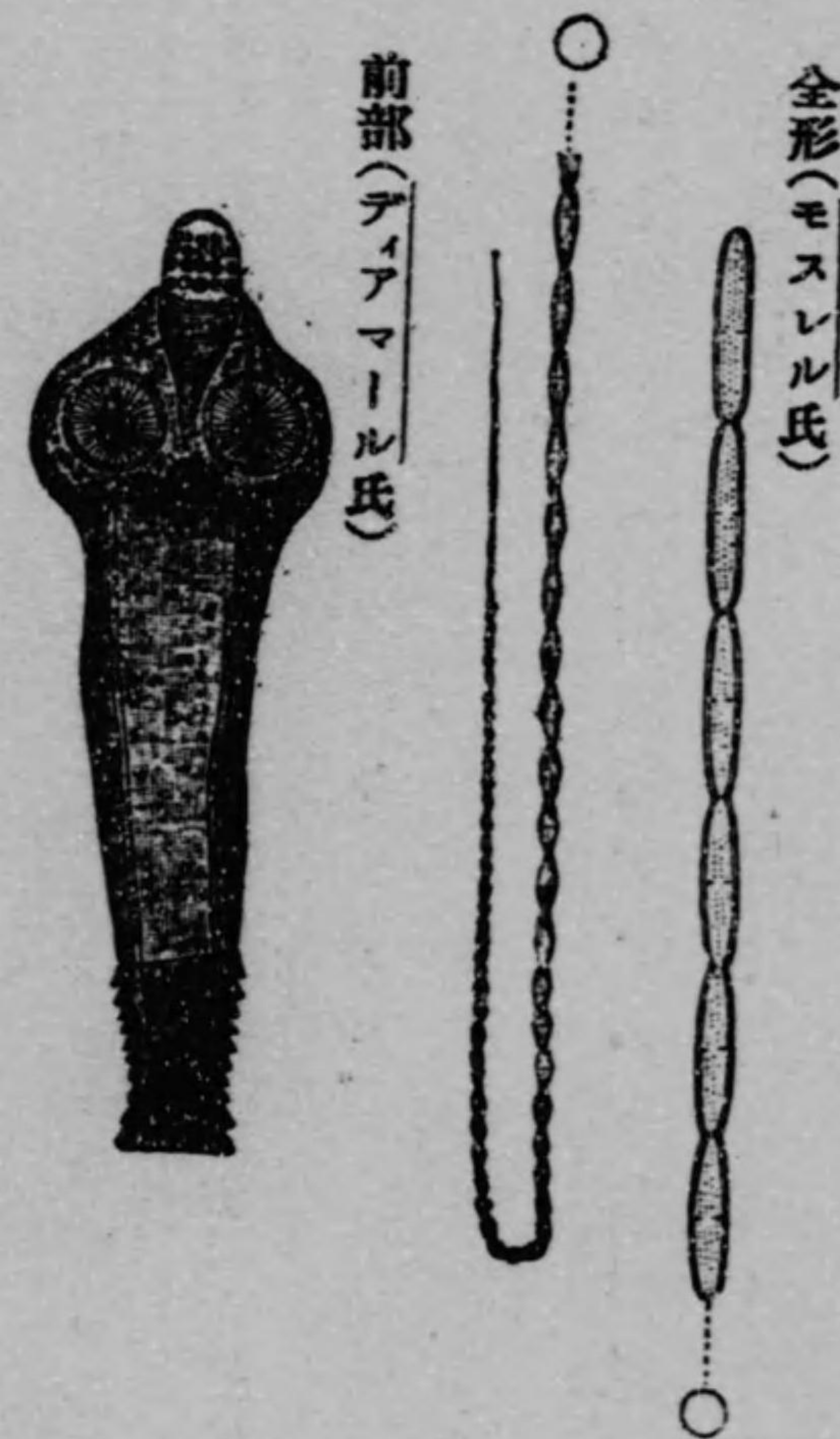
6. 貧血衰弱セルモノニハ滋養消化シ易キ食餌即チ粥、スープ、鶏卵、魚肉類ヲ給シ乳酸鐵(〇、〇二—〇、一)ホーレル水(〇、一—〇、五)肝油(一茶匙—一食匙)等ヲ與ヘテ體力ノ恢復強健ヲ計ル可キデアアル。

7. 犬舎、食器ノ消毒、飲水ノ清潔及中間宿主デアアル外寄生蟲ノ驅除ヲ行ツテ寄生蟲發生ノ根源ヲ絶ツ可キデアアル。

條 蟲

犬ニ寄生ヲスル條蟲ハ大體六種類デアアルガ、其中最モ普通ニ犬ノ小腸ニ寄生スルノハ瓜實條蟲デアアル本蟲ノ中間宿主ハ犬ノ蚤、犬ノ毛蟲及人ノ蚤デアアル關係上犬ニ廣ク傳播セラル、全長一〇〇—四〇〇耗ニ達シ、頭部ハ小形ニシテ

瓜實條蟲 (1)



稍々菱形ヲナス、額ハ棍棒狀ニシテ其前方周圍ニ四列ニ環生スル四十個乃至六十個ノ小鉤アリ、吸盤ハ稍々大ナリ、體ノ前ノ前部ハ糸狀ヲナシ狭小ナルモ後部ハ幅長サ共ニ増加シ、片節

ハ概ネ長形ノ瓜實狀ヲナス、又片節ノ數ハ八十個乃至百二十個内外ニシテ最廣片節ハ後端ヲ去ル少許ノ處ニアリ幅三耗ニ達ス、後端ノ片節最モ長ク八乃至十一耗アリ、生殖孔ハ左右兩側縁ノ中央部ニ位ス。

病候

本蟲ニ侵襲セラレタル犬ハ時々疼痛ヲ訴ヘル(蟲體ノ頭頸部ヲ腸壁ニ挿入シ小「トンネル」ヲ穿テ其部ニ炎症ヲ發生スルニヨル)全身乾燥、被毛粗剛トナ

リ光澤ヲ失ヒ逆立スル、咳嗽ヲ發シ溫暖デ加之惡臭アル呼吸ヲスル、食慾ハ却テ平常ヨリ亢進スル、糞便ニ異常ヲ來タシ或ハ便秘シ或ハ軟泥狀ノモノヲ排泄シ時トシテハ糞中ニ條蟲ノ片節若クハ卵子ヲ混在スル事ガアル、而シテ幼犬ハ常ニ發育ヲ阻止セラレ、羸瘦シ、時トシテハ癩癩様ノ瘡癬ヲ發シ屢々咬癖ヲ生ジ、性質溫順ナルモノデモ猛惡トナル、此ノ様ニ恰モ狂犬病ノ如キ狀態ヲ呈スル。

療法 驅蟲劑『カコラ』(成犬八、〇未成犬五、〇幼犬三、〇仔犬一、〇)之ヲ牛乳又ハ糖密ニ混ジ頓服サス時ハ先ヅ充分ノ効ヲ奏シ得ルノデアアル。

蛔蟲

形態 體ハ白色又ハ稍々紅色ヲ帶ビ頭部兩側ニ翼狀突起亞槍形ヲ呈スル、體長五—一〇耗卵子ハ球形ニシテ直徑〇〇七五—〇〇八〇耗、表面ハ微細ナル刻紋ガアル。

症候 初メ食慾アルモ瘦削シ又ハ消化不良ヲ來タシ、榮養障礙ヲ來タシ、貧血ノ病狀ヲ呈シ、腹部膨大スル、又胃ニ逆行シ來ル時ハ嘔吐ヲシ此時粘液胆汁ト共

子卵ノ蟲細ノ犬

(大 擴)



ニ蛔蟲ヲ吐出スル事ガアル時トシテ腸壁ヲ穿孔シ
腹膜炎ヲ發スルコトガアル或ハ狂犬病ノ如ク神經
症狀ヲ呈シ或ハ下痢ヲ發シ次第ニ羸瘦シテ斃レル。

驅蟲劑

「サントニン」 成犬〇、二 未成犬〇、一 幼犬〇、〇五 仔犬〇、〇二

「チモール」 成犬二、〇 未成犬一、〇 幼犬〇、五 仔犬〇、二

「ヘーボチ」油體量一疋ニ對シ〇、一瓦(幼犬ニハ中毒又ハ餘病ヲ起ス事ガアル注意ヲ要スル)

四鹽化炭素 體量一疋ニ對シ〇、一瓦(中毒等ノ危險ナク有効)デアアル。

施毛蟲

體長約四—七糎前方狹小部ハ細長糸ノ如ク全長ノ四分ノ三ヲ占メル、卵子ハ橙黃色ヲ呈シ橢圓形ニシテ兩端ニ被帽ガアル、長サ〇、〇七二—〇、〇八耗、幅〇、〇三七—〇、〇四耗アリ。

本蟲ハ十二指腸蟲ニ罹リタル犬ノ盲腸ニハ必然發見セラルガ常デアアル、大腸

ニ寄生スルモ宿主ニ危害ヲ及ボス事絶無ト言フモ過言デナイ、然シ多數寄生スル時ハ盲腸ノ「カタール」ヲ誘發スル、日本ノ犬ノ三五%之ニ冒サルト謂フ、
十二指腸蟲

體ハ白色ニシテ細ク前端稍々膨ル、雄九—一二耗雌蟲ハ一五—二〇耗ノ體長

ヲ有スル、卵子ハ橢圓

形、長徑〇、〇七四—〇、

〇八四耗短徑〇、〇四

八—〇、〇五デ内ニ六

—八箇ノ顆粒ガ存在

スル、水中又ハ濕地デ

ハ三—六日デ仔蟲ト

ナル。

犬ノ十二指腸蟲

(大然自)形全 (氏|エイラ)



(倍五十七)部口 (氏|エイラ)



(大擴)部尾蟲雌 (氏|イコソク)



序順育發ノ子卵 (倍十五百) (氏|エイラ)



本蟲ノ宿主ニ入ルノハ患畜ノ糞便ト共ニ排泄サレタ卵子カ或ハ仔蟲ガ飲食物ニ混ジテ犬ノ消化管ニ到ルカ或ハ皮膚感染ニヨリテ血管中ニ侵入シ、遂ニ

腸管ニ達スルノデアル。

本病ニ襲ハレルト榮養不良トナリ貧血ノ病狀ヲ呈スル、即チ初期ニハ沈鬱、倦怠、食慾アルモ衰弱シ、皮膚乾燥シ、眼球陷沒、視力減少、味覺缺乏スル、又鼻鏡乾燥龜裂シ粘稠膿様ノ鼻漏アリ、時トシテハ鼻孔ヨリ間歇性ノ出血ガアル、又四肢ニ浮腫ヲ生ジ、初メ便秘シ後下痢ヲ發スル、時々、血便ヲ排泄スル、末期ニ至リテハ發汗シ屢々惡臭アル黒赤色ヲ帶ブル下痢ヲ發スル、本病ガ數ヶ月乃至一年ニ亘ル時ハ昏睡狀態ニ陥リ又ハ搐搦ヲ發シテ斃レル。

日本ノ犬ハ約七十五%之ニ冒サレルト謂フ。

療法 滋養豐富ナル食物例ヘバ牛乳、肉汁、鶏卵等ヲ與ヘ強壯健胃藥トシテ「ホーレル」水、蕃木龍末、「ゲンチアナ」根末、「ペブシン」ヲ投與シ驅蟲劑トシテ「チモール」(蛔蟲ニ同ジ)「カマラ」(條蟲ニ同ジ)「ヘーポヂ油」(蛔蟲ニ同ジ)四種炭素、體一疋ニ對シ〇・二瓦(最モ有効デアアル)。

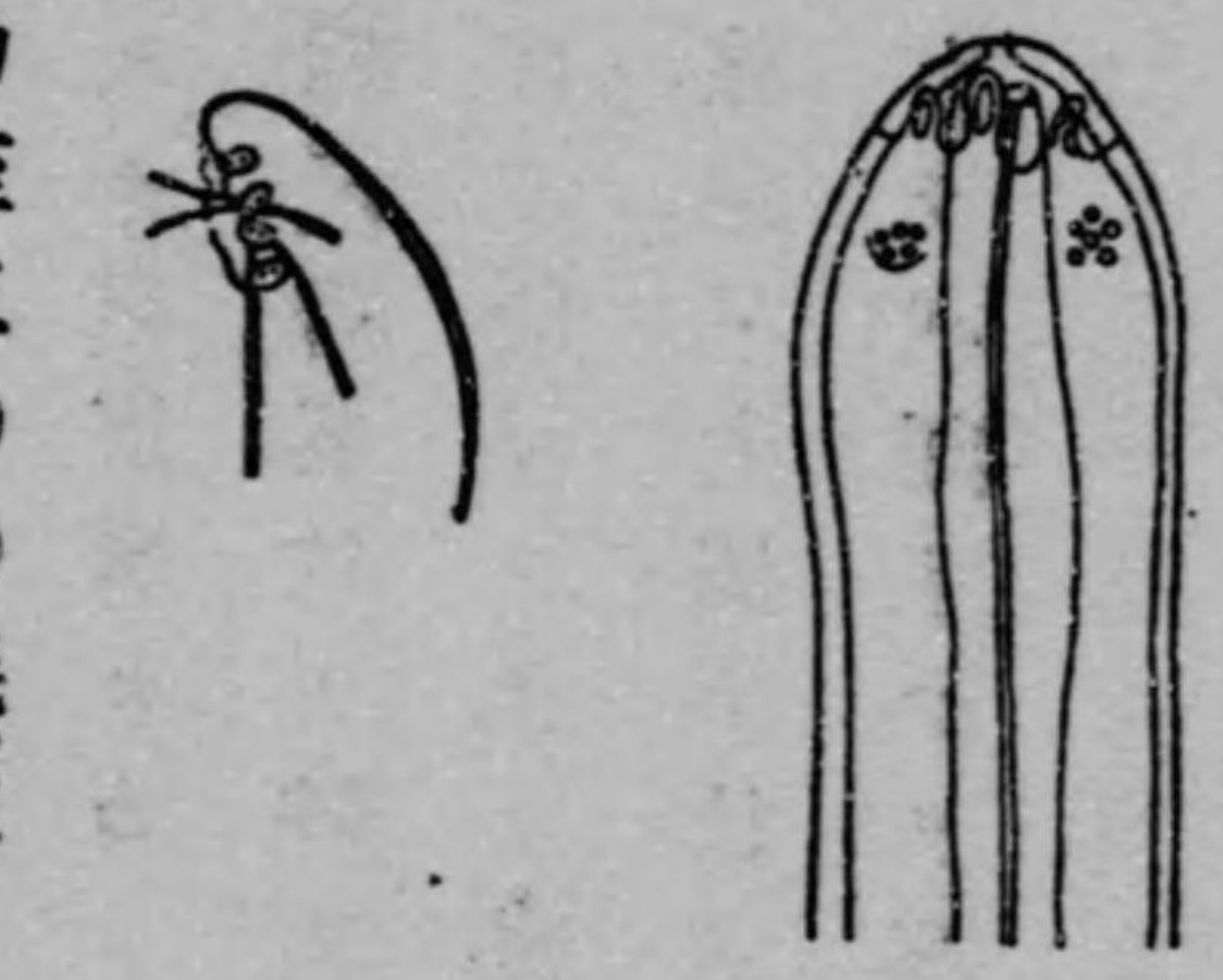
犬絲狀蟲 體ハ細長ニシテ絲ノ如ク前端ハ圓ク後端狹小ニシテ光リハ黃白色乃至乳白

犬ノ二十指腸蟲

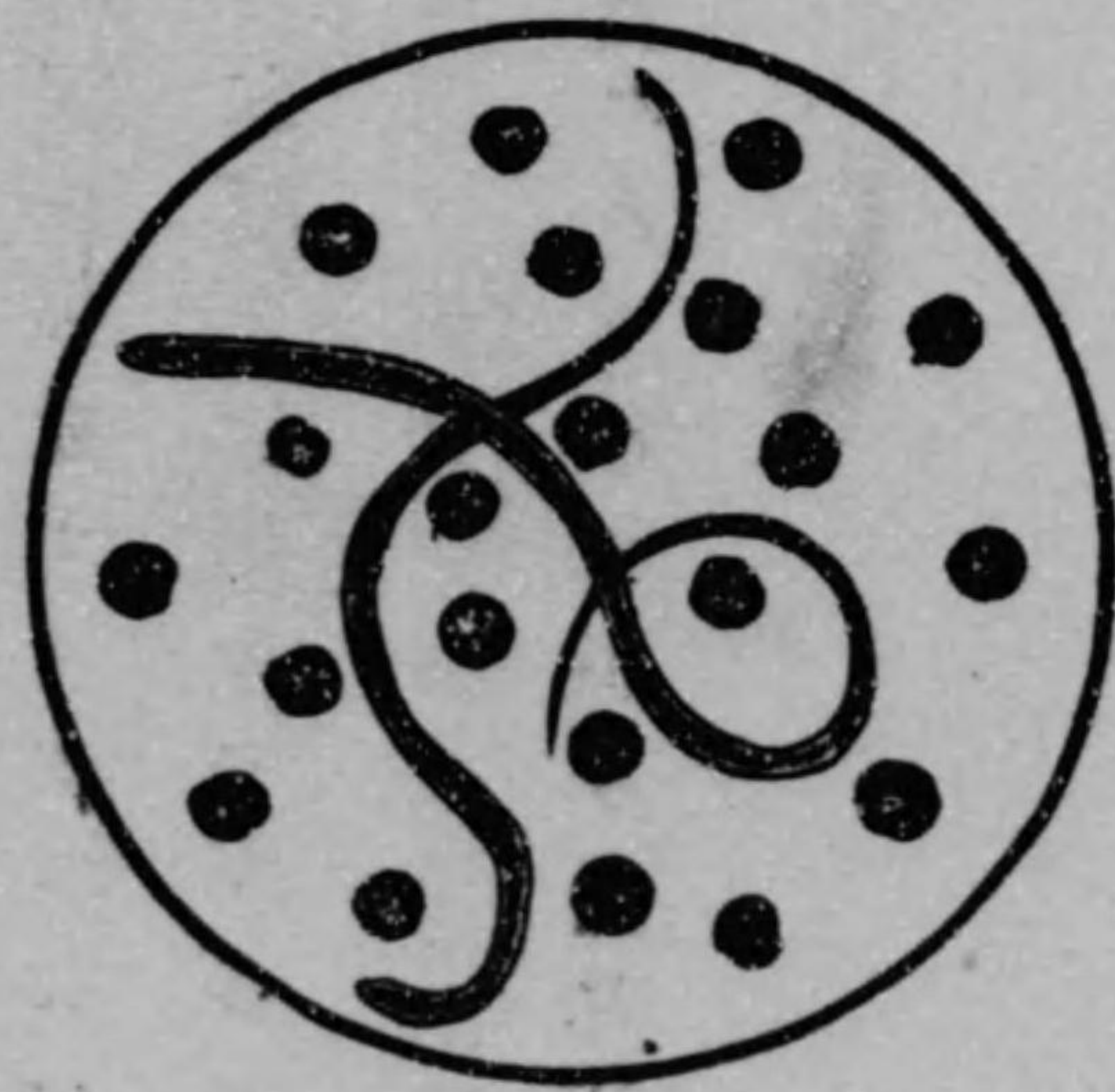
全形(自然大)

頭部 (倍四十)

雄蟲尾部 (倍三十三)



犬ノ血液ニ於ケル犬ノ絲狀蟲 (倍百二) 蟲仔 (氏ルメルグス)



色ニシテ、雄蟲ハ長サ一・二〇乃至一・八〇耗ニシテ尾端ハ螺旋狀ニ捲回ス、雌蟲

ハ長サ二・五〇乃至三・〇〇耗、主トシテ心臟右心室、肝動脈、大靜脈ニ多ク、稀ニ動脈系中ニ發見スルコトガアル。

病狀 多數寄生スル時ハ衰弱シ粘膜ハ蒼白色ヲ呈シ被毛粗剛ニシテ光澤ヲ失ヒ食慾減少スルカ、或ハ然ラザル場合モアル、時々咳嗽ヲ發シ、運動サスト呼吸促進シ時トシテ填倒スルコトアリ、蟲體ノ寄生部位ニヨリテ病狀ハ種々アルガ主トシテ循環器系統ガ侵襲サレルカラ此ノ方面ノ障礙ガ現ハレルノハ勿論デアアル。

診斷 診斷ノ確定ハ血液ノ塗沫標本ヲ作り鏡檢スルノデアアルガ大概前述ノ病狀ヲ呈シタナラバ判定シテ誤リハナイ。

治療法

強壯劑(ホーレル水)ヲ與ヘ且攝生法ニ注意シ滋養豐富ノ食物ヲ投與シ且強心劑『チキタリス』『ストーフアンチス』丁幾ヲ與ヘルノデアアル。

第二編 軍用犬ノ訓練

第一章 通則

犬ハ如何ニ優良ノ種類デモ伶俐ノモノデモ一般動物ノ域ヲ脱シナイ、犬ハ依然トシテ犬デアアルカラ犬ノ訓練ト言ツテモ其實際ハ犬ノ有スル特性ヲ利用シ種々ノ習慣性ヲ附與スルニ過ギナイノデアアル、犬ニハ第六感ガアルトカ理解力ガアルトカ言フ人モアルガ之ニハ必ズシモ同意シ兼ネル所ガアル、然ラバ犬ハ如何ナル特性ヲ持ツテ居ルカト言フト之ハ其犬ノ種類賢愚、用役等ニヨリ異ナルノハ勿論デアアルガ、訓練上ニ利用セラレル特性ヲ舉ゲルト先ヅ第一ニ食餌ヲ與ヘル飼育者ニ馴レテ之ヲ慕フ性質、第二ニ異常ニ發達セル嗅覺ヲ有スルコト、第三ニ同一動作ノ復行ニヨリ通慣性ヲ附與シ得ルコト等デアアル。訓練者ハ之等ノ特性ヲ利用シ工夫ヲ凝ラシテ自己ノ欲スル習慣性ヲ附

與スルノデアアル。

訓練ハ一ツノ強制動作デアアル、強制ハ誰シモ好ムモノデハナイ、犬トテモ同様デアアルカラ、訓練ヲ行フモノハ此間ニ工夫ヲ凝ラシテ此強制ヲ強制タラシメズ喜ンデ訓練ニ従フ様ニスベキデアアル。

此ニ於テカ訓練學トデモ言フカ訓練ノ實行ニ入ル前ニ先ヅ訓練ニ關スル通則的事項ヲ述ベルコトトスル。

第一節 教育學ノ應用

犬ノ訓練ト人ノ教育トハ勿論之ヲ同日ニ論ズベキデハナイガ、事苟モ教育デアリ、殊ニ若干高等ノ域ニ進ンダ動物ノ事デアアルカラ、教育學ヲ犬ノ訓練ニ應用スベキ範圍ハ相當大ナルモノガアル。

被教育者ノ心理状態ヲ考察シテ之ニ適スル教育方法ヲ選定セヨトカ或ハ個性ニ應ズル教育ヲ實施セヨトカ言フコト等ハ直チニ取ツテ犬ノ訓練ニモ應用スベキ要件デアアル、其他環境ノ整理、課目ノ進度、配合比々皆然リデアアル。

訓練ニ従事スル者ハ犬ヲ十分ニ理解シ犬ノ精神心理ヲ考察シ、自ラ犬ノ氣持ニナツテ之ヲ訓練シ且其犬ノ持ツテ居ル先天的ノ徳性美点ヲ助長シ、缺点ハ總ベテ之ヲ矯正破棄セシメ、完全善良ナ習慣ニ導クコトガ必要デアアル。

此点カラ見テ一九一〇年頃カラ盛ンニ行ハレルニ至ツタ獨逸ノ訓練法ハ他國ノ夫ニ比シ確カニ傑出シタモノト言ハネバナラヌ。

之等ノ國デハ獸醫學者、動物心理學者ヲ一團トスル犬訓練取扱法ノ研究機關ヲ設ケ、此一團ハ科學的ニ研究ノ歩ヲ進メ少クモ軍用犬、警察犬ノ訓練ニ關シ一新紀元ヲ劃シタノデアアル。

第二節 訓練者ト犬トノ親和

犬ノ訓練ハ犬ガ飼主ヲ絶對的ニ信賴シテ居ルト言フ所ヲ前提トシテ出發シテ居ル。

犬ト人トノ親和ガ十分デアレバ多少訓練ノ方法ヲ誤ツテモ效果ヲ擧ゲル場合ハ多イガ、親和ガ不十分ダト如何ニ合理的訓練ノ方法ヲ以テシテモ到底目

的ヲ達シ得ルモノデハナイノデアアル。

犬ト人トハ仔犬時代カラノ飼養關係ガアリ、『ヂステンバー』ニ獻身的ニ犬ノ看護ヲ行ツタモノナラバ其親善ハ最善ニ行ハレルノデアアルガ、若シ中途カラ飼養シタ犬ヲ訓練スルナラバ、訓練開始ノ前ニ必ラズ某期間ノ親和時代ヲ置クコトガ必要デアアル。

歩兵學校デヤ、毎年各聯隊カラ派遣セラレル教導隊ノ兵卒ヲ以テ犬ノ飼養主トスル關係上、犬ノ飼主ハ一年毎ニ代ルノデ人ト犬トノ親和ニハ少ナカラズ苦心ヲ重ネル次第デアアルガ、各種演習ヲ一通實施シ得ル様ニナル迄ニハ二ヶ月位ノ日子ヲ必要トシ、此間新ナル兵卒ニハ飼與ヘハ勿論手入運動ハ其子ニ對スル如キ慈愛ヲ以テセシメルノデアアル。

斯クテ人ト犬トノ親和ガ最高度ニ發揚セラレルニ至レバ、訓練間多少ノ強制モ次ニ來ル飼養主ノ賞詞愛撫ニ緩和セラレ、之ヲ意トセザルノミナラズ、終ニハ喜ンデ難局ニ當リ飼養主ノ命令スル所水火且ツ辭セザルノ境地ニ至ルノデアアル。

人ト犬トガ親和スル手段、ソレハ近頃流行ノ愛ノ一字ニ盡キルノデアアル、出來ルナラバ同ジ食卓ヲ與ヘ寢室ヲ共ニシ他人トノ接觸親和ハ勿論犬ノ名ヲ呼バセタリ嘻戲セシメルコトハ絶對ニ避ケネバナラス。

以上ハ配合セラレタル人ト犬トノ親和デアアルガ犬ニモ夫レ夫レ異ツタ性質ガアリ、柔順ナモノ、精悍ナモノ、短氣ナモノ、忍耐強イモノ色々デアアルカラ最初人ト犬トヲ配合スルニハ十分ノ注意ヲ以テ兩者ノ性質ヲ參酌配合シ親和ノ度ヲ向上セシメル必要ガアル。

第三節 訓練者ノ心得

犬ノ訓練ニ從事スルモノハ堅忍ニシテ自制心ガ強クナクレバナナイ、如何ナル場合デモ溫和ナ心持デ犬ニ接シ、例ヘ犬ノ動作ガ其意ニ充タナイ時デモ短氣ヲ起シテ手荒ナコトヲスル様デハ成功スルモノデナイ、必ラズ其原因ヲ探求シテ其動作ヲ復行セシメ、功ヲ急ガズ一步一步確實、堅實ナル地步ヲ固メツツ程度ノ向上ヲ圖ラナクレバナナイ、此事ハ至ツテ容易ノ様デ其實仲々

巧ク行カヌモノデアアル。

知名ノ愛犬家ガ一朝訓練トナルト其性質ヲ一變シテ隨分亂暴ナ取扱ヒヲ爲スコトハヨク見懸ケル所デアアルガ、之等ハ訓練法ノ未熟カラ起ル事デアアルケレドモ、訓練ハ常ニ犬ノ動作ノ不良ハ其罪我レニ在ル場合ノ多キコトヲ悟ル必要ガアル。

神經過敏トデモ言フカ、其日其時ニヨツテ氣分ニ『ムラ』ガアツタリ又些細ナ事ニ腹ヲ立テテ當リ散ラス様ナ人ハ犬ノ訓練者トシテハ無資格者デアアル、訓練者ハ犬好キデ溫和ナ心ノ持チ主デナケレバナラナイ、又訓練ニ際シテハ爲シ得ル限り強制ヲ廢シ、動物心理ヲ基礎トシタル教育學の基礎ノ下ニ其實施ヲ合理的ニシナケレバナラナイ、彼ノ人間相互ノ觀念ノ知識ヲ基礎トシテ之ヲ犬ニ要求強制スル如キハ到底成功スル所以デナイノデアアル。

以上犬ノ訓練者ノ溫和ナルベキコトヲ述ベタケレドモ、訓練者ハ又犬ニ對シ適度ノ嚴格サヲ有スルコトモ必要デアアル。

前述ノ如ク犬ノ過失ト信ジタ点モ實ハ人ノ犯シタ缺点カラ起ル場合ハ可成

多イノデアアルケレドモ、又犬ノ放縱我儘カラ起ル事モ決シテ絶無デハナイ、訓練者ハ之ヲ判斷シテ犬ノ我儘放縱ニ對シテハ一步モ呵責シテハナラナイノデアアル。

犬ニ一寸駄々ヲコネラレルト、モウソレデ參ツテ了ツテ訓練ヲ中止スル様デハ駄目デアアル、殊ニ既ニ十分教育シタ課目ノ實行ガ不十分ナ場合等ニハ斷ジテ之ヲ許シテハナラナイ。

犬ハ一度病氣ニ見舞ハレルト平素ノ元氣ニ似ズ、意氣消沈シテ訓練ニ堪ヘナイ、斯ンナ場合無理ニ訓練スルコトハ百害アリテ一ツノ利益モナイノデアアルカラ訓練者ハ其日ノ訓練開始ニ當リ犬ノ健康状態ニ注意スル必要ガアル、犬ノ健康ニ關スル素人診斷ノ方法ハ生理編ニ記述ノ通デアアル。

犬ノ訓練ハ熱心ニシテ毎日缺カサズ行フ必要ガアル、中絶ハ退步ヲ意味スルカラ時間ハ例ヘ五分デモ十分デモ宜シイ、毎日實施シナケレバナラナイ、朝楊子ヲ使フ時トカタ方散歩ノ前後等利用スベキ時間ハ相當ニアルノデアアル、犬ハ訓練者ノ性格ニ近似スルモノデアアル、訓練者ガ規律正イ人デアアルト犬モ

亦規律正シクナリ、性急ノ人デアルト犬モ亦落チ付キガナクナル、時間ヲ定メテ食事ヲ與ヘテ居レバ、其時間デナケレバ食事ヲシナイ位ノモノデアルカラ訓練者ハ十分注意警戒ヲ必要トスルノデアアル。

第四節 訓練開始ノ時期

犬ノ訓練ハ生後何ケ月位デ開始スルノガ適當カト云フト、其犬將來ノ用途、發育ノ狀態、(身體精神兩方面共)賢愚等ニ應ジ一定スルコトハ困難デアルクレドモ、普通一般ニハ生後六ケ月乃至一ケ年位ノ間ニ於テスルノガ最も適當デアアル。

五ケ月以前ノ仔犬ハ、嬉戲癖ガ盛ンデアルカラ話ニナラヌ場合ガ多ク、ソレカトイウテ一ケ年ヲ過ギルト夫迄ニ自然ニ附タ放縱性ニ妨害セラレテ中々巧ク行カナイモノデアアル、然シ步兵學校デ試験ノ爲四ケ月ヨリ訓練ヲ開始シタ犬デ此訓練ノ爲沈著心ガ出來テ相當ノ効果ヲ收メタ例モアルカラ斷定的ニイフベキデハナイ、若シ其犬ガ非常ニ善ク發育シ嬉戲癖モ盛ンデナイ様ナラ

バ早クカラ訓練ヲ始メルノモ面白イト思フ、然シ此場合訓練課目ノ選定ニ注意シテ過度ノ體力トカ相當ノ能力ヲ要スル課目ハ之ヲ後ニシ簡易ナル課目ヲ選ブコトハ是非必要デアアル。

以上ハ一般ニ後述基本訓練ニ關シテデアアルガ、極メテ簡單ナ「善シ」「不可ナイ」(此等ニ就テハ更ニ説明ス)等ノ言葉ノ會得又ハ座ツテ食事ヲスル事等ハモツトモツト早クカラ教育シテ少シモ支障ナイ所デアアル。

第五節 課目ノ進度

訓練課目ノ進度ヲ如何ニスベキカハ犬ニヨリ皆違フノデアアルカラ一概ニハ言フベキデハナイガ、訓練課目ハ其一ツ一ツヲ完成シテカラ次ノ課目ニ移ルコトガ必要デアアル、五ツモ六ツモ各種ノ課目ヲ不確實ニ少シヅツ實施スルガ何レモ満足ニ出來ルモノハナイト云フ様ナ方法ハ適當デナイ。

然シ跳ブ動作等ハ一朝ニシテ其程度ヲ高メ得ルモノデハナイカラ斯ノ如キ課目ハ他ノ課目ト混合シテ逐次ニ其程度ヲ向上スルヲ利トスルコトハ勿論

デアル。

又最初ニ教ヘル課目ハ其完全ナル會得ノ爲比較的長時日ヲ要スルケレドモ之ヲ確實ニ實施スル程度ニ至ラシメルコトハ訓練ノ要訣デアル例ヘバ『後』ノ動作ヲ教ヘルノニモ始メハ中々覺エナクテ此犬ハ馬鹿ダト中止シ度クナルコトモアルケレドモ此所ヲ我慢シテ熱心ニ繼續シテ居ルト其内メキト程度ガ上ツテ來ルモノデ此様ニナルトモウ占メタモノデ次ノ課目ハ餘程樂ニ教ヘラレルモノデアル。

今迄相當ナ進度デ訓練ノ進歩シテ來タ犬丸突然アル課目デ行キ詰リ何トシテモ覺エテ吳レナイ時ガアル此様ナ場合ニハ十分其原因ヲ探究シテ其原因ノ除去ヲ圖ルカ一時其課目ヲ中止シテ他ノ課目ニ移ル必要ガアル。

歩兵學校ノ經驗ニ依ルト斯ノ如キ事柄ハ多ク體格上ニ原因スル様デ胸部ノ扁平ナ犬ハ『臥セ』ニ於テ頓挫シ後脚ノ發達十分デナイ犬ハ連續シテ跳プ事ヲ忌避スル類デアル。

又一寸ノ注意ヲ怠ツタ爲跳ンダ際蹴球ニ硝子ノ破片デモ立テタト言フ様ナ

コトガアルト其次ニハ跳ブコトヲ嫌ガルト言フ様ナコトモアルノデアルガ此時ニハ又最初ニ還ツテ低イ障礙カラ行リ直ス必要ガアルノデアル。

第六節 訓練ノ繼續時間ト場所

訓練ノ繼續時間ハ其開始當時ニ於テハ朝夕ノ二回一日五分乃至十分位實施スルノガ適當デアル。

訓練ノ場所ハ最初ハ犬ノ氣ヲ散ラサナイ爲ニ空室内若クハ之ニ準ズル場所ヲ選定スルノガヨイ此空室ハ後述ノ『後』ノ訓練等ニハ非常ニ好都合デ此点カラ言ウテモ相當廣イ訓練室ガ有レバ誠ニ結構デアル。

ソレカラ訓練ノ場所ヘハ犬ノ食慾ヲ唆ル臭ノ襲ヒ來ラザルコトガ必要デア
ルカラ庖厨ノ近所ハ適當シナイノデアル又牡犬ノ訓練ハ牝犬殊ニ發情犬ニ
緣ノ無イ場所ニ於テスルコトガ必要デアル訓練繼續時間ハ訓練程度ノ進ム
ニ從ツテ逐次増加シテ最後ニハ四時間乃至六時間位迄ニ延長スルコトガ出
來ル。

此間場所ハ室内カラ室外、室外デモ逐次野外、市街地等ト順序ヲ逐ウテ進ンデ行クノデアアル。

夏日炎天下ニ於テ訓練ヲ行フ時ニハ好ンデ樹下涼風ヲ追ウテ實施シ熱シタ砂地ノ上等デ行フコトハ好マシクナイノデアアル。

第七節 課目ノ配合

課目配合即チ訓練課目ヲ如何ニ組ミ合セ實施スルカハ一寸困難ノ問題ニ屬スルガ、何レノ場合デモ同一動作ヲ過度ニ長時間連續實施スルノハ適當デナイ、倦怠ヲ起サナイ前ニ適當ニ課目ヲ變更シ又犬ノ肉體精神等ノ疲勞程度ニ鑑ミ適宜混合變化サセル必要ガアル。

例ヘバ極度ノ筋肉運動ヲ要求スル障礙ノ連續飛越トカ長距離ノ疾走後ニハ極メテ緩徐ナ運動ヲ配合スルトカノ努力ヲ必要トスル、嗅覺ノ練習、困難ナ伏臥練習ノ後ニハ犬ノ好ンデ居ル課目ヲ命ズルノ類デアアル。

第八節 賞 罰

賞罰ノ適否ハ自覺心ナキ動物ノ訓練ニ於テ其成否ヲ握ル鍵デアアル。

訓練者ノ意ニ合シタ動作ニ對シテハ機ヲ失セズ之ヲ賞スルノ手段ヲ採リ、然ラザル場合ニ於テハ之ニ嚴罰ヲ加ヘテ不當ノ動作タルヲ悟ラシメナケレバナラナイ。

斯ク言フト如何ニモ何か特別ノ方法ガアル様デアアルケレドモ、其實際ハ單ニ『善シ』『不可ナイ』ノ二語ヲ適用スルニ過ギナイノデアアル。

前ニモ言ツタ如ク犬ノ訓練ハ人ト犬トノ親和ヲ第一要件トシ犬ヲシテ信頼スル飼養主、信頼スル訓練者ノ意ヲ迎ヘシメツツ實施スルノデアアルカラ、賞罰モ之ニ關聯シテ信頼スル訓練者ノ一言ノ『善シ』一言ノ『不可ナイ』ニ千金ノ重ミアラシメルノデアアル。

鞭打ハ犬殊ニ優良種ニナレバナル程駄目デアアル一度ノ鞭打ハ一年ノ親和ヲ破ルト言ウテモ宜シイ程惡イ結果ヲ殘スモノデアアル。

犬訓練者ノ中ニハ此說ニ反對シ鞭ノ效果ヲ説ク人モ少クナイ、其犬ノ性質ニヨツテハ稀ニ成功スル事モアルケレドモ多ク失敗ニ終ラナケレバ幸デアル、擲ツテモ蹴ツテモ離レナイ程度ニ親和シナケレバ駄目ダト言フ論者ガアルナラバソレニハ賛成デアル、賛成デハアルガ夫レハ親和ノ程度ニ對スル賛成デアツテ決シテ擲ツテヨイ蹴ツテヨイト言フノデハナイ。

賞ノ手段トシテハ『善シ』ノ外愛撫ト嗜好品ヲ與ヘルコトガアル、愛撫ハ犬ガ手許ニ在ル時『善シ』ト併用シテ實施スベキ手段デ普通鼻ト額トノ間ヲ毛並ミニ輕ク撫デルノデアアル。

嗜好品ヲ與ヘルコトハ仔犬時代人ト犬トノ親和ヲ圖ル爲ニハ良好ノ手段デアアルガ、既ニ訓練開始時期ニ達シタ犬ニ對スル賞ノ印トシテハドウカト思ハレル、ソレヨリハ『善シ』『不可ナイ』ト愛撫トノミニヨル法ガ結果ガ善イ様デアアル。

訓練用語ニ就テハ後ニ更ニ説明スル事ニスルガ『善シ』ハ高調デ賞撫的ナ音調ニヨリ『ヨ』ト『シ』トノ間ニ更ニ『ウ』ヲ響カセル様ニスルヲ適當トスル。

又『不可ナイ』ハ『ナイ』ニカヲ入レテ叱責的ニ短カク發音スルノガヨイ、訓練者ガ若シ此二語ヲ以テ立派ニ犬ノ指導ガ出來ル様ニナレバモウ卒業デアアル。

第九節 聲符、視符

犬ノ五感ヲ其發達順ニ言フト嗅覺、聽覺、視覺ト言フ順序デアアル。

訓練ハ此聽覺視覺ニヨツテ、訓練者ノ發スル一定ノ聲又ハ一定ノ記號ニヨリ常ニ同一ノ動作ヲ行フ習慣性ヲ附與スルコトデアアル、從ツテ此聲(聲符トイフ)此記號(視符トイフ)ニ關シテハ相當ノ研究注意ヲ必要トスル。

(イ) 聲符ニ就テ

聲符乃チ人ト犬トノ約束ニ用フル言葉ハ其一ツ一ツガ獨立性ヲ持チ、犬ノ記憶シ易ク又聞キ分ケ易イモノタルコトヲ要件トスル、此点カラ言ウテ語數ガ少ク而モ母音ノ多イ言葉ガ適當ノ様デアアル、音ノ抑揚カラ言フト高ク長イ聲音ハ犬ヲ激勵スルニ適シ低ク短カイ音ハ訓練者ノ不滿又ハ叱責ヲ思ハセ低ク長イ音ハ沈靜ニ効果ガアル。

犬ハ人間相互ノ話ヲ解スルモノデハナイ、唯一定ノ言葉ト共ニ常ニ同一動作ヲ強制セラレルコトニヨリ、習慣性ヲ附與セラレルノデアルカラ、何レノ動作ニ對シ如何ナル言葉ヲ使用スベキカハ訓練者ノ自由デアアル、伏スコトニ對シ跳ベト言ハウト跳ブコトヲ伏セト言ハウト犬ハ一向平氣デアアル、要ハ常ニ一定ノ音聲ニ對シ一定ノ動作ヲ要求實施セシメルニ在ル、此理由カラ日本語デ餘リ長イ言葉ハ簡單ナ符號式ニ直スノヲ有利トシ、便利トスル場合ガアル、横文字ノ好キナ人ハ一寸ハイカラニ外語デ片付ケテモ惡クハアルマイ、例ヘバ『持ツテ來イ』ノ代リニ『持テ』トカ『アポー』トカ簡單ナ音ニ代ヘル如キデアアル。

(ロ) 視符ニ就テ

次ハ視符ノ話デアアルガ、視符ハ手合圖、身振り動作ニ依ル意思ノ傳達デ訓練ノ終局ハ此所迄到達シテ簡單ナル視符ニヨリ直チニ動作スル如ク完成セナケレバナラナイ、獵犬デアルト手ヲ振ルトカ、寸ノ身振リトカ、『ホイント』シタリ『ゴー』『ダウン』ト云フ様ナ藝當ガ出來、軍用犬デアアルナラバ

歩哨斥候等ニ配屬セラレテ搜索警戒ノコトニ當リ、又ハ銃砲聲ノ騷然タル中ニ於テ指揮官ノ命令通り活動ガ出來ナケレバナラナイノデアアル。此視符ハ其動作ヲ緩徐ニ且ツ大キク行フ必要ガアル、手振リ身振リガ小サイト犬ノ了解ガ困難デ結果ガ不良デアアル、又視符ハ體ノ正面ヨリモ側面デ行フ如ク方法ヲ選ブヲ可トスル、之ハ犬ノ目ハ遠見ガ利カナイカラ四、五十米モ離レテ犬ニ記號スル際ノ必要カラデアアル。最後ニ此聲符ト視符トヲ如何ニ按排シテ使用スルカト言フト、最初ノ時期ニハ聲符ノミニヨルカ或ハ聲符、視符ノ兩者ヲ併用シ訓練ガ進ムニ從ツテ聲符ノミニ又視符ノミニテ訓練ヲ實施スルノデアアル。

第十節 訓練用具ト其用法

訓練用麻綱 之ハ『後』等ヲ教ヘル際革紐ニ代ヘテ犬ノ前進、後退ヲ容易ニスル爲ニ使用スルモノデ長サ二米五〇浬内外太サハ適宜ノ強サヲ有スレバ宜シイ。

鞭 之ハ普通ノ場合ニ於テ使用セザルヲ可トスルコトハ前ニ述ベタ通デア
ルガ、熟練シタ訓練者ノ爲又ハ鞭ヲ使用スルヲ可トスル犬等ニ對シテノミ
使用スルモノデ適宜ノ竹、ステツキ、何デモ宜シイ。

鞭ヲ使用スル際ニハ之ヲ右手ニ持チ、若シ打ツナラバ懲戒事項ノ起ツタ瞬
間間髪ヲ容レヌ様ニ其時機ヲ擇バナケレバナラス、若シ打ツ時機ヲ失シタ
ナラバ如何ニ輕クテモ恐怖心ヲ起サセル外何ノ役ニモ立タナイノデア
打ツベキ部位ハ尻或ハ大腿ノ部分ヲ可トシ、他ハ先ヅ絶對ニ打ツテハイケ
ナイ、又連續打ツコトハ嚴禁デア
ル、一度デ行フベキデア
ル。

有刺頸輪 之ハ伸縮自在ナ頸輪ノ内面ニ銳利ナ鋼鐵製ノ釘ノ尖端ヲ出シタ
モノデ訓練ノ際普通ノ頸輪ニ代ヘ犬ガ自由ナ動作ヲスルトキハ忽チ此頸
輪内面ノ刺ガ立ツト云フ仕組ミデ主トシテ「後へ」「伏セ」「座レ」等ノ動作ヲ
教ヘル際ニ使用スル、此頸輪ハ其使用法ガ適當デナイト犬ニ恐怖心ヲ起サ
セ逃癖ヲ起ス様ニナルカラ最初使用スル際ハ其時機ト締リ加減ニ注意シ
決シテ粗暴デアツテハナラナイ、又毛ノ短カイ種類ニ對シテハ釘ノ尖銳度

ヲ加減スル必要モアルト思フ。

人ニヨツテハ此刺ヲ見テ戰慄シ可愛ソウダト云フ感念カラ此器具ヲ忌避
セラレル人モアルケレドモ、使用ニ慣レルト訓練ノ時日ヲ短縮シ確實性ヲ
附與スルニ効ガ少クナイノデア
ル、然シ犬ガ之ヲ忌避シテ狂奔スル様ナコ
トガアツタナラバ決シテ使用シテハ不可ナイノデア
ル。

投石器及投鎖 歩兵學校デハ其必要ヲ感ジナイカラ實驗シタコトハナイケ
レドモ、外國デハ稍々離レタル犬ノ訓練ニ於テ其懲戒ニ使用シテ居ル様デ
アル。

第十一節 訓練課目

犬ニ如何ナル課目ヲ教ヘルベキカハ研究スベキ問題デアツテ、其犬ノ用途如
何ニ依リ異ナルベキモノデア
ルガ、此所デハ八釜シイ議論ヲ避ケテ歩兵學校
デ實施シテ居ル基本訓練ト應用訓練トノ實施法ヲ照會スルコトトスル、基本
訓練トハ將來如何ナル用途ニ充ツル軍用犬ニ對シテモ基礎的ニ實施セシメ

ル課目ノ總稱デアツテ應用訓練ハ此基礎的訓練ヲ終ツタ後其用途ニ應ジテ教ヘル課目デアアル。

一匹ノ犬ニ對シ如何ナル程度ニ訓練シ得ルカト云フト之ハ伶俐ノ犬ニ對シテハ萬能ナリト云フコトガ出來ルノデアアル、歩兵學校ノ經驗ニヨツテモ一頭ノ犬ニ對シ能ク傳令、負傷者ノ搜索、斥候歩哨ノ補助、彈藥ノ搬送等ノ諸動作ヲ教育シ得ルノハ確實ナル事實デアアル、故ニ番犬等デモ隨分廣範圍ナ訓練ガ可能ナモノト思フノデアアル、時間ヲ定メテ一定地域ノ巡視、火災報知、侵入者ノ驅逐、急襲、警察官ニ通報等ハ恐ラク譯ナク實施シ得ルデアラウ。

第二章 基本訓練

第一節 脚側自由常歩

聲符 『後へ』

此レハ野原デモ銀座街頭ノ様ナ雜踏ノ巷デモ『後へ』ノ命令デ訓練者ノ脚下

(6) 圖 插
步 常 側 脚 練 訓 本 基



ニ丁度屠所ノ羊ノ様ニ至ツテ從順ニ隨行スルコトヲ訓練スルノデアツテ訓練者ノ調教ノ如何ニ拘ラズ又方向ヲ換ヘテモ常ニ其左後方ニ成ルベク近ク位置セシメル事ガ必要デアアル、而シテ最後ニハ牽綱無シテ實施シ得ル様ニシナケレバナラナイ。

其方法ハ訓練者ガ普通ノ速サデ歩ミ犬ガ前進シ過ギル時ニハ左手ヲ

以テ漸次ニ強ク牽綱ヲ以テ押ヘテ正シイ位置ニ戻スノデアアル、最初ノ間ハ犬ガ外ノ方ニ氣ヲトラレテ居タリ又ハ恐怖ニ依テ後レル事ガアルノデ「後へ」
「後へ」ト愛撫的ニ又犬ニ注意ヲ喚起スル様ニ呼ビナガラ安心ヲ與ヘナガラ
歩ミ、次ニ歩ヲ速メテ走り左手デ牽綱ヲ傳ツテ犬ノ頭ニ觸レル程度ニ延シ犬
ガ正位ニ隨行スレバ頭ヲ撫デナガラ「善シ」「善シ」ト賞詞ヲ與ヘルノデアアル。
犬ガ小サイ時ニハ歩ヲ速メタ上ニ上體ヲ曲ゲテ頭ニ愛撫ヲ與ヘルコトハ熟
練シナイトデキナイノデ賞詞丈デ十分デアアル。

犬ガ正位ニ來タ時ニハ訓練者ハ歩度ヲ普通ニシ（少シ早メテ走ツテ井ルカ
ラ）犬ガ若シ反抗的ニ進マナイ時ニハ如何スルカト云フト一氣ニ犬ヲ引ク、
之ト同時ニ右手ヲ後へ廻シ後肢ニ輕キ鞭打ヲ加ヘ若シ前進シ過ギル時ハ前
肢ニ輕キ鞭打ヲ與ヘルコトモアル、方向變換ヲ行フ時ニハ左ノ方向へ行クノ
ガ容易ナノデ訓練ノ初期ハ此方ヲ先ニ教ヘルノデアアル、此左方向變換ハ又前
進シ過ギタ時後退サセル一ツノ補助手段トモナルノデアアル、ソレハ犬ガ前進
シ過ギタル時左ニ方向變換ヲ行ツテ、左膝デ犬ノ體ヲ突キ或ハ輕ク趾ヲ踏ム

ノデアアル、ソウスルト犬ノ過度ノ前進ヲ妨害スルコトニナルカラ犬ヲ後退サ
セ得ルノデアアル、右ニ方向變換ヲスル時ニハ訓練者ノ足ニ犬ノ體ガ纏ヒ付ク
様ニナルノデ右手デ牽綱ヲ持ツテ右上方ニ高ク上ゲ左手デ犬ノ頸輪ヲ握リ
犬ノ體ヲ廻スノデアアル。

然シ犬ノ體ガ小サケレバ此必要ハナイノデアアルガ左手デ牽綱ヲ外ニ張り出
ス様ニシテ犬ノ脚ニ纏ヒ付クノヲ防グノデアアル。

此方法ヲ數回重ネルト犬ハ次第ニ訓練者ノ脚ニ纏ヒツクヨリモ離レテ方向
ヲ換ヘル方ガ容易デアアルコトニ氣ガ付キ上手ニ廻ル様ニナル、又方向變換ノ
角度等モ自然ニ會得シテ補助ヲ與ヘル必要ガナクナル。

以上説明シタ訓練ガ終ツテカラ最後ニ「廻レ右」ヲ行ツテ正シイ位置ニ犬ノ
來ル様ニ訓練スルノデアアル。

以上ノ諸動作ヲ行フ前ニハ必ズ「後へ」ノ語ヲ下サナケレバナラナイ、而シテ
假令僅カノ間デモ正シイ位置ニ來タ場合ニハ「善シ」ト云ツテ愛撫スルコト
ヲ忘レテハナラナイ。

此方法デ次第ニ訓練者ノ左脚ノ側ニ近ク歩ム事ニ馴レサセ又左側ニ愛手ノ有ルコトヲ知ラシメルノデアアル。

何時牽綱ノ使用ヲ止メルカト云フト『犬ノ知ラナイ間ニ』デアアル、然シ牽綱ヲ頸輪カラ離スト犬ガ偶然ニ進ミ過ギ或ハ後レ過ギル事ニヨツテ自由ニナツタコトヲ知ル僅ノ誤差ハ、訓練者ノ方デ歩度ヲ加減シ少シク犬ガ後レタ場合ニハ牽綱ヲ用ヒタ場合ト同様ニ少シク歩ヲ早メテ走り、聲ヲカケナガラ自分ノ左側ニ招キ正シイ位置ニ來タ場合ニ『善シ後へ』ト呼ブコトハ前ニ述ベタ通りデアアル、犬ガ賞詞ニ喜ンデ前進シ過ギルコトガアルガ、此場合ニハ決シテ犬ノ後ヲ追テハイケナイ、此時ニハ別ノ方向ニ訓練者ガ走り犬ガ後レタト同ジ關係ニ置キ、再ビ聲ヲ掛ケテ呼ビ走りナガラ左手ヲ以テ犬ヲ愛撫シ『後へ』ト高ク快ク呼ブノデアアル。

牽綱ヲ用フル時ハ訓練ガ容易ニ行ナヘルノデ訓練ノ初期ニハ必ズ之ヲ用フルガ、或程度迄教育ガ進ンダ後ハ犬ノ知ラヌ間ニ之ヲ除キ、牽綱ヲ用ヒナイ様ニナツテカラモ時々用ヒタリ、用ヒナカツタリ、極メテ不明瞭ニシテ牽綱ノ有無ト云フ觀念ヲ意識サセナイ様ニスルノデアアル、又訓練中人ノ右側ニ出ルコトガアル、此時ニハ右手デ頸輪ヲ以テ速カニ左側ニ戻スカ又ハ鞭デ犬ノ右肩ヲ打ツ時ニハ其誤テキルコトヲ悟リ矯正ガデキル、此方法ハデキル丈速ニシ出來得タナラバ誤ツタ方向ニ進マウトシタ岐路ニ於テ正道ニ入ル『ヒント』ヲ與ヘルコトガ大切デアアル。

上手ニ犬ガ覺エタナラバ常ニ耳ニ快ク響ク音調デ『善シ後へ』ヲ連呼スルノデアアル。

若シ以上ノ經過ヲ通テモ尙十分ニ効果ノ揚ラナイ時ニハ、何回デモ牽綱ヲ用ヒテ最初ノ第一階段カラ半歩遅々確實ナ第一歩ヲ踐ミシメナガラ進ムノデアアル。

前述ノ説明ノ中ニ犬ノ進ミ過ギタ場合犬ヲ追ツテハイケナイト云フコトヲ言ウタガ此犬ヲ追フト云フ事ハ訓練中屢々起ル問題デアアル、如何ナル場合デモ犬ノ後カラ訓練者ガ追ヒ廻ルト云フ事ハ既ニ訓練者ガ犬ニ一籌ヲ輪シテキル俗語デ謂ヘバ『ナメ』ラレテ居ルカラ起ル問題デアアル、飽迄自主的ニ犬ヲ

自己ニ引キ付ケルヤウニセナケレバナラヌ、犬ガドウシテモ手元ヲ離レテ遊ブ時ハ能ク原因ヲ探究シテ、罰スベキモノハ嚴ニ罰シ訓練ノ第一歩トシテ犬ヲ早ク手ニ入レ決シテ無意味ニ『ブラブラ』サセヌ様ニスル事ガ肝要デアル。

第二節 停座

聲符 『座レ』

視符 (訓練者自ラ停座シ、或ハ右手ヲ舉グ) 此姿勢ハ他ノ基本訓練ヲ行フ際ニ先ヅ座ラセテカラ行フ場合ガ多イノト訓練ガ割合容易ニ行ハレルノデ如何ナル用途ニ當テラレル犬ニ對シテモ先ヅ仕込ム方ガ善イ様ニ思フ。

其方法ハ訓練者ガ『座レ』ト呼ンデ右手ヲ以テ頸輪ヲ把握シテ犬ノ頭部ヲ上方ニ引上ゲル様ニシ左手ヲ尻ノ部分ニ當テテ後軀ヲ徐々ニ押シ下ゲテ停座ノ姿勢ヲトラセルノデアアル、犬ガ起立シ様トシタナラバ直チニ尻部ヲ下方ニ壓シテ其際同時ニ『座レ』ト繰リ返シ犬ガ温順ニ座ツタナラ訓練者モ兩手ヲ緩メ牽綱ヲ持テ靜カニ上體ヲ起シテ成ベク犬ヲ長イ間此状態ヲ保ツ様ニ教

(7) 圖 挿

座 停 側 脚 練 訓 本 基



育スルノデアアル、犬ノ牽綱ハ革製デ一端ニ環ヲ附シ頸輪ニ附ケルニ便ニシ、他端ハ革ヲ折リ曲ゲテ手首ノ入ル大キサノ輪ヲ作ツテオクノガ適當ト思フ、牽

(8) 圖 挿

座停ト方待イシ正ノ執牽 練訓本基



綱ノ正シイ持方ハ、右手ノ手首ヲ綱端ノ輪ニ通シ、綱ハ適度ノ長サニシ餘長ハ輪ヲ作テ右手ニテ持テ、綱ハ體ノ前ヲ通シ左手ハ綱ヲ確實ニ握リ、犬ノ進ミ過

(9) 圖 挿

レ座座停ニ前 練訓本基



ギ後レ過ギ等ニ對シ強ク引キ得ル準備ヲシテ居ルノデアアル、正シク停座ヲシタ場合犬ガ頭部ヲ下方ニ下ゲ様トシタ時ニハ右手ノ牽綱ヲ以テ支へ「善シ」ト呼ベバ決シテ不安ノ念ヲ起サズ正シイ頭部ノ位置ヲ保持スルノデアアル。若シ犬ガ起キ上ラウトシタ場合ニハ前ニ説明シタ動作ヲ繰リ返ヘシテ段々歩行中ニ於テモ

停座スルコトヲ訓練スルノデアル。

其方法ハ犬ニ『後へ』ヲ命令シテ歩行ヲ始メタナラバ『座レ』ヲ命ジテ前記ノ動作ヲ訓練スルノデアアルガ終ニハ訓練者ガ立停タ丈デ犬ハ自分デ座ル様ニナル。

唯毎回犬ガ靜ニ正シク停座シタ時ニハ讚辭ト愛撫トヲ與ヘルコトヲ忘レテハナラナイ。

尙後ニハ右手ノ鞭ヲ後ロニ廻シ其尖端ヲ以テ輕ク犬ノ尻ヲ打チ或ハ牽綱ヲ左手デ高ク上ル事ニヨツテ停座ヲ行ハセル事ガデキル訓練ノ終リハ聲符又ハ視符丈デ停座スル様ニナルノデアアル、停座中行儀惡ク肢デ頭部ヲ搔ク様ナコトガアツテモ鞭ヲ以テ輕打ヲ與ヘルコトハ不可ナイ。

又訓練ノ最初ノ時期ニハ停座セズニ次ニ説明スル『伏セ』ヲ行フ法ガアルガ此時ニハ前肢ノ掌趾ヲ輕ク踏ミ『座レ』ト云ヒ乍牽綱ヲ高ク引クノデアアル牽綱ヲ長ク延バスコトハ初心者トシテハ最初カラハ避ケネバナラナイ、最初ノ時期ハ犬ヲ手近ナ所デ鞭打及愛撫ノ手ノ届ク範圍デ行フノガ適當デアアル

若シ遠ク離レタ位置ニ犬ヲ座ラセタ時ニハ『善シ』ト云フ事ヲ避ケルノデアアル、夫ハ賞讚ノ聲ヲ掛ケルト犬ハ喜ンデ訓練者ノ手下ニ走テ來ルカラデアアル

第三節 前 進

聲符 『前へ』

視符 右手ヲ高ク頭上ニ舉ゲテ急ニ前方肩ノ高サニ延バス。

『前へ』ノ聲符ニ依テ犬ヲ訓練者ノ側カラ離レ遠ク前進セシメルモノデ此訓練ノ困難ナ部分ハ訓練者ノ前方一定ノ距離ヲ保チテ前進サセルコトデアアル。此距離ハ一定ノ規定 ナイガ三十歩カラ三百歩位迄(二十米—二百米)トシ、見通シノツク廣イ原等デハ二百米迄、森林ヤ草叢ノ中デハ二十米位ニ短縮スル。

此訓練方法ハ比較的容易デアアル、訓練者ハ初メ歩度ヲ普通ニシテ歩ミ急ニ數歩駈歩ヲシナガラ聲符ト視符ヲ與ヘル、斯クスルト犬ハ理解シテ疾走シ始メルカラ訓練者ハ犬ヲ其儘前進サセテ決シテ呼ビ返スコトヲシナイ、訓練者ト

(10) 圖 插

「進 前」 練 訓 本 基



ノ間ニ一定ノ距離ヲ保
タセル爲ニハ、犬ガ餘リ
遠ク行キ過ギタ時訓練
者ハ其附近ニ身ヲ隠ス
カ又ハ草ノ上ニ伏ス、犬
ハ必ズ訓練者ヲ尋ネ様
トシテ時々後ノ方ヲ振
リ返リ夫レ以上ノ前進
ヲ控ヘル、此ノ方法ヲ繰
返スト一定ノ距離ヲ離
レテ前進スルコトヲ覺
ニル様ニナル。
幼犬デアツテ不安ノ爲
離レルコトヲ好マナイ

場合又ハ成犬デアツテモ近ク計リニ居ル時ニハ「前へ前へ」ト繰返シテ訓練者モ同時ニ走リナガラ犬ヲ勵マシ距離ヲ遠クスルノデアアル。
訓練者ハ牽綱又ハ訓練綱カラ離レタ犬ニ直チニ前進ヲ命ズル事ハ勉メテ避タ方ガ善イト思フ、ソレハ牽綱カラ離スコトガ即前進ト早合點ヲシテ牽綱カラ離シタ時ニハ何時デモ駈ケ出ス習慣ヲツケルコトヲ恐レルカラデアアル、ソコデ一旦「後へ」ヲ命ズルカ又ハ座レヲ命ジテ犬ヲ沈靜セシメ訓練者ノ手中ニ掌握シテカラ前進ヲ命ズルヲ適當トスル、此「前へ」ト云フ事ハ犬ガ非常ニ愉快ヲ感ジテ喜ンデ行フノデ前進ノ命令、後デ直グ外ノ課目「伏セ」(此次ニ説明スル課目デアツテ多クノ犬ハ嫌ナ課目)等ヲ行フト云フ事ハ犬ニ前進ノ氣勢ヲ鈍クスルノデ前進ノ訓練ノ初期ニハ「前へ」ノ後ニ直グ嫌ナ課目ト云フ配合ハ注意シナケレバナラス。
道ノ分岐點等デ方向變換ヲスル時ニハ口笛又ハ視符ニ依ツテ犬ノ注意ヲ喚起シテ新タニ進ム方向ヲ視符ニ依リ(右ノ方ナラバ右手デ其ノ方向ヲ示ス)テ示ス必要ガアル。

第四節 伏臥及呼招

聲符 『伏セ』『來イ』

視符 訓練者ノ伏臥或ハ片手ヲ前方ニ伸シ次ニ靜カニ手ヲ下ゲル(餘リ片手ヲ高ク舉ゲルト前ヘノ視符ニナル)

此課目ハ軍用犬又ハ獵犬等デハ敵兵又ハ鳥獸ニ對シテ用フル機會ノ多イ課目デアツテ之ヲ訓練ノ方面カラ見ルト犬ガ覺エ難イ代リニ訓練者トシテ犬ヲ最モ善ク掌握スル點ニ於テ主要ナルモノデアル。

伏臥ト呼招トハ相關聯シテ教ヘル、而シテ伏臥ニ對スル呼招ハ丁度苦シミニ對スル樂シミト云フ因果關係ノ在ルガ如キ感ジヲ以テ訓練ヲ行フノデアアル。伏臥ハ横臥又ハ仰臥ヲ行ハシテハイケナイ、左圖ノ伏臥ハ先ヅ上出來ノ方デアル。

此訓練ノ方法ハ最初牽綱ヲ以テ始メ左手ハ停座ノ場合ト全ク同様ニ操作シ、右手ヲ以テ犬ノ兩肢ヲ握リ之ヲ前方ニ引キテ伏臥姿勢ヲ取ラス、犬ガ起タウ

(11) 圖 插

「セ 伏」 練 訓 本 基



トスル時ニハ『伏セ』ヲ繰返シナガラ犬ノ體ヲ同時ニ下方ニ壓シテ暫時伏臥姿勢ヲ持續サセ

ル。犬ガ伏臥ノ姿勢ヲ取ツタナラバ犬カラ眼ヲ離サズニ靜カニ牽綱ヲ延シナガラ自分ハ數歩後ニ退イテ最高調ナ愛撫的ナ『來イ』ノ命令ヲ下スノデアアル、此ノ時牽綱ヲ引イテ『來イ』ト云フ動作ヲ促ス様ニスル。

(12) 圖 挿

フ行ヲレセ伏一犬用軍タレラセ屬配=兵候斥



牽綱ヲ用ヒナイ場合犬
ガ訓練者ノ命ヲ待タナ
イデ起立シ又ハ訓練者
ガ犬ニ近ヅキ「來イ」ヲ
言ハナイ以前ニ起ツテ
來ルコトガアルガ此場
合叱責スル爲ニ犬ニ急
速ニ近ヅクハ誤ツテオ
ル、寧ロ反對ニ犬カラ遠
ザカリナガラ「來イ」ト
呼ンデ犬ガ喜ンデ訓練
者ノ手許ニ來ル様ニス
ルノデアル。
呼招ノ訓練中注意シナ

犬ガ手許ニ來タナラバ「善シ」ト讃辭ヲ與ヘテ愛撫スルノデアル。
此訓練ハ犬ニハ相當苦痛デアツテ頻繁ニ行フ事ハ避ケタ方ガ善イ様ニ思フ、
殊ニ發育上ノ欠陥ノアル犬又ハ其他ノ原因デ甚シク嫌フ犬ガアルカラ豫メ
注意スルコトガ必要デアル。
伏臥ノ時間ハ最初ノ時期ハ訓練ノ牽綱ヲ延バシテ靜カニ後退シ得ル程度ノ
極メテ短カイ時間トシ、次ニ牽綱ヲ用ヒテ漸次時間ヲ延長シ訓練者ノ發スル
「來イ」ノ命令ニ依ツテ始メテ起立スル程度ニ到達シタナラバ全然牽綱ヲ用
ヒルコトナク「伏セ」ヲ命ズル、犬ガ起立シヨウトシタ時ニハ「伏セ」ヲ繰返シ
テ之ヲ制シ訓練者ハ其位置ヲ漸次後方ニ遠ザカル。
牽綱ヲ用ヒナイ訓練ハ最初ハ一般ノ訓練ト同様極ク近距離カラ始メ馴レル
ニ從ツテ距離ヲ増シ終ニハ叢蔭等ニ身ヲ隱シナガラ遠方ヨリ「伏セ」ヲ命ズ
ル程度ニ訓練ヲ進メル。
視符ノ要領ハ前回ニ云ツタ通り片手ヲ前ニ舉ゲ靜カニ下ロス動作ヲ明瞭ニ
シテ犬ガ理解シ易イ様ニ實施スルノデアル。

ケレバナラナイコトハ、呼招ニ依ツテ手許ニ來タ犬ヲ直チニ繋グトカ或ハ非常ニ困難ナル課目ヲ實施スルトカ或ハ叱責鞭打スルト云フ様ナ事ヲ實施スルノハ訓練者ニ對スル絶對信頼ノ觀念ヲ薄クスルノ結果ニ陥ルコトニナル、即チ呼招ニ次デ強制的ノ賦課ト云フ意味ヲ感ジサセテ犬ニ訓練者ノ手許ニ早ク走ツテ行クコトハ不利デアルト云フ感ジヲ持タセルカラデアアル。

呼招ヲ命ズル以上ハ犬ガ來タナラバ犬ニ精神的ニ喜悅サセルタメ賞讃愛撫ノ總テノ手段ヲ盡スト云フコトガ必要デアアル、又『來イ』又ハ口笛ニ依テ犬ガ直チニ呼招ニ應ジテ來ナイ又ハ來ル動作ガ非常ニ緩イト云フ様ナ犬ハ全然軍用犬トシテハ價値ノナイモノデアアル、其原因ヲ探シテ見ルナラバ訓練者ニ犬ガ絶對信頼シテ居ナイ場合『來イ』ノ呼招ノ次ニ犬ノ嫌ナ課目ヲ行フノ豫感ノアル場合又ハ全然犬ガ不機嫌又ハ怠惰ノ場合等デアアル、此終ノ場合ハ如何ナ訓練方法ヲ用フルカト云ヘバ、其犬ニ未知ナ他ノ兵ニ鞭ヲ持タセテ訓練者ハ『來イ』ト命ズ、犬ガ直チニ從ハナイ時ハ鞭打ヲ與ヘルノデアアル、此時訓練者ハ續イテ『來イ』ト呼ンデ犬ト反對ノ方向ニ走ルノデアアル、犬ハ悲鳴ヲ擧ゲ

(13) 圖 挿

—1 來¹ 練 訓 本 基



テ訓練者ノ愛手ヲ得ヨ
 ウト走ツテ來ルカラ此
 ノ場合充分ニ犬ヲ愛撫
 スルノデアアル。

(14) 圖 插

「脚」 練 訓 本 基



第五節 持 來

聲符『持テ來イ』『脚へ』

『出セ』

視符 ナシ。

此訓練ハ軍用犬、獵犬ニ
ハ搜索勤務ノ豫備訓練
トシテ是非實施スル必
要ノアルモノデアル。
其方法ハ訓練者ノ聲符
ト共ニ投ゲタル物體ニ
向ツテ直ニ走リ之ヲ捕
ヘテ咬噬スルコトナク
再ビ速カニ訓練者ノ許

(15) 圖 插

「出」 練 訓 本 基



ニ持來スモノデアル、犬
ガ訓練者ノ前ニ來タナ
ラバ物體ヲ口ニシテ靜
カニ停座シ『出セ』ノ號
令ヲ待ツテ之ヲ訓練者
ノ手ニ與ヘル如ク訓練
スルノデアル。

本練習ハ忍耐ト熟練ト
ガ必要デアツテ次ニ項
ヲ分ケテ之ヲ説明スル

(イ) 訓練者ノ手

ニヨリ物體

ヲ與ヘルコ

ト。

物體ハ骨片或ハ木片等デ犬ガ訓練者ノ手カラ之ヲ取ラウト希望スル様ナ物ヲ選ブノガ適當デアアル。

最初訓練者ハ犬ノ精神ヲ衝動サセテ置クコトガ必要デアアル、即チ犬ガ上機嫌デアツテ嬉戯シ或ハ跳走ヲ欲スル時ハ最モ之ニ適合シタ時機デアアルカラ訓練者ノ戯弄ニ乗ツテ該物體ヲ取ラントスルノデアアル、茲ニ於テ訓練者ハ「唧へ」ト呼ビツツ右手ヲ以テ物體ヲ犬ノ口中ニ靜カニ入レ同時ニ左手ヲ下顎下ニ當テ口ヲ開カス様ニスルト同時ニ頭部ヲ少シク高ク舉ゲルノデアアル、斯クスル時ハ物體ヲ容易ニ口中ニ保チ得ルバカリデナク、持來ニ際シテ頭部ヲ良イ位置ニ保持スルコトニ慣レサスコトガ出來ル、茲ニ於テ右手ヲ以テ「善シ」ト言ヒナガラ頭部ヲ撫デテ其頭ノ姿勢ヲ矯正スルノデアアル。

初メ犬ハ長ク物體ヲ口ニスルヲ欲シナイカラ犬ガ自己ノ意志ニ依リ物體ヲ口カラ放ソウトシタ瞬間ニ訓練者ハ「出セ」ト呼ブト犬ガ喜ンデ訓練者ニ渡スノデアアル、此練習ヲ行フ時ハ數回右ノ操作ヲ反覆シテモ差支ハナイガ呼招ノ場合ト同様決シテ強制的ニ之ヲ實施シテハナラヌ、又一度口ニシタ物體ヲ

放スコトヲ好マナイ犬ガアルガ此場合ニハ左手ノ指ヲ概ネ犬齒ノ附近ニ當テテ之ヲ壓シナガラ「出セ」ト呼ビ右手ヲ以テ、物體ヲ口ヨリ放サセ、出セバ直チニ愛撫スルノデアアル、時トシテハ物體ヲ放スコトヲ全然好マヌモノモアル、其時ハ停座ヲ命ジ左手ヲ以テ犬ノ口吻ヲ高ク舉ゲテ出サセルノデアアル、靜カニ停座サセテモ尙物體ヲ口ヨリ放サヌ時ハ却ツテ之ヲ愛撫シ自然ニ放サセル様ニシテ決シテ強制的方法ヲ講ゼヌ様ニスルノデアアル。

(ロ) 物體ヲ地床上ヨリ取ラシメルコト

幼犬ハ常ニ地上ヲ匍ヒ或ハ轉ブモノ、例ヘバ昆蟲、蛙、球等ヲ搜索シ此等ヲ捕獲シ其所有者ト爲リ嬉戯スルノヲ好ムモノデアアル、故ニ犬ノ此先天性ヲ利用シテ訓練スルノハ犬ヲ調教訓練スルニ最モ良手段デアアル、即チ木片、骨片等ヲ投ゲ犬ヲシテ之ヲ捕ラセ、之ヲ捕ヘタナラバ「善シ」ト稱シ物體ヲ口ニ支ヘテ靜止セシメ暫時其儘ノ姿勢ニ置キ、次デ「出セ」ト命ジ其動作中常ニ賞讃シテ決シテ強制的行爲ヲ爲シテハ不可ナイ、若シ犬ガ物體ヲ捕ヘル意思ガナイトキハ物體ヲ口中ニ入レテ犬ニ該物體ヲ支持スル練習ヲ行ハセ而シテ常ニ愛撫

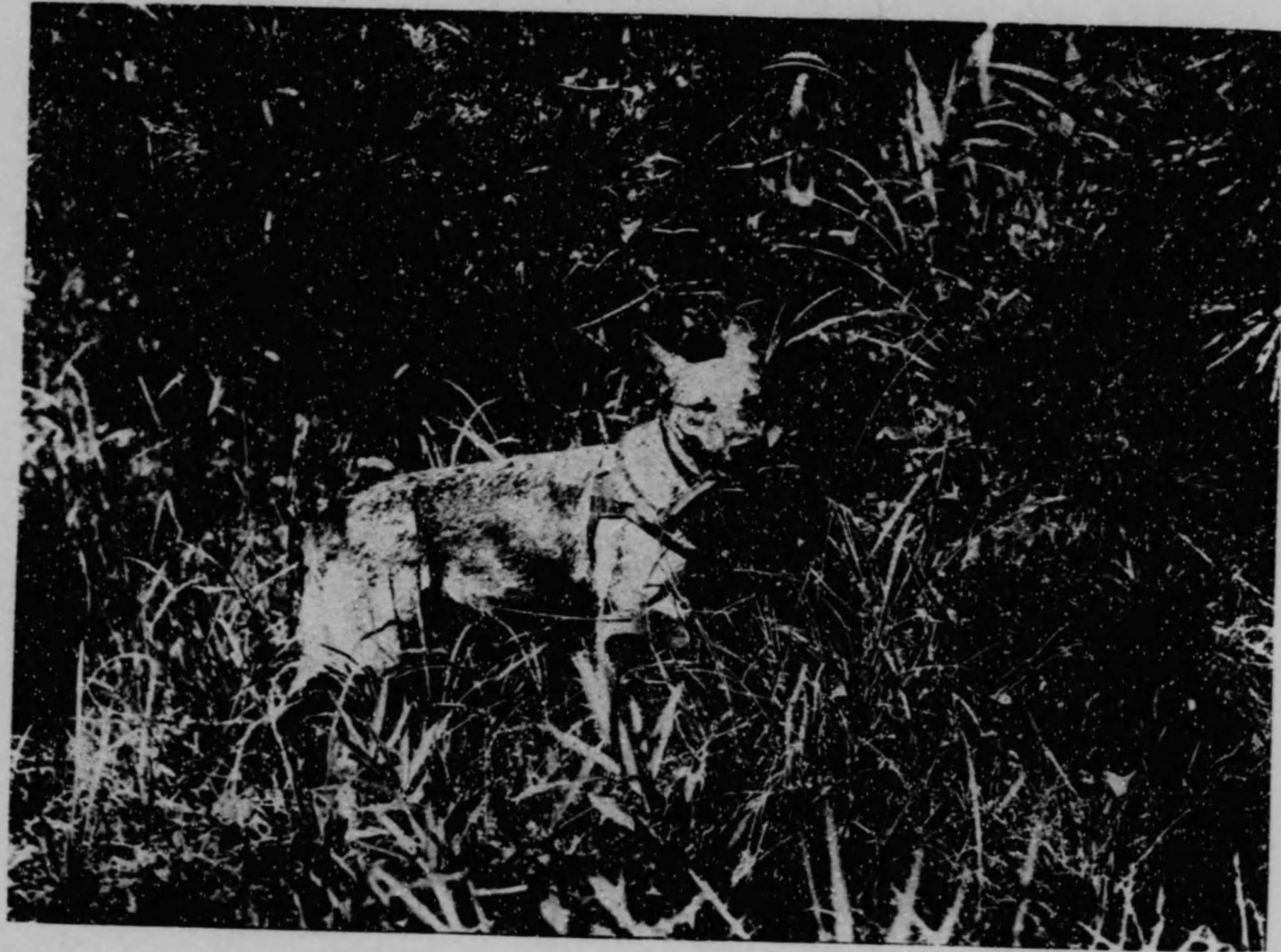
的ニ訓練シテ決シテ不快ノ感ヲ與ヘナイコトガ肝要デアアル、若シ嫌フ様ナ素振リガ見エタナラバ此練習ヲ中止スルコトガ必要デアアル、況シテ犬ニ苦痛ヲ與ヘルガ如キ事ハ絶對ニ之ヲ禁ジナケレバナラナイ、前記(イ)(ロ)ノ訓練ハ多クノ犬ニ於テ容易ニ之ヲ行ヒ得ルモノデアツテ習得困難ヲ感ジル場合ハ甚ダ稀デアアル。

(ハ) 物體ヲ直チニ持來ラスルコト

犬ハ『持テ來イ』ト命ゼラレタナラバ遲疑スルコトナク直チニ物體ニ向テ疾驅スル様ニ訓練セネバナラス、之ガ爲ニハ訓練者ハ先ヅ自己ノ傍ラニ犬ヲ停座セシメ頸索ヲ把ツタ儘右手デ物體ヲ投ゲ『持テ來イ』ト號令スル迄犬ヲ放ツテハ不可ナイ、此際注意シナケレバナラナイコトハ『持テ來イ』ト號令ヲ下ス瞬間ニ訓練者ハ如何ナル場合デアツテモ自己ノ體ヲ動カスコトナク令スルト云フ事デアアル、何故ナラバ犬ノ觀察力ハ頗ル鋭敏デアアルカラ訓練者ノ體ガ移動シタナラバ犬ハ之ヲ視符ト見誤リ其後ハ單ニ此ノ視符ニノミ依リテ動作スルガ爲ニ往々『持テ來イ』ト命ジナイ前ニ疾驅スルニ至ルカラデアアル。

(16) 圖 挿

(圖方ルス用應ヲ練調此)據運其及索搜ノ筒信番



犬ガ眞摯ニ地上カラ物體ヲ採リ暫時之ヲ口中ニ支持スルコトヲ認メタナラバ訓練者ハ全速力ヲ以テ犬ヨリ遠ザカル様ニスル、但シ初メハ距離ヲ短クシ漸次其距離ヲ延長スルノデアアル、勿論此際犬ハ直チニ訓練者ヲ追フカラ必要ニ應ジテハ遁ゲルカ或ハ犬ノ眼ヲ眩惑サセテ其近接ヲ妨ゲルノデアアル、犬ガ物體ヲ持テ訓練者

ノ許ニ來タナラバ、先ヅ之ヲ賞讃愛撫シ停座ヲ命ジタル後暫時物品ヲ口ニ保持サセ、次イデ『出セ』ト命ジテ之ヲ受領スルノデアアル、此際犬ニハ毎回必ズ『出セ』ノ號令ヲ待チテ持來物ヲ訓練者ニ渡ス様ニ訓練スルコトガ必要デア
ル、而シテ犬ハ往々ニシテ持來タ物體ヲ未ダ『出セ』ト命ジナイ先キニ口カラ放スコトガアルガ、此ノ矯正法トシテハ犬ガ訓練者ニ近付キ物體ヲ口ヨリ放シタナラバ侮辱的音調ヲ以テ『不可ナイ』ト呼ビ物體ヲ再ビ犬ノ口ニ咬マセルノデアアル、斯クスルコト數日乃至數週ニ及ベバ犬モ多少之ヲ感ジテ理解スル様ニナルカラ『出セ』ニ先立チ口カラ放シタトキハ更ニ『持來イ』ト命ジルノデアアル、此様ニスルト『持來イ』ト聞クヤ直ニ物體ヲ拾ヒ上ゲルニ至ル、此際訓練者ハ最モ仔細ニ犬ヲ觀察シ些少ナリトモ犬ガ物體ヲ取ラウトスル意思が見エタナラバ、大イニ之ヲ賞讃シテ高ク愛撫的ニ『持來イ』ト呼ビ犬ノ精神ヲ鼓舞スルノデアアル、又反對ニ物體ヲ取ルヲ嫌避スル様ナ表徵ガアレバ威嚇的ニ『不可ナイ』ヲ以テ之ヲ懲戒スルノデアアル、元來犬ハ先天的ニ此ノ練習ニ應ジル能力ヲ缺イテ井ルモノハナイカラ沈著ニ熱心ニ訓練ヲシタ

ナラバ必ズ成功スルノデアアル。

又時トシテ一度捕捉シタモノヲ放ス事ヲ嫌フ犬ガアル、斯ノ様ナモノニハ左手ヲ口ノ下ニ當テ拇指ト中指ヲ以テ唇ヲ壓スルト疼痛ノ爲口ヲ開キ物體ヲ放ス様ニナル、又持來セル物體ヲ咬噬スルモノモアルガ之ハ絶對ニ禁止スルノデアアル、訓練者ハ犬ヲ自己ノ前ニ停座サセ若シ咬噬ヲ始メタナラバ直チニ掌ヲ以テ口ヲ下方ヨリ上ニ向ケテ輕ク叩クノデアアル、然ルトキハ咬噬ヲ止メ單ニ口中ニ支持セシメルコトガ出來ル。

此(ハ)ノ練習ハ一回ノ課業中ニ一乃至二度成功スレバ訓練者ハ満足スベキモノデアアル、若シ之ニ多クヲ希望シ練習ヲ強要シタナラバ直チニ此練習ニ對スル趣味ヲ失フ許リカ却テ嫌フ様ニナルノデアアル、訓練者ハ此課程練習中ハ僅少ノ進歩ヲ以テ満足シ隱忍自重シ以テ大成ヲ期スルノデアアル。

第六節 猥ニ食物ヲ採ラナイコト

知ラナイ者ノ手カラ與ヘル食物、又ハ地上ニ落ちてキル食物、時トシテ故意ニ

犬ヲ毒殺スル目的デ道路、廣場等ニ置カレタ食物ヲ絶對ニ犬ガ採食シナイト云フ習慣ハ軍用犬許リデナク各種ノ役務ニ用フル犬ニモ極メテ必要ナ訓練デアアル。

此本能ヲ除去スル訓練ハ最モ嚴格ニ且間斷ナク機會ヲ捉ヘテ訓練スルコトガ大切デアツテ訓練者ノ與ヘル食物以外ニハ食物ヲ採ラザルコトヲ第二ノ天性トスル程度ニ至ラシメル事ガ必要デアアル。

其訓練ノ方法ハ次ニ述ベル階梯ヲ經テ行フ時ハ比較的容易ニ效果ヲ收メルコトガ出來ルノデアアル。

(イ) 犬ガ訓練者ノ許可ヲ得テ採食スル習慣ノ附與

幼犬ノ時カラ犬ノ前ニ食物ヲ持ツテ行ツタナラバ、直チニ與ヘルコトナク先ヅ停座セシメ食物ヲ前ニシテ食ベナイデ忍耐スル時間ヲ置キ次デ食ヲ採ラセルノデアアル。

此際許可ナク直ニ食物ヲ採ラウトスル時ハ牽綱ヲ引キ「不可ナイ」ト制シ一旦停座セシメテ暫時ノ後「宜シ」ト許可ヲ與ヘテ食ヲ採ラセルノデアアル、此食

物ヲ前ニシテ停座スル時間ハ最初ハ餘リ長ク犬ヲ忍耐セシメルコトナク逐次ニ時間ヲ延長シテ最後ニハ食器ヲ出シタナラバ其前ニ犬ガ静座シテ許可ヲ待ツニ至ラシメルベキモノデアアル、又一ノ方法トシテ犬ノ眼前ニ肉片ヲ示シ犬ガ近付キ食セントスルヤ「不可ナイ」ト呼ビ、尙食セントスルヤ口ヲ輕ク手ニテ叩キ暫時忍耐セシメ許可ヲ得テ始メテ食物ヲ採ルニ至レバ毎時訓練者ハ賞讃ノ言葉ヲ與ヘテ愛撫スル方法モアル。

(ロ) 食物ノ殘物、拾ヒ物ヲ採食セシメザルコト

此訓練ハ重要中ノ重要課目デアアル、是非共完全ニ訓練ヲ實施スル必要ガアル其方法ハ野外ヲ散歩スル際犬ヲ連行シテ若シ犬ガ食物ヲ見出シ(若クハ豫メ肉片ヲ準備シテ野原ニ放置ス)之ニ近付キ食ベ様トシタナラバ訓練者ハ機ヲ失セズ「不可ナイ」ト威嚇スルカ或ハ投石スルト同時ニ大聲デ「不可ナイ」ト呼ブノデアアル、犬ガ命令ニ直チニ従フ場合ハ差支ナイガ若シ採食シテ仕舞ウタ場合ニハ其儘ニ放置スルノデアアル、此際訓練、懲戒シテモ何等效果ノナイ事ハ既ニ前ニ述ベタ通りデアアル、又口ニ啣ヘテ居ル場合ハ「持テ來イ」ノ訓練ノ

終ツタ犬ナラバ「出セ」ノ命令ニ依リ口ヲ開カセ食ヲ取り上ゲルコトが出来ルガ尙一層訓練ノ進ンデ居ル犬ニ對シテハ唯「不可ナイ」ノミデ口ニ啣ヘテキル食物ヲ取り上ゲルコトが出来ル。

若シ此際散歩中ニ牽綱(革)ヲ用フルカ又ハ訓練者ノ後方ニ犬ガ隨行スル場合ニハ容易ニ此ノ訓練ヲ實施スル事ガ出来ルノデアツテ食物ヲ犬ガ見付ケテ食ベ様トシタ瞬時ニ「不可ナイ」ト呼シテ急ニ牽革ヲ引クカ或ハ既ニ訓練ノ終ツテキル犬ニ對シテハ停座又ハ伏臥ヲ命ジテ拾ヒ喰ヲ制スルノデアアル

(ハ)食物ニ依ル矯正法

是ハ小サナ發條ヲ用ヒタ捕鼠器ニ食物ヲ付シテ野外ニ準備シテ置キ、犬ニ其食物ヲ食ベサセルノデアツテ、犬ハ食ベ様トスル際發條ニ依リ鼻先ヲ強ク彈カレ速座ニ懲戒ヲ受ケルノデアアル。

又他ノ方法ハ芥子(西洋芥子ヲ可トス)又ハ唐辛(西ノ方ノ國デハ「ナンバン」ト呼ンデキル)ノ粉末ヲ肉塊等ノ食物ノ内部ニ挿入シテ放置シ犬ニ食サスノデアアル、此際犬ハ二、三回咀嚼スルヤ忽チ芥子ノ爲ニ苦シムノデアツテ最モ矯

正ノ効果ノ著シイ方法ノ一ツデアアル。

以上述べタ方法ハ適當ニ日ヲ置イテ何回モ行フ事ガ必要デアツテ一般ノ訓練ガ相當進ンダ犬ニ對シテハ野外ニ於ケル各種方面ノ使用ノ間ヲ利用シ訓練者ハ(又ハ助手ニ依ツテ)食物ヲ以テ犬ヲ誘惑スルト同時ニ一方ニ於テハ前記ノ方法ヲ以テ矯正スルノデアアル、此際訓練者ハ風下ノ叢ノ裡ニ身ヲ潜メ犬ニ所在ヲ發見セラレナイコトガ必要デアアル。

第七節 音響及光ニ慣レサスコト

犬ヲ音響ニ慣レサス方法ニ就イテハ獵犬等ニアツテハ大分論議セラレテキル様デアアルガ、此訓練ハ一言ニシテ盡スナラバ仔犬ノ時カラ音響ニ漸進的ニ馴致スルコトニ歸著スルノデアアル、軍用犬ニ在ツテハ火砲、機關銃發動機ノ音響等ハ勿論機關銃彈ノ反跳シテ土烟ノ揚ガル間デサヘ任務ニ向テ一意馳驅スル程度ニ至ラシメルノデアアル。

元來犬ハ先天的ニ音響ヲ恐レルモノデハナイ、恐レルト云フノハ唯訓練ノ方

法が適當ニ實施セラレナイ時ニ起ルノデアツテ、多クハ功ヲ收メルニ急デア
ツテ階梯ヲ經ズシテ最初カラ不意ニ強大ナル音響ヲ聞カシメル等ニ依ルノ
デアアル、一度犬ガ音響ニ恐怖スルニ至ツタナラバ全然其矯正ハ不可能デア
ルトヲ附言シテ置ク。

元來幼犬ハ一般ニ周圍ノ情況ニ無頓着デアルカラ此時期ニ軍隊ノ射撃場附
近又ハ自動車ノ往來ノ激シイ街頭等ニ連行シテ各種音響ヲ聞カセ訓練目的
ノ達成ヲ計ルノデアアル、此見地カラ英國ニ於テハ軍用犬訓練所ノ位置ハ砲兵
ノ射撃場附近ヲ適當トスルトサヘ言ハレテキル、唯音響ノ程度ト如何ナル位
置迄近接スルカト云フコトハ、訓練者自身ノ感能ト犬ノ状態ニ依リ判斷スル
ヨリ他ニ適當ナ方法ハナイノデアアル、忍耐ト考慮トハ此訓練上最モ必要ナコ
トデアツテ進度ヲ急速ニスル事ト最初カラ餘リニ鋭キ音響ニ接シサセルコ
トハ大禁物デアアル。

又音響ニ對スル訓練ヲ長時間實施スル際ニハ時々犬ニ音響ニ對スル注意ヲ
忘レサセルコトガ必要デアアル、即チ訓練能率向上ノ爲訓練者ハ長時間此訓練

ヲ行ツタナラバ音響ノ聞エル位置ヲ變位スルカ或ハ全ク音響ニ對スル觀念
ヲ去ツテ犬ト嬉戲愛撫又ハ自由ニ遊バセルト云フ様ニシテ其後再ビ行フト
云フコトガ必要デアアル。

光ニ對スル訓練モ亦音響ト相關聯シテ訓練スベキモノデアツテ特ニ銃砲ノ
發火ノ際ニ於ケル火光ハ勿論砲彈ノ炸裂及地雷ノ爆發時ノ火光、夜間懐中電
燈、照明彈、火箭等ニ對シテ習慣ヲ附與シ次デ野戰電燈等ノ數萬燭光ニモ充分
活動シ得ル習慣ヲ附シ、又煙(黃燐)又ハ無水硫酸等發煙劑ニ依ル)及瓦斯等(一
時性ノ毒瓦斯)ニ對シテモ十分犬ヲ訓練スルコトガ必要デアアル、此訓練ノ方法
ハ音響ニ對スル訓練ト概ネ同一デアツテ比較的周圍ノ状態等ニ無關心ナ幼
犬ノ時代カラ開始シテ漸進的ニ訓練ヲ進メル必要ハ音響ニ比シテ特ニ大ナ
ルモノガアル。

其一ツノ方法ハ地雷ニ對シテハ軟土ヲ撰定シ三乃至四米ノ距離ニ二、三十糎
ノ深サニ火藥ヲ埋メ導火索ヲ以テ其火藥ヲ連結シ成ルベク犬ヲ(附近ニ在ル
訓練者ハ危險ヲ感ゼザル程度)近ク位置セシメ爆發スルヤ大ニ犬ノ勇氣ヲ鼓